

万国の労働者、被抑圧民族は団結せよ！

# ボルシェヴィズム通信 第 8 号

1973. 2. 1

## 特集 労働者解放闘争の 新しい力

日中国交回復の意義と田中政府  
労働戦線における基本任務

釜ヶ崎解放に向けて

職場からの闘いの声

「革命的潮流の勝利」  
をめぐって

学生運動に於る日共・警察の  
新たな結託

8・25共闘会議の性格と任務  
相模原・その他

レーニン研究会政治機関誌

# ボルシェヴィズム通信 第8号

1973. 2. 1

- ボルシェヴィズムの旗をかかげ「幼年期」の左翼  
反対派的政治を一掃して真の革命党を組織しよう！
- 大衆路線を活動の基礎とし、軍事路線を堅持し、  
両路線を支える鉄の団結をかちとろう！
- 社会主義と労働運動を結合して、資本主義的奴隷  
制度を廃絶しよう！

レーニン研究会政治機関誌

# I 日中国交回復の歴史的意義と 田中政府の反動的 성격

九月二十九日、中華人民共和国政府と日本政府は北京において「共同声明」を発表し、同日大平外相の「日台条約失効宣言」によって、国交を樹立した。「共同声明」本文の骨子は次のようなものである。

「一、日中兩國の不正常な状態は、共同声明の発表で終了。二、日本政府は中華人民共和国政府が中国の唯一の合法政府と承認。三、中国は台湾をその不可分の領土と声明。日本はその立場を十分理解し承認する。四、略。五、外交関係樹立と大使交換を決定。六、兩國は平和五原則と国連憲章にもとずき、紛争解決で武力に訴えないことを確認。七、兩國はアジア・太平洋地域で覇権を求めない。八、略。」

わが会は、革命中国との国交回復が、日本労働者人民の政府によってではなく、帝国主義政府たる田中政府、侵略者達の手によって実現されたことを極めて屈辱的なものと考へるとともに、日本の労働者人民がこの日中国交回復の歴史的意義を次に理解することを訴へる。

(4) 日本政府の中華人民共和国承認と日台条約失効宣言は、日本帝国主義が、戦後一貫してアメリカ帝国主義とともに堅持してきた政策、中国封じ込め政策、中国敵視政策が破綻し、中国革命はついに圧殺することができなかったこと、一九二七年開始された日本帝国主義の中国侵略を不屈の抗日戦争によって打ち破るとともに、蔣介

石一派を打倒し、一九四九年、労働政府を樹立して、勝利のうちに社会主義を建設してきた中国人民の、台湾解放、中国革命の完遂へ向う前進が何ものにも押しとどめ得ぬ正義の闘いであることを示したものである。

(5) そして復活した日本帝国主義の中国再侵略を著しく困難なものにし、日米帝国主義を頭目にしたアジア革命体制の一角を担う蔣介石一派に、昨年の秋の国連からの追放に続いて一層深刻な動揺をもたらしている。

(6) 中国共産党は、文革後、反米帝反日本軍国主義の原則の下に積極的な外交を展開し、インドシナ朝鮮人民に有形無形の支援を与える一方、社会帝国主義との対決及び帝国主義心臓部労働者人民の闘いとを結合を求めてきたが、日中共同声明は、かかる外交政策にもとずいて実現されたものである。

(7) 以上のことから明らかのように、日中国交回復は両国人民の団結と友好を前進させる上で極めて有利な客観的条件をつくり出したものである。

日本労働者人民は、かかる日中国交回復の歴史的意義を確認し、プロレタリア国際主義の下、米帝追撃・日帝打倒をめざして全ゆる戦線に更に奮闘しなければならぬ。

しかし、日中共同声明ですべてが解決されたわけではない。

九月三日発表されたニクソン・田中ハワイ会談「共同声明」は、「安保条約の堅持とその円滑な実施」を謳い上げ、訪中後大平外相が「六九年佐藤・ニクソン声明と日中共同声明は矛盾しない」と述べるなど、より侵略反革命的に再編強化された日米安保同盟の下で「アジア・太平洋地域での覇権を求めるといふ日本帝国主義の基本戦略は何らかわっていないのである。」

日台条約失効宣言の翌日には「外交関係の解消。経済等実務上の関係は維持」することを発表、米國務省の「日米共同声明の台湾条項は削減しない」との声明とあいまって日中共同声明第三項を全くの空文句にしようとしていることが明らかになった。

また、沖縄返還に伴って日帝が防空識別圏に組み込み略奪せんとしている釣魚台（中国領）についても何ら解決されていない。

以上のことから明らかのように、日本帝国主義・田中政府は、佐藤政府の中国敵視政策から「友好」へと転換したかに見せながら、その実はアジア革命戦略の手段に過ぎず、中国を平和共存のもとに引き入れることを期待して、日「韓」台反革命体制の維持、強化をテコに朝鮮やインドシナ地域に対して、より一層密集した侵略と反革命を行せんとする恐るべき野望を秘めているのである。又、国内的には、日中友好ムードをふりまき、独占資本の強権的支配への労働者人民の怒りを慰撫し、小ブル平和主義的野党をも抱込みつつ、城内平和を

確立し、一氣に侵略反革命体制を構築しようとしているのである。

3

ブルジョア新聞や民社党、公明党、社会党はまんまとこのワナに落ち込んだ。彼らは口を揃えて「田中外交の成果」を讃え、「平和外交の時代」とか、「冷戦構造の緩和」などと思ひ込み、「片手に友好、片手に侵略」を柱とする田中政府の危険な野望に全面降伏し、果ては「わが党こそ国交正常化の架橋」とその成果の競い合いをするという底なしのおめでたさを發揮している。

一方、九月十日、突如「日中国交回復はわが党の一貫した主張」であるとし、「平和五原則による復交を」と主張しはじめた代々木「共産党」は、共同声明発表後「わが党の主張に二十三年遅れて田中がたどりついた」ともとして、事実上田中政府の対中政策を讃美し、一方「中国共産党の大國主義的干渉」は「平和五原則に反する」と専らその鋒先を中国に向けている。

昨秋日中問題等、佐藤政府の対外的対内的危機が醸成された際、「沖繩問題優先」を楯に問題を回避し佐藤を援助したばかりか「連合赤軍事件」を契機に「毛沢東盲従分子」國民の敵「大キャンペーン」を張り、日帝の釣魚台略奪にも積極的にこれを支持し、「中国」社会植民地主義」なる悪質なデマ宣伝に狂奔しているのである。

彼らは、國際共産主義運動の相互批判の原則を、ブル

ジョア民主主義の論理である「内政不干渉」を唯一の楯に回避し「中国に平和五原則を守らせる」とブルジョアジーに頼み込むという腐敗ぶりを見せているが、ここにこそ彼らの自主独立路線—國際共産主義運動の分解と変質の時代における修正主義者の官僚的自己保身のためのもの—の反動性が自己暴露されており、ブルジョア民主主義—ブルジョア独裁の崇拜者になり下がりが、確実に社会排外主義への道を歩みつつある自己の本質を明瞭にしたものにほかならない。

こうした議会内野党の全面降伏と反動的対応の中にあつて、わが革命的左翼が沈黙と冷笑を以て応えていることは重大である。とりわけ革共同兩派をはじめ観念的反スタ主義者が、その國際路線の欠如、中国革命への冷笑的態度ゆえに、問題の所在すらつかめず一切沈黙を守っていることは、彼らの思想の内部空洞化がどこまで進行しているかを物語っている。日中国交回復を機として、日本の圧倒的多数の労働者大衆が、中国侵略の尖兵と化した過去の自分達の影を見い出さんとしており、しかも、田中政府が欺瞞的な対中二面政策を展開し、日本帝國主義が新しいアジア反革命戦略を打ち出している中で、日中国交回復問題に沈黙し、避けて通らんとする試みは、極めて反動的なことである。

わが会は結成されて以来日本帝國主義のあらゆる「二つの中国策動」に反対し、「中華人民共和國即時承認！日台条約破棄！」のスローガンを掲げ、日本帝國主義

打倒のための全戦線の中に持ち込み、奮闘してきたが、こうしたわが会の方針と実践の革命的意義は、観念的的反スタ主義者の破産をも伴いつつ、ますます明らかとなり、革命的左翼の混乱を突破し再編しうる勢力が一体どこに存在するのかが鮮明なものにしているだろう。

4

田中政府は「コンピュター付ブルトージャー」とか「決断と勇氣の人」などというマスコミの晴れやかな宣伝とともに登場し、「佐藤亜流」の衣裳を脱ぎ棄てたかのようになつて言われている。だが、田中政府は果してあの佐藤の反動的対外、対内路線から袂別したものであろうか？断じて否である。

(イ) 田中政府の「日中友好」がベテンであり、日米安保同盟再編強化という従来の路線（佐藤—ニクソン共同声明路線）に何のかわりもないことは、ハワイ会談によつて示された。住民の反対を機動隊の血の弾圧によつて押しつぶして強行された相模補給廠からの米軍戦車装甲車の連統搬出入に示された日本帝國主義の一層のインドーナ侵略加担協力を見るならば、このことは一層明瞭である。

また沖繩返還後の自衛隊の大量派兵は年内に数千名に達する計画であり、日本帝國主義による沖繩民衆の生活と諸権利の破壊を伴った沖繩の侵略前線基地化の策謀は着々と押し進められており、十月九日には四次防を正式

決定し、更に五次防の策定も示唆するなど、独自の軍自力の飛躍的強化にやっきになっている。そしてそれを支える排外主義イデオロギーの宣伝育成は「國益國防論」等ますます強化されており、田中政府は「平和と友好の道」どころか「侵略と戦争の道」をまっしぐらに突き進んでいることは疑う余地がない。

(ロ) 国内的には議會制民主主義の形骸化、官僚、行政権の肥大化、司法反動、警察—機動隊の圧倒的強化、自衛隊による治安体制の強化等、官僚的警察的専制支配の強化が押し進められている。沖繩労働者の既得諸権利の剝奪、国鉄はじめ官公労労働者のスト権奪還の闘いに対する弾圧と反動的対応。刑法改悪、保安処分新設。入管二法、外国人学校法案に対する在日朝中人民への差別分断支配の強化、部落大衆に対する差別分断支配。國民総背番号制計画等。人民のブルジョワ的諸権利さえ奪いつくすこれらの策動は、すべて労働者人民からの擄奪、収奪を強化し富み太ろうとする独占資本の飽くことなき利潤追求を実現せんが為のものである。

(ハ) こうした独占資本による官僚的警察的専制支配の強化とその下での強擄奪、収奪は、一握りの独占資本に膨大な利潤を集中させる一方、「一年使い捨て」とも言われる程の労働条件の悪化、低賃金をもたらし、インフレ政策と物価騰貴、公共料金的大幅引上げはそれに拍車をかけ、労働者とその家族の生活はますます窮迫している。農業基本法制定以来の農民切捨て政策は頂点に達し、農

村の荒廃と農民の窮迫は、「出稼ぎ」労働者の大群を都市へ低賃金労働力として送り込み、家族離散など多くの悲劇を招いている。

また公害は、「階級死滅」が叫ばれる程に進行しており、田中政府の看板の一つである「日本列島改造論」はこうしたブルジョワ階級の危機意識を反映した、独占資本の利益を擁護する為の修正に他ならない。

(二) 以上のことからしても、田中政府が徹頭徹尾独占資本の政府であり、帝国主義の政府であることは誰の目にも明らかである。田中政府は佐藤政府の「正統な」後継者であり、一方の手で「日中友好」ムードをふりまきつつ、佐藤が準備した強盗戦争の道を切り拓いて進む「ブルドーザー」内閣なのである。

5

われわれの緊急の任務は明白である。

それはまず田中政府による官僚的警察的専制支配の強化とそれをテコとする搾取、収奪の殺人的強化と対決し、自衛隊沖繩派兵阻止闘争を中心とする沖繩闘争と、田中政府のベトナム侵略戦争加担・協力阻止のベトナム反戦闘争を結合し、米帝追撃、日帝打倒の大道を進撃しなければならぬ。

また、日中国交回復を突破口として中国人民との戦闘的団結を必ず勝ち取り、田中政府の二面政策を粉碎し、日帝の釣魚台略奪を阻止することも、われわれに課せら

れた重大な任務である。

最後にわれわれは必ず日帝心臓部に於て敵の要塞の正規の攻囲を組織し奪取する烈火の実践の指導的核心たる真の革命党建設を勝ちとらなければならない。

★侵略と戦争へ向けた日本帝国主義の対中二面政策を粉碎し、日中国交回復を、日中国人民の戦闘的団結の時代へ！

★田中政府打倒！労働者人民の政府樹立！プロレタリア独裁の勝利！

★アメリカ帝国主義を全アジアから追放せよ！アジア反動の砦！日本帝国主義打倒！

★現代修正主義と革命的共産主義の分裂を更に押し進め、深化し、真の革命党建設の道へ！

★マルクス主義の旗の下に！

## 目次

- I マルクス主義に基礎づけられた労働運動への基本観点
- II 工場、職場における党建設、先進的労働者の組織強化の諸問題
- III 労働組合を労働者の闘いの砦にうち固めるために
- IV 未組織労働者の組織化とその戦闘的戦列のために
- V 党建設、工場細胞建設こそ階級的労働運動の鍵——創意工夫をもって工場、職場に進撃せよ！

## II 労働戦線における基本任務とプロレタリア革命党建設のために

古川 哲

## 1 マルクス主義に基礎づけられた労働運動への基本的観点

労働者階級の自己解放の思想であり科学であるマルクス主義は、決して労働運動の偶然的客ではない。

われわれの労働戦線における活動を勝利させる唯一の条件は、その活動をマルクス主義の革命的原則に基礎づけること、これだけである。

労働運動、大衆運動にとりくむ際、常に次の三つの観点が留意されねばならない。

第一の観点。資本主義の生産、資本蓄積の過程は、搾取方法の手段を発達させ、労働者の労働と生活全般を不断に悪化させる過程であり、資本家の不断の反労働者の攻撃に対抗して、労働者の全ての精神的、物質的利益を誠心誠意守りぬき、常にその闘いの先頭に立つよう心がけること。

日本帝国主義が、沖繩返還など日米安保体制の新段階の下で侵略と戦争政策を強め、国際通貨危機、円切り上げ圧力など資本主義世界の危機の累積を背景に、労働者、勤労人民の生活と諸権利をことごとく破壊し、議会諸政党を体制内化しつついよいよ官僚的警察的専制支配を強化している中で、労働者階級を始めとする全勤労人民の解放の前衛部隊に躍り出つつある革命派は、これらの諸攻撃を一つ残らず粉碎する課題を当然の自己の階級的責

者人民の政府をつくれ！プロレタリア独裁の樹立！」

のスローガンを掲げる必要があるのである。

ところで、労働者のこれらの経済的、政治的、要求をめぐ

る運動は、決して、あらかじめ改良闘争として「終焉」する運命に定められているとは限らない。

たしかに、一定の条件の下では、若干の要求は、資本家の手によって実現される場合もありうるだろう。

だが、剰余価値生産のための生産が社会生活全般の規

定の動機となつてい

る現代日本において、労働強化・労働時間延長を伴わない賃上げ、差別的賃金の廃止、労働災害をなくす保安設備の充実、職場内政治活動の自由、団結権・罷業権の完全な合法性、侵略・反動・民族的抑圧反対などの要求は、実現されるものとして考えられるであろうか。否である。

一般に労働者の切実な要求は、日本帝国主義とその政府の手では決して実現されるものではなく、それは、現情勢でも、内乱期でも一勿論、主要な要求、中心的闘争課題は変化するにしても一、明瞭に掲げられて労働運動は階級闘争として発展しなければならず、それだけではなく、プロレタリア独裁の時期においては、その要求はより発展された内容でもって提起され、労働運動と階級闘争は不断に発展されなければならないものである。

ところで一般に資本と国家による労働条件改善政策は、単に「産業社会の合理的精神にもとづく経済的必然性」(大河内理論)において実現されるものではなく、資本

務として引き受けなければならない。

さて、わが会の労働者に対する当面の政策的課題は次の六つの柱に整理できる。

1. 賃上げと労働時間短縮などに関する課題
2. 反合理化と労働環境改善に関する課題
3. 労働者の自由と諸権利拡大に関する課題
4. 全勤労者の生活と環境改善に関する課題
5. 階級的労働組合に関する課題
6. 安保、沖繩、基地、ベトナム反戦闘争など日米帝國主義の侵略、反動、民族抑圧と対決する課題

この六つの課題は、それぞれの労働者状態、諸要求、階級情勢の特殊性にもとづいて、具体化され、諸課題が正しく結合され、中心課題が設定されねばならない。

更に、共産主義者とその組織は、労働運動の中で、各種の手段を駆使して、労働者の今日の苦悩は、資本主義的搾取の社会的結果であり、条件であること、従って、労働運動は、その根源の廃絶まで進撃しなければならぬこと。

その手段として、全勤労者の先進部隊となつて資本家の国家権力を粉碎して、自己の権力を樹立しなければならぬこと、その為に、労働者は団結し、社民、修正主義諸党、改良主義などの影響を断つて、共産主義運動と結合する必要があること、など訴えていかねばならない。

従って、会は、先の六つの課題のスローガンと結合して、必らず、「日本帝国主義、資本家政府打倒！ 労働

主義的生産が不可避に産み落す労働運動と階級闘争に対する、剰余価値生産の安定的確保を狙いとするものであり、その本質は、資本主義的生産における価値関係は、同時に、資本主義的生産関係であり、階級関係であるという資本主義の根本的矛盾に規定されているものなのである。

だから、資本と国家による労働政策の改善においても、単なる譲歩政策ではなく、労働者階級の肉体的精神的退化を防ぎ、階級的自覚の条件を形成するとともに、労働者階級の解放闘争を抑圧緩和し、改良主義的幻想を育て、資本家支配を貫徹するという二重の機能を果たすものであり、資本家階級がそれに期待するのは後者の機能であるの

は言う迄もない。

特に、資本主義が世界的没落を開始している現代において、資本と国家の労働者への攻撃は、体系的系統的に展開されており、労働者の中の改良主義的幻想は極めて危険なものになつてきている。

しかし、このことは、資本主義のもとで確実にわきおこらずをえない労働者大衆の心からの政治的経済的な社会改良の要求とその闘い(改良闘争に終るとは限らない)を共産主義者とその組織が無視し、観念から天下り、それと無関係に革命運動・労働運動を推めるべきであるなどということの意味しない。

マルクス主義の見地からする改良闘争の意義は、直接には、資本の労働者への精神的肉体的破壊攻撃から労働

者を防衛し、その闘争能力を発揮しうる労働と生活状態をかちとるためのものである。

一日のほとんどが労働時間で占められ、機械の附属物になり、ただ生きることに汲々とせざるをえない低賃金であったり、家族が狭い一つの空間におしこめられる住居環境にありたりすれば、労働者の大部分が、地上の一瞬の幸福を酒や賭事に求め、しだいに生氣を喪失し、愚鈍と無知の状態におちいつたとしても、驚くことはないはずであり、例え、社会主義理論を学習せず、解放運動に興味を示さなくても、誰が非難することができようか。(にもかかわらず、資本主義社会の民衆の悲惨は、こうした逆境にある労働者の中からも、強い精神力と行動力を持った偉大な社会主義的人格を創造してきたのだが。)

改良闘争の発展した意義は、かかる改良闘争を通じて労働者が階級的連帯の感情を自分のものとし、その闘いの真の階級的意義と目的を理解するようになることであり、そして労働者は、改良の結果よりも、この自覚、団結と組織の方が大切であることを知り始めることにある。

従って、労働運動の先頭に立ち、改良主義や社民、修正主義諸党の影響と絶えず闘いつつ、労働者の自覚と組織化のために努める共産主義者とその組織ならば、例え、特定の労働者の闘いが、改良闘争で終わったとしても、そのことをもって即座に敗北とするものではないのである。

さて、以上検討した諸原則を、われわれの綱領問題に

感情を全く顧慮することなく、革命的空白句と紋切型主張、帝国主義は帝国主義だから悪いといった同語反覆的主張を繰り返すことぐらいなら簡単である。それは、愚鈍で面皮が厚ければできることである。

われわれは、必らず、資本家の手代や、社民、修正主義者が労働者に働きかけている閉ざされた会場の入口をこじあげ、大衆の前に立ち、権謀術策を弄しても反労働者分子を追落し、革命的労働者を組織し、実際の大衆行動を組織する力量を体得しなければならぬ。

第二の観点は、「労働者階級の解放は、労働者階級自身の手でたかひとらなければならぬ」(マルクス「国際労働者協会暫定規約」)という労働者階級の自己解放の立場に徹底して立脚し、どんなささやかな要求も、労働者自身の力で闘いとするようにすること、資本家と闘争する中で、労働者を団結させ、自分の頭で解放の条件を考えるように促すこと。

労働者階級の自己解放の立場に立つか、否かは、革命的共産主義とスターリン主義、現代修正主義、或いは、革命的共産主義とブランキ主義、空想的社会主義との革命観における根本的相異点の一つなのである。

現代修正主義者、代々木「共産党」の体質的な反労働者性は、彼等のわが国の権力規定と権力移行の問題に対する態度に浮き彫りされている。その反労働者性の第一の特徴は、当面の日本革命の性質を超主観的に「民族民主革命」と規定し、口先きだけの「反帝反独占」を欺瞞

換言してみるならば、プロレタリア社会主義革命たる日本革命の綱領においても、その形式は、最大限綱領―最小限綱領の形式でなければならぬこと、二段階革命の場合にのみ、最大限綱領―最小限綱領の形式をとるという考えは誤りであり、実践的には有害であるということである。

革命的左翼を根深くおおっている労働者階級の日常的苦悩とその社会的要求を軽視し、内心で嘲笑する高踏派的傾向と、明確なプロレタリア独裁と労働者人民政府樹立の計画を持っていない欠陥は、歪んだ革命観を共通の幹とする二つの枝に他ならない。かかる歪んだ革命観は、革命運動が幼年期にあり、訓練を欠除しており、左翼反対派の政治を克服しえず、革命的活動に計画性がない時代の特有のものであり、実際、どのような大衆闘争にも息もたえだえの絶叫的言辞で位置付けを与えなければ満足しないといった傾向は、革命党を墮落させ、労働者大衆の闘争組織を破壊し、革命的統一戦線戦術をただの政治技術におとしめ、実践的に共産主義運動と労働運動、階級闘争を矮小化させ、狭い政治に落しこめるものなのである。

現代修正主義に抗して革命的共産主義の旗をうち立てんとするわれわれは、こうした革命派の内的偏向を克服し、労働者の利益の真の擁護者になり労働戦線で革命的活動を遂行しうる力量を持たねばならない。

資本の専制支配の貫徹している職場で、大衆の要求と

的に唱え、「自主的平和的日本経済論」によって、アメリカ帝国主義のアジア反革命戦略と結託しつつ、日本の政治、経済、文化、社会生活全般に支配の網をはりめぐらしている日本独占資本家、日本帝国主義を全面讚美し、実践的に「国民」に依拠(?)して、労働者階級と勤労人民の解放闘争に恐怖し、敵対していることである。

その反労働者性の第二の特徴は、七十年十一回大会でそれまでの「敵の出方論」を事実上否定し、最近、不破某あたりが「人民的議会主義」なる珍語で定式化し始めた議会主義路線である。

「暴力革命」か「平和革命」かの対立は、決して、来るべき日本革命における流血の規模をめぐる対立のみに小化してはならない。その対立は、なによりも、労働者階級が、既存の国家機構を粉砕して、自己の将来を自己の力で闘い取るのか否かの対立、即ち、プロレタリア独裁の思想と実践をめぐる対立をその根本的背景にしているのである。

この二つの反労働者性の特徴は、内的に関連し合って、『ボル通六号主張』で指摘されているようにブランキ主義、空想的社会主義と酷似した或る種の「クーデター革命観」、幾百万、幾千万の労働者人民が、資本のから自己を解放するための積極的政治生活、革命生活への参加が完全に欠落した空想的な反動的革命観を産み落しており、ここにこそ、社民化しつつある現代修正主義者の自己解放のための労働者の闘いへの敵対の思想的根

拠があるのである。

従って、代々木「共産党」による前代未聞の六四年四・一九スト破り行為は、偶然ではありえず、その後の労働戦線における彼等の当然の破綻の弥縫策を六八年六中総決議などで政治技術的に図っているが、かかる反革命的行為は、彼等の反動的綱領とそれを支える腐敗した革命思想からの必然的帰結と言えるのである。

(ここで、労働運動、階級闘争、経済闘争、政治闘争のそれぞれの概念とそれらの内的関連について規定しておこう。

代々木「共産党」は、労働戦線において社民や組合主義者に対しては、「民主連合政府」、「民族民主統一戦線政府」構想や「不屈の日本共産党」幻想で一定の「政治的党派性」を押し出していることは見逃せないが、しかし、永遠に内乱とプロレタリア独裁に敵対する彼等のそれは、四・一九スト破りの口実、「経済的要求中心の四・一九ストは経済主義、米帝との政治的対決がない」に典型的なように、せいぜい労働者の経済闘争、政治闘争、両者の内的関連を錯乱して理解するような「政治主義」であったり、或いは又、「経済闘争と政治闘争の正しい結合」と称して、経済的諸要求のスローガンに、時々政治的諸課題のスローガンをただ付け加え、労働者の闘いを単なる票田獲りに押しとどめるものでしかないのである。

そもそも、労働者の経済的要求と政治的要求は、同一は貧困や屈辱、社会的不公正に対する労働者の資本家に対する暴動的抗議、経済闘争として出発しながらも結束した資本、警察や国家権力の敵しい弾圧の中で、それは階級闘争に、政治闘争にならなければならないことを学んできた。

第一の観点で述べたように、資本主義的搾取の結果に対する労働者の切実な社会的要求のための闘争(特に産業資本主義段階では、それは雇用主に対する闘争、経済闘争である。)は、搾取の廃絶にまで進まなければならない。だからこそ、その手段としてプロレタリア独裁を樹立するために、社会革命に先行しなければならない政治革命のために労働者の闘い(経済闘争)は、階級支配の様式を問題にし、階級闘争になることによつて政治闘争になる必要がある。という意味で、又工場法や労働立法のための労働者の政治闘争は、経済闘争を進展させる手段でもあるという意味で、「経済闘争と政治闘争の結合」は重要なのである。

以上の問題は、前衛政党和労働組合の諸問題として組織論的にも検討されなければならないが、ここでは略す。自己解放のための労働者の大衆闘争は、その闘争の指導的・中核的・階級的・自覚の深化と政治的組織的・発展的・起点にして、不断に発展するものであり、自己を意識的な共産主義者に鍛え上げていこうとする革命的労働者とその組織の創造こそ、労働運動、大衆運動の発展の鍵であること。これが第三の観点である。

の論理基盤で比較されるものではないのである。

簡単に定義するなら、経済闘争とは、労働者の職業的利益を守る闘争であり、具体的に言えば、その雇用主、資本家に対する、賃金、労働時間など労働条件改善をめぐる闘争のことであり、政治闘争とは、労働者が普遍的な社会的強制力を持つための闘争、即ち、階級支配の様式をめぐる闘争、自由と諸権利、民主主義をめぐる闘争なのである。

従って、労働者の時々の政策反対の反政府運動や制度的改善や自由と権利拡大闘争は、労働者の民主主義をめぐるものであり、それは政治闘争であり、その発展した段階が、国家権力の奪取をめぐる闘争、真の労働者の自由と諸権利、真の労働者の民主主義、即ち、プロレタリア独裁のための闘争に他ならないのである。だから、最高の発展した政治闘争の闘争形態は武装蜂起であるが、政治闘争、経済闘争の概念は、直接、その闘争の規模や激しさを示しているものではない。( )

国家独占資本主義の下では、当然、多くの労働者の経済闘争と政治闘争は緊密に結合せざるをえなくなっており、労働者の闘争の経済闘争か、政治闘争かの概念的区別は困難になりつつある。

例えば今日の日本の官公労働者の賃金闘争などの経済闘争は、直接、スト権奪還闘争などの政治闘争でもあるのが、その典型である。

各国の労働運動の歴史が教えているように労働者運動

一般に、社民やサンジカリスト、経済主義者達は、この観点に反対するか、それに無自覚であるものである。

労働者大衆が全体として、体制の打倒を自覚せず、改良主義的幻想に強く支配されている時代であればある程、「大衆の中」での活動は、共産主義の旗をまくことによつて勝利することはできない。

時代がそうであればあるほど、共産主義の旗はより鮮明にされ、堅持され、労働運動の条件と究極の目的についての問題が「大衆の中」にとりわけ、先進的部分の中に、持ちこまれなければならないのである。

又、労働運動の意識性が強まれば強まるほど、その指導部の意識性はより明確に、より強く問われるのは言うまでもない。

社民や修正主義者だけによつてではなく、小革命家達のちっぽけな「実用主義」のために、革命理論が矮小化され、労働運動に小ブル的墮落が持ちこまれて今日、マルクス主義が労働運動の偶然の客ではないことを実際に証明することは、われわれの任務なのである。

## II 工場、職場における党建設、先進的労働者の組織的強化の諸問題

### 1. 労働運動の右翼的再編の特徴と階級的労働運動の展望

重化学工業を軸とする産業再編成、独占集中などによる戦後日本資本主義の高度成長と再度の帝国主義的登場の過程で、日本の労働運動、労働組合運動は、資本の基幹産業部門を中心とした戦闘的部分の壊滅をめざした攻撃によって、六十年安保、三池闘争の貴重な経験を獲得しながらも、労資協調主義、帝国主義的労働運動の後に後退につぐ後退を続けてきた。と同時に、既成労働運動指導部と社共の無能と革命派、反戦派労働者を中心とする先進的労働者の前進の歴史的意義が鮮明になりつつある。

労働戦線の右翼的再編は、今や、日本帝国主義の七十年代戦略の意をうけ、同盟、J.C.、総評一部によって、「労働戦線の統一」のため「見切発車」が叫ばれ、総評主流の足下を揺ぶりつつあり、又それと照応して、社公民共闘による野党再編成、「新労働者党」構想が一定の現実性をもつ程にまで進行しつつある。

こうした中で、労働運動の右翼的再編を打ち破り階級的労働運動を創造するため、共産主義者とその組織、先進的労働者の任務とは一体何であるのだろうか。その回答のためには、まず、わが国の階級関係の現段階の指標としてある労働運動の右翼的再編成の特徴を分析しておかなければならない。

六十年代に急速に拡大した右翼的再編成の軸となつてくる帝国主義的労働運動、労資協調主義的潮流は、高度成長と独占資本の強蓄積、莫大な利潤と、戦後民主主義に照応する近代的方法を採用した労働貴族、労働官僚の育成といった一定の経済的社会的基礎を持ち始めており、この点において、戦前の社会愛国主義、労資協調主義潮流や、帝国主義の戦後世界体制の確立に「貢献」した民間労働運動と根本的に異つた特徴を持つていたのである。(労働運動の右翼日和見主義潮流の特徴づけは、レーニンの第二インター批判、第三インターのための闘いが教えているように、イデオロギー的社会的経済的側面の全領域からなされなければならないが、ここでは簡単に記す。)

後進資本主義として出発した日本資本主義は、明治維新が上からのブルジョアの改革にとどまつたことによつて、封建的諸関係の再編成、残滓の温存にあらわされる、近代民主主義に基づく政治支配形態、強力な官僚軍事機構を持った天皇制国家権力、植民地支配への参画を契機にして、急速に資本蓄積を推進してきた。

戦前の日本帝国主義は、資本蓄積規模の未熟、資本の有機的構成の相対的低位に代表される独占資本の脆弱性の進行の中で、現在の労働戦線は総体として後退しつつあるかに見える。(表1)

だが、今日の労働組合運動の情勢のみを皮相に見て、動揺し、労働者階級の歴史的使命に疑問を持ち始めたり、貧困の中にただ貧困のみを見出すような粗雑な小ブルの俗論、資本の自己増殖運動、資本家の専横に対する敗北主義的俗論に陥いつてはならない。

一般に労働運動は、資本主義的生産の発展を基底にして誕生、成長するものであるが、それは一直線に成長するものではなく、前進と後退、飛躍と停滞を伴つて、或いは極めて複雑な不均等な発展を伴つて成長するものである。

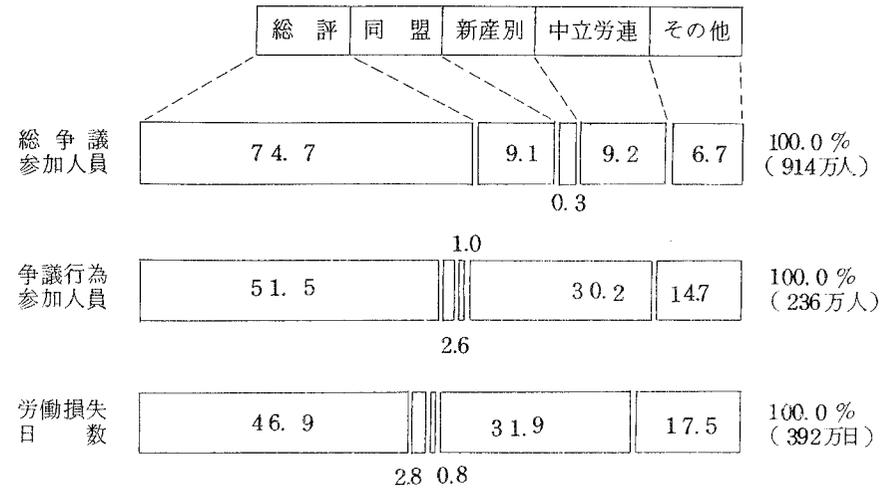
従つて共産主義者は、今日の労働運動の情勢を粗雑にながめ回して慨嘆したりするのではなく、現存する労働者、勤労人民の資本家と政府に対する部分的反抗、例え、不均等な発展故に、孤立無援のように見えようとも、その反抗をとくに注意ぶかく研究し、それが階級全体と人民全体の運命にとり客観的可能性として何を意味し、教えているのか、その客観的可能性は、如何なる主体的実践、戦術を媒介にして、現実性へと必然化されるのかという問題の回答を獲得するために努力するものである。

過去、真の革命家、労働運動の指導者は、例外なく、労働者の生活状態、労働争議等の深く鋭い研究者であつたし、それだけでなく不均等に発展した労働者の闘いの研究を通して、革命の展望と任務をつかんできた。例え

だが、戦後日本帝国主義は、敗戦に伴う「民主化」、天皇制の解体、閉鎖的財閥解体、寄生地主制の解体、労働者立法の確立といった戦後の社会的条件に照応して、労働運動の内部に労資協調主義潮流を育成してきており、高度成長期に生長した帝国主義的労働運動指導部、労働官僚たちは、鉄鋼企業の大企業に典型的な労働貴族、近代労務管理の発達に伴う職制層を社会的基礎にして、大企業を中心とする労働組合の指導部を占め、国独資機構の官僚層の中に進出しているのである。

こうした特徴をもつた労働運動内部の労資協調主義、帝国主義的労働運動の拡大とそれを軸とする右翼的再編

表1. 労働争議参加人員、労働損失日数に占める各労働組合中央組織の割合（1970年）



いに代表されるように、六十年代後半顕著になった民同型労働運動の空洞化、民間幹部の経営共同体への屈服、「労働戦線の統一」の名による帝国主義的労働運動への追随は、それが露骨であり、急速であればある程、一方の極に、労働者の利益を真剣に考え、日本労働組合運動の一定の戦闘性を現実を支えてきた真面目な職場活動家層の急進化と社共からの離反を産み落してきた。更に又、中小零細企業の非常に劣悪な条件で働く労働者、未組織労働者の闘いも各地で日常茶飯事のように続発している。(表2、表3)

簡単にみたように、労働貴族や労働官僚たちの最近の一連の策動や民間の右翼的歪曲のための発言や、又、単なる組合員数の側面のみ目を奪われないで労働運動の現場を観察すれば、労働戦線の後退と前進の境界線は、地方、地域別に、産業別に、企業別に、又、組合幹部と下部活動家別に、或いは組合活動以外の領域で、複雑にいくんでおり、更に又、六七年来の激動の数期間に急激に成長した反戦青年委運動のように、一定の時期毎にも緩急度を異ならせて変化していることは明瞭である。

資本家は今日、暴力と買収、幻想と欺瞞によって、労働者の自主的戦闘組織、労働組合を破壊し、御用組合をデッチあげることができる。だが、どのような力をもつてしても、資本主義の下での労働者の大衆的結束と労働運動の土台を根絶することはできない。

来るべき日本における階級危機、労働者階級の大衆的

表2 労働争議件数及び参加人員の歴史的推移

年	総 争 議		争 議 行 為 を 伴 う も の		罷 業	
	件 数	総参加人員	件 数	参加人員	件 数	参加人員
1897	—	—千人	—	—千人	32	4千人
1900	—	—	—	—	11	2
1905	—	—	—	—	19	5
1910	—	—	—	—	10	3
1915	—	—	—	—	64	8
1920	—	—	—	—	282	36
1925	816	89	293	41	270	32
1930	2,289	192	906	81	763	65
1935	1,872	104	590	38	531	32
1940	7322	55	271	33	239	24
1944	296	10	216	7	—	—
1945	256	165	95	36	—	—
1950	1,487	2,348	763	1,027	566	761
1955	1,345	3,748	807	1,767	638	1,029
1960	2,222	6,953	1,707	2,355	1,053	917
1965	3,051	8,975	2,359	2,479	2,398	2,524
1970	4,551	9,137	3,783	2,357	4,612	3,014

ば、毛沢東は、中国の民衆運動の特徴に注目し、中国社会の諸階級の分析を理論的武器にして、赤色根拠地、赤軍建設等の中国革命の基本問題を解決していくが、そこには、革命家の中国階級闘争の発展の不均等な性格に対する鋭利な洞察がある。

日本資本主義の戦略産業、特に、石油、化学、鉄鋼、造船、自動車、電機等の民間独占体の労働組合運動は、総体としては完敗を喫し、強力な資本による労働者支配の職場秩序が完成されつつあるが、事態がそうであればあるだけ、七年を前後して、少数派とはいえず、先進的労働者の不屈の闘いが、連続的に波及し始めている。

又、最近では、全通宝樹体制の崩壊や国鉄労働者の闘

(備考)

1. 労働省「昭和四五年労働争議統計調査年報告」より。「日本労働年鑑七二年版」より重引

2. 労働組合員数の三六・九%、一二・一%をそれぞれ占めるにすぎない総評と中立労連で、総争議参加人員の八三・九%、争議行為参加人員の八一・九%、労働損失日数の七八・八%を占めていた。一方、同盟は、組合員の二七・七%を占ながらも、それぞれ九・一%、二・六%、二・八%にすぎない。

労働組合の争議参加率は、その組合の政治的社会的性格を明瞭に示している。

(備考)

1. 日本資本主義の形成と発展、資本主義的生産の発展と資本蓄積過程とともに労働者階級の自己解放の闘争は始り、前進と後退、飛躍と停滞をとうして、それを巨大な社会的勢力として登場させてきている。
2. われわれは、こうした膨大な数の労働争議を準備し、その先頭に立ち、訓練され更に新しい闘争を用意している未知の数多くの先進的労働者を想起しなければならぬ。

表3 労働組合数、組合員数及び組織率の歴史的推移

	労働組合数 (単位組合)	組合員数	推定組織率	
				%
1918	107	千人	—	—
1920	273	—	—	—
1925	469	228	5.6	
1930	630	354	7.5	
1935	965	409	6.9	
1940	49	9	0.1	
1944	0	0	0	
1945	509	380	3.2	
1950	29,144	5,774	46.2	
1955	32,012	6,286	37.8	
1960	41,561	7,662	33.8	
1965	52,879	10,147	34.8	
1970	60,954	11,605	35.4	

者)を労働組合が強力に闘っていく中で解決すべきであるにもかかわらず、生産に協力する姿勢の中で、資本ベツタリの体制内労働組合運動に変質しているために、つい二年前までは『交替制勤務はこれ以上拡大しない』という大会決議を、『生産に協力』『交替制は時代のすう勢として受け入れる』と基本的態度が大きく崩れてしまった。職場の自由は一つ一つ侵され、権利が奪われ、タバコ一本吸う自由すら三分以内などと制限されてきている中で、なおかつ組合は、生産に協力する基本姿勢を前面に掲げている。

このような姿勢の組合に交替勤務を拒否する闘いが展開できるわけがない。組合が『民主的労働運動』なるものを掲げたところで組合機構は益々職制にその多くの部分を依存していることは、各種の選挙での職制の活動をみれば明らかである。…寒さ、暑さにかかわらず、交替制の苦痛と非人間的勤務体制は金銭でおぎなわれるものでは決してない。〔石川島田無反戦パンフ『闘いの炎の中で』七一年十一月発行のリーフレットより〕

更に又、御用組合が「労働組合」の看板を掲げるかぎり、その資本家との結託は永遠の安定したものではありません。先に見たように、現在の労働戦線の右翼的潮流は、戦前のそれと違い、それなりの経済的社会的基礎を持ち始めており、戦前の友愛会(一九一二年)、大日本労働総同盟友愛会(一九一九年)、総同盟(一九二十年)、左右分裂と評議会(一九二五年)の歴史、戦後の四八年

攻勢を準備する直接の客観的諸要因を予言することはできないが、しかし、現在「強固」になりつつある資本と御用組合の運動の鎖は、その連結の本質それ自身の必然性によって腐敗し、朽ち落ちるものである。

というのは、資本のテコ入による御用組合、帝国主義的組合の今日の「勝利」は、唯一、労働者から汗の一滴でも多く搾り出さんとする目的のみ合致しているのだから、爆発の時期や規模を一応別にしても、その職場に可燃材料をいよいよ累積せざるを得ないのである。

御用組合の勝利は、労働者全体からみれば労働条件悪化を意味する。このことを、石川島田無工場で働く先進的労働者はこう伝えている。

「再び機械、開発、精機、翼、板金の製造部を中心とした職場に、三交替勤務の提案が会社側より出され、交替勤務をめぐる動きが、職場で起りはじめています。今回の該当職場をみると、新入社員を中心とした比較的勤続の浅い青年労働者にそのほこ先を向けてきている会社側は、既に入社当初から三交替要員としてチームを組み、仕事をさせる中で、青年労働者の反発を巧みにかわしている。

又、当面の仕事の山積なども一部からは疑問視されていることからして、会社のねらいを明らかに、交替制勤務制度の拡大であり、そのために、最も弱い部分からなし崩しに既成事実の拡大をはかっていくことだろう。

……この要求(賃金、社宅、休暇などの要求)引用

産別民主化同盟と総評(五十年)の「ニワトリからアヒルへ」の転化の歴史から、直接に高度成長期の帝国主義的組合の将来を類推することは危険であるが、事実、代々木は、「ニワトリからアヒルへ」の再版を願望して右翼的再編に追随しつつある。しかし、帝国主義的組合がより伸長し、より多くの労働者を傘下におさめ資本の理想に適えば適う程、いつの日か巨大な大衆的攻撃によって動搖の淵にたたきこまれるに違いないのである。

以上の考察によって導き出されるべき主体的問題は、進行しつつある労働運動の右翼的再編、総体としての「後退」の下で、不均等に発展した要素、前進の要素の内実如何に、即ち、少数派とはいえず、現在、苦闘している先進的労働者が、如何なる思想と政治的立場に立つのか、孤立の中で容易に小ブル的俗流社会主義の沼地にはまりこむのか、それとも、どのような孤立を強いられようとも、資本主義社会の日常的墮落への誘惑と攻撃と闘って、自己を真の共産主義の立場にうちきたえていくのかどうなのか、わが国の労働運動の運命はかかっていると言っても過言ではないことである。

後退の中の前進の弁証法に、前進の内実如何によつては、今日の「後退」は、単なる後退では決してないことが理解されなければならない。

更に労働戦線の現情勢で重要なことは、徐々に深化しつつある帝国主義的労働運動と戦闘的労働運動の亀裂の現段階は、決して、かつて第一次世界大戦直後のドイツ

の階級情勢のような、革命と反革命の血みどろの激突としてあらわれる労働者階級内部の帝国主義と社会主義の分裂を直接意味するものではないことである。

右翼的に再編成されつつある労働運動は、まぎれもなくその内部に、部分的反抗、大衆の攻勢をはらんでおり、後退と前進の境界線は、いりくみ、変化し、複雑な様相を呈している。

従つて、共産主義者とその組織は、労働戦線における今日の戦術を決して硬化してはならず、現段階における帝国主義と社会主義の分裂の特徴、後退と前進の要素とその境界線、その未来への展望を正しく認識し、そして、戦術的展望の下に自己の戦術を極めて柔軟に決定するよう努めなければならない。

非常に劣悪な生活環境の中でも、現体制に疑問を持ち、体制の変革を志して活動している先進的労働者達、この人々を、社会民主主義、修正主義、組合主義の影響から徹底して分離させ、首尾一貫した共産主義的世界観で武装させること、この人々を、日本革命の単一の党建設の実際の担い手にまで組織するとともに、又、労働運動の日常的闘争の中で、労働者諸団体から反動派を追放し、日本の階級的労働運動の指導的核、労働者大衆の中で最も信頼と影響力を持った指導的核にきたえあげていくこと、これを、われわれはやり遂げねばならない。

われわれは、まず、産み落されつつあるわが国の労働者階級の中で最も勇氣と知恵と行動力を持った先進的労働者

会の政治地図に基いて先進的階級の創造力と戦闘力に最も依拠することができるように創造しなければならない。

従つて又、革命組織を建設する際、第一に重視すべき地区は、極めて多数の労働者が密集して生活しており、政治的中心地である大都市や大工業地帯である。

特に、六十年代、革命的共産主義と実際の労働運動が全体として別個の道を歩んできたという歴史的現実からしても、又、現在、人民の全ての諸階層に均等に依拠しようとする傾向が革命派の一部に存在している現実からしても、限られた勢力しか持ちあわせていない共産主義者とその組織は、必ず自己の主要な活動の方向を、大都市の工場労働者に定めるべきであるということを明瞭にしておかなければならない。

だが勿論、このことは、工場から街頭へ放り出された勤労者、都市に流れこんできた零落化した農民等の運動を無視するものでは決してない。

重要なことは、多数の都市労働者の中に、社会主義を希求する力強い奔流を創り出す過程でこそ、勤労人民の様々な闘いはより生長し合流することができるということである。

われわれは、戦後世界体制の崩壊と再編期の中で、新しい内外の矛盾を金融独占資本家が抱えこみ、職場から戦闘的労働組合運動と革命派の一掃をめざす激しい攻撃を加え、勤労人民からの搾取と収奪の強化を押し進めようとしているなかで、工場、職場で日常的に存在してい

働者、戦闘的翼を、労働運動の中にもちこまれた各様のブルジョア的、小ブル的傾向から、徹底して引き離さずして、そして日夜搾取がおこなわれている無数の現場、工場、職場に、革命的共産主義の赤旗をおしたてずして、来るべき革命期、数百万、数千万の労働者大衆が政治的生活に続々参加する時代、サボタージュ、ストライキ、工場占拠、武装デモが日常茶飯時となる偉大な内乱の日々に、自己の階級的責務をまっとうすることは決してできないだろう。

「孤立をおそれず、連帯を求めて！」この全共闘運動のスローガンは、学生運動だけのものではなく、先進的労働者の手によって正しく引き継がれ、階級戦線の中で実践的により深化されなければならない。

## 2. 工場における党組織建設の諸問題

日本の労働者階級が必ず産み落さなければならない前衛政党的組織性格は、先験的にあるものではなく、わが国の生産と交易の諸関係、階級相互の諸関係、それを総括する国家権力といった諸要因に総合的に規定された日本階級闘争、当面する日本革命の性格から導き出されるものである。

だから、党組織の骨格は、今日の支配者の手による行政的地理的区別に影響されるのではなく、あくまで社

る自己解放のための労働者の闘いを擁護し、それに参加し、援助し、組織化し、そして、日本中の全工場、職場を、革命の要塞へと打ち固めていかなければならない。

工場、職場は、毎日毎日、資本家による労働者からの搾取がおこなわれている直接の場所であり、それだけに、資本家の利益と労働者の利益が非和解的であり、労働者にとつて資本家は不倶戴天の敵であることが明瞭となる重要な場所である。

労働者は、そこで一日生活の半分以上を過し、共同労働、共同の苦役によってなんらかの階級的連帯の感情と組織性を与えられる。

このことは、例えば、町内会等の市民生活の組織と労働組合の今日果している役割の違いを考えてみれば一目瞭然であろう。

従つて、工場、職場は、労働者階級解放闘争のための、又、金融独占資本の横暴な支配からの全勤労人民の解放闘争のための、一言でいえば、日本革命のための基本的な大衆的拠点であり、又、必ずそうなるようにしなければならない。

われわれの組織は、革命運動総体が、思想的組織的政治的危機にあり、真面目な労働者の諸団体、政治サークルが分断され、孤立した苦闘を強られているなかで、全戦線を単一の目的のために統合する指導部、訓練のつまれた職業的革命家によって担われる来るべき党の中央指導部の建設のための闘いを支持するものであり、又、そ

のための綱領的組織的政治的基準を鮮明にし、そのために自己を不断に打ち鍛え、その闘いの積極的担い手へと自己組織化していくものである。

だが、労働者階級解放闘争の中央指導部創造のための闘いは、次の闘いと併行して押し進められなければならない。

即ち、どのような精力と時間が必要とされようとも、工場、職場に進撃し、そこに深い大衆的影響力を持った真の共産主義的細胞とグループ―単なる反戦労働者の大衆的闘争機関だけにとどめず―を創造し、それを指導の中核とする戦闘的階級の労働運動を生み出すための闘いである。

日本の労働運動と階級闘争の歴史に刻印されてきた大きな労働争議や、有名な戦闘的拠点工場や職場を詳しく観察してみれば、程度の差こそあれ、必ず次の様な陣型を構成している。

労働者階級解放のために全生涯をかけんと決意し、首切り攻撃等を覚悟で私心を捨てて活動している少数の共産主義的労働者の集団、党細胞とグループ―未だ確固とした共産主義的見地で武装していないが、労働者の利益について真面目に考え、積極的に行動し、そして前記の労働者を信頼し尊敬している一定の数の活動家集団―両親や家族のことを考え積極的行動はとれないが、前記労働者の集団の活動には共感し、支持する多数の一般労働者の集団。

種の闘争課題に進撃していかねばならない。

### 3. 工場、職場における前衛組織の活動上で注意すべき諸点

社会民主主義政党や、それに同質化したつあるスターリン主義、修正主義政党は又、その議会主義路線、労働運動、階級闘争の観点をプロ独まで押し拡げようとするい路線からして、必らず、工場、職場における労働者政党の活動を事実上、票集めのための活動、労働者の大衆諸団体、組合内フラク活動に切り縮め、歪めてしまうものである。

それに対して、工場、職場における真の前衛組織、共産主義の立場に立つ革命的労働者とその組織の活動は、自己解放のための労働者の全ての闘いを援助し、労働者階級を支配階級へと組織化しうるだけの多面的活動形態と豊かな創造的内実を持ったものへと高められなければならない。

複雑な状態にある職場で、労働者大衆の中から社会主義のための闘士を生み出し、又、力強い階級的労働運動を創造するため、われわれがふまえるべき共産主義的活動の全細目を規定することはここではできないが、必ず注意すべき諸点のみを明瞭にしておこう。

政治的無関心の時期、革命的突撃の時期、弾圧の時期、あるいは、プロレタリア独裁の時期、いずれかの時期でも、労働者の階級闘争を進展させるものは、右の組織的陣型を日常的に創り出していく工場前衛に他ならない。搾取者と非搾取者の衝突と闘争に最も積極的に参加する共産主義者とその組織は、工場細胞をその基礎組織とすることによって、労働者階級の戦闘的前衛たる資格を獲得することができるのである。

自民党、公明党、民社党、社会党、代々木「共産党」などの反労働者の諸政党は、いづれも、その基礎組織を細胞、特に、工場細胞に置いていない―代々木は十一回大会において「細胞」を「支部」に名称変更をおこなったが、それは代々木の組織的変質をその背景にしている―のであり、それは唯一プロレタリア革命党の組織構成の特質なのである。

議会主義諸政党は、党員を募集し、議会内多数派のみを夢想しているが故に、居住単位で労働者を党に組織するか、工場や職場では、せいぜい「組合フラク」を党組織に置き換えるものである。

前衛党は、各級機関とその指導下の細胞群によって組織構成され、細胞、特に工場細胞は、前衛組織の基礎組織をなすものである。

工場における前衛、革命的労働者の思想と組織的力量こそ、工場における労働者大衆の運動のテコであり、われわれは、その不断の強化をもって、労働者大衆の各

その一。先進的労働者が、革命的労働者へと自己形成し、共産主義的組織の構成員としてふさわしい思想性、政治性、組織性を体得するように努めること。

特に、階級闘争の全局的任務、われわれの革命的戦略的総路線の観点に立脚しつつ、全局的任務と自分達の直接的持ち場である工場、職場の局部的任務の関係を正しく理解し、自分達の任務の性格と階級の意義を鮮明にするように心がけること。

その二。生物における細胞活動が個体の全生命活動と調和しつつ、且つ、生命活動一般の基礎単位を構成しているように、職場における前衛組織、われわれの組織の細胞とグループ活動は、前衛組織全体の活動の有機的一環にあるとともに、又、それ独自で一つの「小宇宙」をなしているものとして深化されなければならない。

われわれの職場細胞(グループ)は、労働者階級解放の全局的任務と局部的任務を片時も忘れず、自分達の直接の持ち場、特定の企業、特定の地域、特定の産業の全運動について専門的に習熟した革命的労働者によって構成されるようにめざされるべきである。

例えば、三直四交替制の下で、近代機械に従属させられ、単調な作業を強られている石油化学産業の労働者又、精力を消耗し、危険な労働条件にある鉄鋼、金属産業の労働者、不規則な勤務時間と精神的緊張の下にある交通運輸産業の労働者、或いはまた、低賃金、無権利、残業が「当たり前」になっている中小、零細企業の労働者、

のおかれている条件はいちじるしく多様であり、自己の戦線の資本家の攻撃の特徴、労働者の労働条件、生活条件の状態とその不満、労働組合運動の現状、右翼幹部の動き、諸政治潮流の政策と影響力、過去の労働争議の教訓といった諸問題を、日常から研究し、革命派の原則に基いた柔軟な政治・組織方針、正しい政策を打ち出し、革命派の前進を着実にちかちかとしていくこと、こうした日常的な基礎的活動をやれずして、階級の真の政党、強力な革命勢力を創造していくことは絶対にできない。

その三。主に克服すべき傾向は、左翼セクト主義と大衆運動主義である。

左翼セクト主義の克服について。

存在するものはすべて根拠を持つものである。

この意味で、現在、後退しつつあるとはいへ、日本の労働運動に社会民主主義者や民同が大きな影響力を持っているということは、やはり、それなりの客観的根拠があるからである。

即ち、現在では圧倒的多数の一般労働者は、今日の資本家のための体制に不満を持っていないながらも、社会党的な野党政治を越えた「大政変」を望んでいないこと、民同的改良路線以上の年老いた両親や家族を路頭に迷わせるような企業主との激突を望んでいないこと。換言すれば、今日の階級情勢は、未だ労働者大衆の無限の創造力自己犠牲精神や英雄主義が発露される革命情勢にまで熟していないということ、そして、社会民主主義者や民同

が、労働者大衆の日常生活のせめてこれだけはいう切実な要求と感情をなんらかの意味で捉え、代表しているということ、このしごく当然で、否定できない真理をわれわれは理解する必要がある。

ところが左翼セクト主義は、この現実を承認することを拒否し、この克服すべき現実を共産主義者として主体的に受けとめようとせず、それどころか労働者大衆の日常的要求と階級闘争の萌芽に目を向けることなく「左翼ぶり」のみを自慢しようとするのを思想背景とする。

従って、左翼セクト主義は、何に対しても非妥協主義で臨み、大衆の底力のある戦闘的階級の労働運動は、労働者大衆の政治意識の現水準、労働運動の現段階を飛び越えて誕生したり、あるいは、現存する労働運動の彼岸で創り出されたりすることは絶対にないという真理を認めながら、労働者の多数にそれなりの信頼を得ている真面目な左翼社会民主主義者や民同左派の活動家達と、どのような条件の下でも、共同して大衆的闘いを勿論、彼等の反動性を各種の手段で暴露しつつくむことに反対し、労働者の戦闘的大衆的闘争の阻害要因になったり、革命派の労働者の中での前進の機会を逸したりする。

われわれは失敗を恐れることなく、こうした左翼反対派的体質を克服し、大胆に、労働者大衆の前に、階級闘争の大道に、躍り出るように努めなければならない。

大衆運動主義の克服について。  
議会議主義、改良主義の政党の職場活動が、共産主義的

活動を切り縮めたり、歪めたりし、事実上労働組合内のフラクション活動の域を出ないことは既に指摘したが、革命派の側で注意すべき傾向は、地区党と地区反戦、職場細胞と職場反戦或いは反戦と労働組合を理論的にも実践的にも混同し、職場における共産主義的活動を反戦内フラク活動に一面化したりするような大衆運動主義の傾向である。

このような偏向は、職場における党組織を腐蝕させ、偏狭な労働者主義や自分の職場第一主義の誤った考えを産み出したり、又、労働者の自主的な大衆団体をひき回したり、破壊したりする源となる。

革命運動が自然成長的段階にある時、特有に存在する大衆運動主義は克服されなければならない。

又、会の組織化する大衆運動を一元化することを戒めなければならない。

圧倒的労働者大衆は社会の影響下にあり、その指導の下で労働組合運動など各種の大衆闘争が日常的に組織化されているのが客観的現実であり、従って、われわれは、大衆運動の労働組合的課題、反戦や各種闘争委員会、研究会的課題、あるいは、党派性を鮮明にした独自課題の性格と任務の区別と連関を明確にし、各種の課題の力関係をふまえて革命的活動に長期的計画性を与え、一時の党派性を持った大衆闘争の動員数の拡大に目先きを奪われず、非常に柔軟な統一戦線戦術にもとづいて、各種の形態と手段で大衆運動を組織する必要がある。

### Ⅲ 労働組合を労働者の闘いのトリデ にうち固めるために

#### 1. 激動の数年間の経験と反戦派労働者の任務

この数年間、既成左翼が、革命運動から逃亡し、労働戦線においても資本家と右翼社会民主主義者の神聖同盟の前に無為無策のうちに敗退、或いは、屈服を続けているなかで、未だ極少数派とはいへ反戦派労働者の闘いとそ日本の労働者運動の唯一の希望の星として輝いていたといえる。

今日の反戦派労働者一般の任務は、六九年、四・二八沖繩闘争や秋期安保闘争でその片鱗を見せた闘う意志と思想、戦闘力を更に深化し、マルクス主義による思想的武装を完成させ、過去の狭い活動領域を更に大胆に押し広げ深化し、厳しい秩序にある職場においても、労働者大衆の心から信頼しうるに足る指導者へ自己を鍛えあげることである。

しかも大衆攻勢の時代の経験を武器にしたこの任務は、卑俗な右翼的自己保身に終始した革マル派の階級闘争は飛び越えることはできないということしか意味しない「既成労働運動内部からの変革」一般論や、構改系の

「街頭か、職場か」といったそもそも矛盾しない領域を並べ立て比較し、「生産点活動の方が重要」といった主張の背後にある階級闘争の発展の不均等性の否定、歪んだ労働運動観・革命観と、根本的に分離した思想を持って実現されなければならないことは言うまでもない。

革命派の周辺には、確かに、ダラ幹の無思想、無原則の反労働者性や御用組合の現状に反発するあまり、没主体的な労働組合への不信、反労働組合の気分と「理論」が存在していることは否めない事実である。

だが、日本中の何処を見渡しても、多数の労働者大衆の共有する闘い―たとえその闘いが、全体として未だ階級の闘争に成長していなくても―の組織的武器は、労働組合以外にはないことも事実である。

右の傾向の反動性は、次のことに注意するだけでも明瞭であろう。

資本の自己増殖運動は、常に労働者から血の一滴でも多く搾取せんとするものであり、資本家の攻撃は、労働者階級の全体が死滅しないかぎり、個々の労働者が飢死しようが廃人になろうがおかまひなく押し進めんとするものであり、現在の日本の労働者のおかれては低賃金、非人間的作業、悪い生活環境、これらの水準すら、唯一、資本家階級と労働者階級の力関係のみで辛くも維持されているのであって、その力関係に、労働組合が果している重要な役割を見出すことは決してできない。

そもそも、労働者の団結と組織的闘いなくして、労働

いる中で、丁度、空気が平時にはその存在が意識されなかつたり、無用のものに思われるように、ややもすると、労働組合の意義は軽視されがちである。

だが、われわれは、日本の労働者が全くの無権利の下で困窮と労働苦を強いられてきた歴史を忘れ去るほど、お人好にできてはいない。

既に労働者に獲得された労働組合や団結権を、革命的労働者の方から清算し、歴史の屑箱に棄て去ることほど危険なことはない。

現在においても、又、将来においても、共産主義者、革命的労働者とその組織にとつて、労働組合に関する問題はあくまでも次のように立てられている。

どのように労働者自身の意識的活動を媒介にして、帝国主義的労働組合を排撃しつつ、既存の労働組合を、資本家による生活破壊と反動の攻撃に対決して、労働者の闘いの皆にうち固めていくのか、最も労働組合らしい労働組合に創造していくのか、そして、労働組合運動を日本階級闘争の重要な構成要素にしていくのか、として。

## 2. マルクス主義と労働組合―正しい組合政策のために

労働運動の誕生と形成の客観的条件は、言うまでもなく資本主義的生産の発展にある。

市場で労働力の売買が等価交換としておこなわれるなどと考えるのは恐しくおめでたい反動的夢想であり、「資本主義的蓄積の一般的法則」の理解においても誤っている。このことは、かつて、日本の労働者が団結して、自分達の生活と諸権利を闘いとることに無自覚であった頃、近代日本の奴隷所有者達が、労働者をどのように取扱つたかを見れば鮮明になる。

明治十余年頃、三菱商会の下の高島炭鉱では、誘かい同様にだまし鉱夫を雇い入れ、「納屋制度」という監獄部屋に監禁して、残酷な労働条件におき、少しでも仕事を怠れば、コン棒で殴打し、逃げ出ようとして捕えられたものは、懲罰で殺されたりもしたと言われる。又、明治十七年の夏、この炭鉱にコレラが流行した時、三菱資本は、発病後一日たつとまだ生きているものも鉄板上に束にして焼いてしまい、三千の鉱夫のうち半数が死亡したということも伝えられている。

この一例のように、労働者が団結と組織を武器にして資本家と闘うことを知らなかった時代の資本家の言語に絶する無茶苦茶な専横と勤労大衆の家畜以下の悲惨な状態の事例は枚挙にいとまがないくらいである。

今日、日本の労働者の組織率は世界有数の高さであり―それでも、全労働者の三分の二は未組織労働者である―、一方、資本家側も、戦後の労働者の階級的組織化の前進を「前提」として、それを支配秩序に組みこむための狡猾な新しい攻撃を強め、一定の「成果」をあげて

資本の拡大再生産の過程、資本蓄積過程は単に社会的富の生産過程だけではなく資本主義的生産関係の再生産、いかえれば、一方により多くの資本家またはより大きな資本家の、一方により多くの賃金労働者の再生産の過程である。

その過程は、労働者の数の絶対的な、又、社会的人口に対する相対的な増大の過程であるとともに、一方の富の蓄積の対極に、即ち労働者階級の側に社会的貧困を蓄積する過程でもある。

このように、資本主義的生産の発展は、自己の生産物を資本として生産する階級、労働者階級に、まず、その量的増大を通して、資本主義的生産とそれを基礎とする全体制の運命を左右するに足る社会的力を可能性として与え、更に、その社会的貧困の蓄積することによって、その社会的な力を現実化する運動、労働運動の直接的土台を形成せざるをえない。

だが、労働運動の発展を規定する客観的条件は、それだけではない。

労働者階級の社会的貧困の蓄積、その奴隷状態は、労働運動の直接的土台を形成するとはいえず、労働者が個人としてバラバラにある限り、労働者の唯一の社会的力である数の多数を実際の武器に、戦闘力にすることはできない。

労働者の中に、資本の集積された社会的な力に対抗する団結の能力と才能を与える条件、それは資本主義的機

械制生産の大工場の発展である。

機械制大工場は、それぞれ特殊な利害関係を持つ独立自営業者を没落させ、完全な賃金労働者、無産者にし、又、多数の労働者の共同労働、共同の苦役の組織化によつて、更に又、労働者を工場から工場へと移動させ、それぞれ別の工場生活の経験の交流によつて、労働者の団結組織的闘いを創造するにたる客観条件となる。

資本主義生産、大工場が発展すればする程、必然的に、労働者の反抗は、より頻繁に、より強力に、より持続的になる。

最初は個々の労働者が、次には一工場の労働者、その次には一地方の一産業の労働者が、彼等の直接の搾取者資本家と激烈な闘いを開始し、政府や結束した資本家の種々の弾圧を受け、やがて自分たちと真に敵対しているのは、機械や工場そのもの、或いは、個々の資本家だけではなくて、全資本家階級とそれを援助する政府であることを自覚するようになる。

全階級が団結し、共同で闘うことが必然であることを確信するようになる。

資本の蓄積過程、機械制大工場の発展は、自己の生産物を資本として生産する階級の量的増大という形を伴つた社会的貧困の蓄積、その組織的結束、団結の条件を産み落す。

労働運動は、これを土台にして、不断に強化される資本家の攻撃から、労働者の生活権と生存権を守るために

出発するが、二世紀半にわたる自己解放のための近代労働者階級の苦闘の足跡が教えているように、激しい闘い、暴動と結束した資本家とその政府の敵しい弾圧、勝利と敗北を経過しながら、階級闘争をとうして発展してきた。

こうして、労働者の生活と諸権利の要求と闘いは、資本主義的搾取の諸結果と対抗するものとして出発しながらも、労働者の奴隷状態の根本原因である資本主義的搾取そのもの、賃労働制そのものの廃絶へ進まざるを得ないし、そのためには、労働運動は階級闘争として発展し、労働者階級が、資本家階級から政治権力を奪取することが必要となる。

一般に労働組合は、このような自己解放のための労働者階級の闘いの最も初歩的な大衆的組織的武器として産み落されたものである。

「最初、労働組合は、この（労働者間の）競争をなくすか、すくなくとも制限して、せめてたんなる奴隷よりはましな状態に労働者を引き上げるような契約条件をたたかいたろうという労働者の自然発生的な試みから生まれた。」（マルクス『労働組合・過去、現在、未来』）  
社民や改良主義者、組合主義者は、労働組合の任務を「経済闘争」のみに限定してきたが、先に簡単にみた労働者階級の自己解放の観点、マルクス主義の観点に立つならば、次のことは明らかである。

労働組合は、資本主義の下での労働者の賃金や労働時間などの日常的利益を守ることを直接の任務としている

が、それだけに停ることなく、賃労働制の廃止、階級の完全な解放という偉大な目的のために、階級の組織化の中心として闘うこと、階級闘争においても重要な役割を担うという任務を持っていること。

労働組合は、その性格からして、極めて多数の労働者大衆を組織する役割を果しており、この役割は、労働者階級解放闘争において、どのような諸団体も担うことのできない労働組合独自の機能であるが、同時に、労働組合は、遅れた政治意識の労働者の層をもその内部に含むという基本性格からして、一時的にせよ、資本家の「讓歩」に見せかけた攻撃や、労働貴族、労働官僚にその指導権を牛耳られる可能性を常に持つており、それは、階級の当面の利益とともに普遍的利益をも代表する共産主義政党と緊密な組織的結びつきを強めることぬぎには、組合員自身が、真の階級の自覚を闘い取るための努力ぬぎには、階級の完全な解放にむかうその本来の社会的力、労働者の多数の力を現実化することはできないものである。

権力奪取前の反動期、沈静期、昂揚期をとわず、権力奪取の攻勢局面でも、内戦期にも、勝利したプロレタリア独裁の時代にも、労働組合なしですまそうと考えるのは全く反動的な幻想である。

プロレタリア革命の昂揚期、とくに権力奪取と権力確立期に、労働組合は急激に増加することは、すべての革

命に共通することであるし、わが国の歴史では、戦後革命期の労働組合運動の飛躍的成長や、六十年安保闘争の政治的昂揚期に未組織労働者の組織化が進んだ事実がそれを示している。

労働組合からの召還派、組合一般の解体論者は次の二重の誤りをおかしている。

第一は、労働組合の役割を果していない帝国主義的労働組合、御用組合、が労働組合の看板をかかげているという現象に反発して、労働組合一般が反動的であると結論していること。

そこでは、資本主義社会の下で、労働組合をめぐって、資本、権力、社民、修正主義者、アナキスト、サンジカリスト等々に対して共産主義者が、どのようにして勝ちぬぎ、労働組合を労働者の闘いの砦の一つにうち固めいくのかという変革的立場が完全に欠如しており、唯一そこには御用組合や帝国主義的組合への敗北主義と客観主義のみがよこたわっている。

第二には、敗北主義と客観主義の態度が理論的に表現する誤りである。

労働組合からの召還派は、理論的には「労働組合が、内乱や蜂起を掲げない。」というように革命党の性格と任務、労働組合の性格と任務、及び両者の関係について混乱し、革命党と労働組合を理論的に同一化したり、或いは「革命にとって労働組合は必要か。役に立つか」というように労働組合問題に対する問題の立て方自身にお

て欠陥を持っている。

自己解放のための労働者の闘いにとって、労働組合—労働者政党もそうだが—は、決して「役に立つか、必要か、」というような外在的要因ではない。

簡単に見たように、それは、賃労働制の廃絶へ突き進まざるをえない労働運動の端緒的な組織表現に労働者の端緒的な団結形態に他ならず、たしかにそれは、究極目的の実現に到る労働者の闘いにより確固さとしてより持続性を与える組織的武器という意味で、闘いの「手段」として言えないこともないが、それはブルジョア思想における「目的実現のための道具」としての単なる「手段」ではなく、理論と実践を統一する労働者運動においては、究極目的の実現のために、どのような内実を持った労働者階級の結束した革命的陣型を創造するのか、どのような内実を持った労働組合と労働者政党を創造するのかという問題は、又、或る側面から言えば目的そのものである。われわれの労働組合をめぐる基本的課題は、組合一般を排撃することではなく、又、労働組合の任務を狭小化させることもなく、既成組合の内からも、外からも、党的独自活動からも、積極的組合活動からも進撃し、帝国主義的労働組合と対決し、改良主義的労働組合をのりこえ、階級原則に立つた戦闘的階級的労働組合を創出し、それに転化し、或いは、それにとつてかえていく課題と未組織労働者を組織する課題であり、この二つの課題の結合をとうして相互に戦線を強化し、労働者階級の

現代修正主義に抗し、共産主義運動を再建し、確固とした革命党を組織できずして、労働組合の戦闘的大衆的強化は、絶対ありえないが、又、われわれが、労働組合戦線に大きな影響力を持ちえずして、未だ知りえぬ数多くの先進的労働者と次々と接触し、革命の指導的担い手に組織化していくこと、真の労働者政党を建設することは不可能である。

### 3. 分裂下の少数派組合の戦術について

戦後日本の労働組合の組織形態の基本である企業別組合は、その組織形態が戦後革命の激動期に労働者大衆を急速に巨大な戦闘的組織を可能にした一条件—勿論、階級闘争全般の昂揚、とりわけ天皇制国家権力の暗黒支配にも唯一節を曲げなかつた日本共産党の再建と革命的労働者の活動と戦闘を重要な条件としている—であった事実が示すように、個々の企業の労働者大衆全体を比較的簡単に単一の組合に結集させる組織方針という側面を持っているが、そのことによつて又、労働組合が会社側の攻撃の前に容易に企業主義や本工主義に陥ちこみ、経営協議会的組織に変ぼうしたりする弱点をも持つており、歴史的にも一九五〇年の朝鮮戦争を前後するアメリカ占領軍の政治反動の時期に、資本は、産別会議を強引に分裂させ、反共民同が勝利した組合では、産別会議が

革命的大衆的戦列を実現していかねばならない。

また、既成労働組合については、総評傘下の過去に一定の戦闘性を維持してきた労働組合への取組みは当然にしても、同盟やIMF・JC、中立労連系等の組合に対する革命派の布石をも重視しなければならぬ。

とりわけ帝国主義的労働組合運動の牙城である同盟系やIMF・JC系の組合は、一般に、重化学産業など日本資本主義の戦略産業部門の独占体の直下にあり、ここでは厳格な労務管理、職制支配、右翼幹部による官僚的組合運営が普通であつて、既成の労働組合に革命派の影響力を強めることにせよ、戦闘的労働組合を別個に創造することにせよ、いちじるしく困難な任務であることはいうまでもない。

しかし、既成左翼や民同が完敗してきたこの民間独占体の労働組合戦線、労働運動の右翼的再編の牙城においても、真の共産主義運動を押し進めてきた革命派の労働者だからこそ、資本家の代理人、組合指導部と一般組合員を区別すること、資本と御用組合の横暴は永遠なものではないことを忘れず、正しい労働者政策、組合政策にもとづいて柔軟でねばり強い活動を堅持しさえすれば、必ず巨大な成果を獲得できるに違いない。

工場、職場に強力な党組織を建設する任務と、労働組合を戦闘的大衆的に強化し、労働組合運動を日本階級闘争の重要な構成要素に組みこんでいく任務とは、有機的關係にある。

既得した産業別統一団体協約を破棄し、企業別協約に変え、それ以後、労資協調主義にもとづいた企業別組合を育成するよう努めてきたのである。

従つて、たしかに多くの人によつて指摘されているように、日本の労働組合運動が、単なる企業別戦線の総和にとどまるのか、それとも、全国的規模の産業別の統一した戦線を内包したものにまで発展するのか、という問題は、特に独占資本が多数の工場や特定産業の大部分を支配し、技術革新が熟練労働の比重を低下させ、熟練労働者の職能別組合の限界を強めている現在の日本にあつては、一般論として階級闘争の発展にとつて重要なことであるには違いない。

だが、既成左翼のこうした「統一と団結」の一般的な金科玉条は、まさに、如何なる階級関係の下で、如何なる成長段階にある前衛的主体が、如何なる手段で、如何なる目的のために実現していくのかという最も基本的な問題が完全に欠落しているが故に、今日では危険な実践的帰結をもたらしつつあるのである。

資本は戦後読売競争から始まり常に戦闘的労働組合を右から分裂させてきたし、最近では、ますます日本帝国主義の戦略路線と結合した系統性と体系性を持った攻撃が強められてきている。

三池、ソニー、ゼネ石などの分裂は労働争議中の分裂であり、三菱重工、日産プリンスの分裂は、資本の集中と集積、企業合併に伴う分裂であつたが、七〇年一一

月の石川島分裂では、石川島と播磨の合併と石播労連の結成によって、「造船重機産業の労連結合」と「労働戦線統一」を旗印にした組合分裂であったことがそれを示している。

かかる中で、強いられたものであれ、或いは積極的なもの。例えば、全造船、浦賀、玉島分会による多数派である民連除名処分であれ、分裂下の少数派組合の戦術が、先進的労働者によって真剣に検討され、実践されている。

戦闘的の第一組合の旗を掲げた少数派組合運動について共産主義者が注目すべき点は、次の点にある。

第一は、労働組合の戦線のみならず、労働者階級の解放を考える戦闘的活動家は、全体として「孤立」を強いられており、労働戦線の現状を左翼的に大衆的に打破するための任務とは何か、「孤立」の内実のどのような深化によって現状打破の展望が開けるのかという問題が先進的労働者によって検討されており、第二は、石川島分裂で代々木「共産党」が、先進的労働者の闘いを裏切り、全造船機械本部の指示を拒否して、「内部で闘う」という理由で同盟路線にぐらぐらえし、当然にも惨敗を喫したという事実や、鉄鋼労連宮田や化合労連太田などが帝国主義的労働組合を軸にした「戦線統一」へ乗り出している現実が象徴するように、既成左翼や既成指導部の先に見た欠陥を学んだ「統一と団結」の思想が、「統一」の名による「分裂」、「分裂」による「統一」の事態に無

力であることが暴露され始めており、少数派組合運動、即ち、戦闘的の第一組合運動を含めて日本の戦闘的労働組合運動の防衛、継承、発展の指導的担い手として革命派の重要な位置が浮び上ってきていることである。

更に第三は、少数派組合運動は、過去の戦闘的の第一組合の旗を守るとともに、だが過去の水準にとどまらないうで、更に過去の第一組合の限界と欠陥を反省し、闘う組合民主主義の確立、本工主義の克服などの新しい試みが追求されはじめていることである。

勿論、現在の少数派組合が、帝国主義的組合の重圧によって解体したり、主観的な単なる赤色組合に墮落したりする可能性は、決して無いとは言えないし、特に、その指導的労働者が、左翼社会民主主義の枠を突破できなかったり、サンジカリズムに染まる場合、もつともその可能性が現実のものとなる危険が強くなるであろうことは言うまでもない。

われわれは、少数派組合のもつ特殊性を単純に全般化した「美化」したりすることはできない。

少数派組合とは、帝国主義的労働組合の伸長と階級的労働運動胎動の時期的特徴的産物であり、既成労働組合の前者への無力化・屈服の中で、労働組合の本来の性格と任務を正面から提起している点でこそ重要な意義を持っている。

共産主義者とその組織の帝国主義的労働組合の解体と階級的労働組合の創造のための戦術は、革命の戦略的展望の下に極めて柔軟で多面的なものでなければならぬ

し、われわれは、そのためにこそ、いつの日かの第二組合労働者と階級的合流を展望して圧倒的孤立と差別攻撃に屈服せず、労働組合の名誉のために日夜奮闘している先進的労働者による第一組合運動の新しい諸経路をよく研究し、学ばなければならぬ。

一九二十年、コミンテルン決議「労働組合、工場委員会と共産主義インターナショナルに関するテーゼ」は次のように規定している。

「四：各国共産主義者は、資本主義の打倒と共産主義のための意識的戦闘機関にかえるために組合に加入すべきである。共産主義者は又、労働組合の存在しない場合にはみずから組合を組織するようイニシアティブをとるべきである。

すべての労働組合からみずから身を引いたり、あるいは別個に組合を創設するような人為的な企ては、共産主義運動にとつては極度に危険である。ただし、組合官僚側からの例外的な暴力行為（たとえば、革命的組合支部が日和見主義的組合本部によって解散せしめられるような場合）、あるいは組合貴族にのみ奉仕するような偏狭な政策、すなわち未熟練労働大衆を組合に加入せしめぬような政策によってやむをえない場合は別である。それは共産主義への途上にある大衆を、最も進んだ、そして階級意識に目覚めた労働者から引き離し、ブルジョアジーと裏で手をつないでいる日和見的指導者に、彼らを引き渡すという危険を内包する。労働者大衆の不決断、

彼らの知的無定見、日和見主義的指導部の見せかけだけの主張に対する感受性は、激化する闘争の過程においてのみ克服される。すなわち、プロレタリアートの広範な層は、彼ら自身の経験から、彼らの勝利と敗北から、資本主義経済組織のなかで人間らしい生活条件を得ることは不可能であることを学び、また進んだ共産主義的労働者は、経済闘争を通じて、単なる共産主義理念の伝達者たるだけでなく、闘争と労働組合の最も決然たる指導者として、いかに行動すべきかを学ぶからである。このような方法によつてのみ、共産主義者は日和見組合指導者を排除することができる。このような方法によつてのみ、共産主義者は労働組合運動の先頭にたち、組合を共産主義的革命的闘争の機関にかえることができる。

共産主義者は労働組合の形態よりも、むしろその目的と性格により大きい重要性をもたせるものであり、したがって、組合の分裂を避けることが、組合内での革命的仕事を放棄し、組合を革命的闘争の道具たらしめ、プロレタリアートの最も搾取されている層を組織するという企てを放棄することになるような場合には、共産主義者は、組合の分裂をためらうべきではない。だが、こうした分裂が必要であることがはっきりした場合でも、共産主義者が、日和見主義指導とその戦術に対する不断の闘争と、広範な労働大衆の経済闘争への参加を通じて、大衆がまだ理解していないようなはるか先の革命的目的のためにではなく、彼らの経済闘争における労働階級の

の最も直接かつ実際上の利益のために分裂が必要であることを、広範な労働者大衆に納得させた時にのみ、このような分裂が実行されるべきである。（『コミンテルン・ドキュメント 第一巻』 一三三頁）

#### Ⅳ 未組織労働者の組織化とその戦闘的戦列のために

##### 1. 中小企業労働者の実態と労働組合運動の特徴

日本の労働者の大多数は中小企業で働いており、製造業労働者をとってみると、三百人未満の従業員をもつ企業を規準にすれば、約七十%を占めている。（表1.）

中小企業、特に、小企業、零細企業になればなるほどその資本の有機構成は低く、労働生産性が社会的水準より低位であるのは言うまでもない。

従って、経営の不安定としてあらわれているように、小資本、零細資本の利潤率は、平均利潤率以下の水準への圧力を受けざるを得ないが、にもかかわらず、その資本を全体として機能資本たらしめているのは、その資本が、独占資本によって系列化され、独占資本と競争する

##### （備考）

1. 総理府統計局『就業構造基本調査』より  
△印減
2. 日本資本主義の高度成長の足場を固めた時期である六十年代初頭の製造業部門の大企業労働者の激増と六十年代後半の零細企業労働者の激増に注目せよ。

ことのない部門に組みこまれていくこともあるが、重要なことは、独占資本の強蓄積、高度成長とともに再生産された相対的過剰人口、産業予備軍を基盤にして、その一部を低賃金労働力として吸収しているからに他ならない。（クラン）

そして過剰人口が、大きな賃金格差、労働条件格差をもつて、低賃金、悪条件で就業する結果、中小企業労働者全体が同様な低賃金、悪条件におかれ、又、それは、日本の労働者階級全体の労働条件の水準を引き下げる死傷ともなっている。

特に、政府の社会保障政策の貧困など、過剰人口、産業予備軍が、非労働所得を充分手にいれることができず、完全失業形態で顕在化する諸条件が欠如している冷酷な日本の現実ではそのように作用せざるをえない。

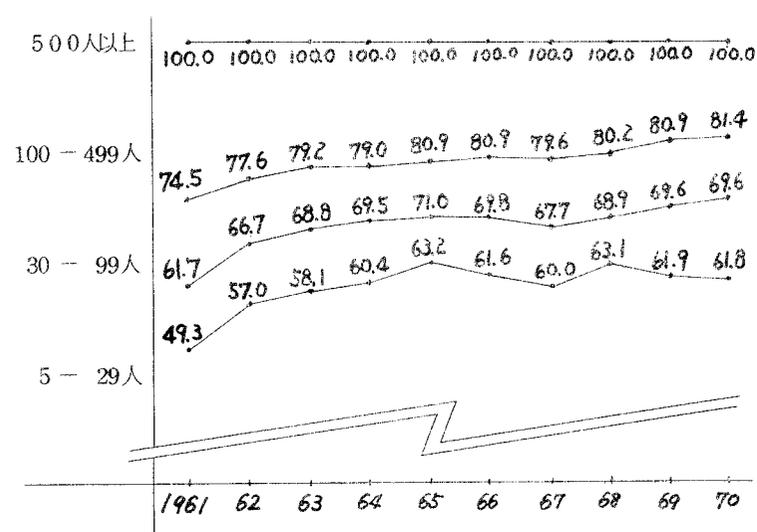
こうして多くの中小企業労働者は、極めて低い賃金と、不規則な残業、長時間労働、厚生施設の欠除、企業家族の思想攻撃、無権利状態といった劣悪な労働条件を強制

表1. 製造業企業規模別就業者推移

	実 数 (1,000人)				増 減 率 (%)		
	5 9	6 2	6 5	6 8	59-62	62-65	65-68
製造業	6,855	9,041	9,837	10,750	31.9	8.8	9.3
1-9人	866	861	843	1,143	△ 0.6	△ 2.1	35.6
10-29	1,233	1,363	1,543	1,551	10.5	13.2	0.5
30-99	1,303	1,654	1,748	1,884	26.9	5.7	7.8
100-299	894	1,242	1,370	1,451	38.9	10.3	5.9
300-499	348	541	590	673	55.5	9.1	9.0
500-	2,131	3,338	3,683	4,016	55.2	10.3	9.0

されており、又、中小企業の経営不安定は、直接そこで働く労働者の生活と地位とその将来を、不安なものにしていく。

グラフ1. 製造業企業規模別賃金格差動向



(備考)

1. 労働省『毎月勤労統計』による。  
 2. 企業規模別賃金格差は、六十年代前半縮少傾向を示し、後半にはいつて、停滞傾向ないし拡大傾向にあることに注目せよ。  
 六十年代前半の企業規模別賃金格差縮少は、独占資本家の「高度成長」↓「労働力不足」↓「格差縮少」↓「低賃金解消」論とは全く異なり、独占資本家の低賃金のための労働力政策の結果である。  
 即ち、格差縮少の主因は、独占大企業の若年労働力追求と総支払い賃金の節約、職務給導入による中高年令層賃金の相対的切り下げ、それによる中小企業の若年労働力求人難と初任給引き上げ、中高年令労働力による総支払い賃金の増大などであり、その実質は、独占企業の賃金が、中小企業賃金水準に平準化していったものである。  
 六十年代後半の格差拡大は、独占資本家が、臨時工、日雇、季節労働者、パートタイム、主婦内職など、差別的雇用形態を急速に拡大再生産し、低賃金政策を追求した結果である。

第二。中小企業労働者の闘いは、その強制された状態からして、賃金問題や労働環境問題だけの課題にとどまることがなく、生活の全領域、物価、税金、住宅、保育所、社会保障問題へも発展し、従って、地域の労働者との共闘、団結へと深化せざるを得ず、一般に、労働と生活の多面的課題をとりあげ、自治体への闘争をつうじて、地域の労働者と組合との団結をつくりだしていくのは、中小企業労働者の闘いの特徴的任務である。  
 第三。全港湾関西地本建設支部など先進的な中小企業組合の闘いが教えているように、未組織労働者の組織化の課題に重要な位置と役割を占めている。

中小企業労働組合運動の現状をみると、総数約一六百万人の中小企業労働者のうち、組合に組織化されているのは、わずかに十七パーセントであり、たとえ組織化されていても、産業別組合や地域合同労組に結集している組合は少く、多くの場合、単独組合として、激しい企業間生存競争におかれている中小企業の御用組合的色彩を持っているのが現実である。(表2。)

こうした点から導き出される中小企業労働者の労働組合を武器にした闘いは、日本の労働組合運動の前進にあってどのような位置を占めており、どのような役割を果すべきだろうか。

第一。中小企業労働者の生活改善と諸権利獲得の闘いは、中小企業労働者が闘いつつた労働条件、生活水準と闘争経験を武器にして、共産主義運動と結合していく条件を形成していくが、それは、単に中小企業労働者だけの運命に関するものにとどまりえず、資本家からの労働者階級全体の精神的肉体的破壊攻撃と対決し労働者運動全体を前進させる重要な要素である。

多くの場合、極端な低賃金、悪い労働環境、政治的無権利状態にある中小企業で働く人々の切実な社会的要求のための闘争は、独占資本主義体制の下での中小企業経営の弱体的性格が一定の困難条件としてあるが、しかしそのことによって、その闘争は、必然的に階級全体の賃金水準の問題、労働基準法改悪問題などに目をむけ、そして、主要敵、独占資本に対する労働者階級をはじめとする全勤労人民の闘争と結合する方向に発展せざるをえない。

資本蓄積のための差別的雇用形態、搾取形態と、その諸結果と対決する中小企業労働者の闘いは、日本の労働組合運動、特に、大企業本工組合の真の任務を問ひ、労働者階級解放闘争の戦闘的大众的活力になつていかねばならない。

表2. 企業規模別推定組織率(民間企業・1969年)

企業規模	全産業	製造業
計	28.3%	38.0%
500人以上	63.0	76.5
100-499人	33.5	38.9
30-99人	9.8	10.9
29人以下	4.9	1.5

(備考)

1. 労働省『昭和四十四年労働組合基本調査報告』による。  
 2. 『日本労働年鑑七二年版』より重引。  
 組織率は企業規模が小さくなるにつれ低くなつていくことに注目せよ。

戦後日本の階級構成の歴史的推移

(単位 千人)

階級別就業人口構成	1950年	1955年	1960年	1965年
労働力人口	36,309 (100.0)	39,908 (100.0)	44,009 (100.0)	48,294 (100.0)
A 資本家階級	681 (1.9)	807 (2.0)	1,183 (2.7)	1,757 (3.6)
B 中間階級 — 自営業者及び家族従業者層	21,403 (58.9)	△21,521 △(53.2)	△20,100 △(45.7)	△18,501 △(38.3)
a 農林漁業従業者	16,189 (44.6)	△15,046 △(37.7)	△13,486 △(30.6)	△11,097 △(23.0)
C 労働者階級	13,888 (38.2)	17,419 (43.6)	22,237 (50.5)	27,463 (56.9)
サラリーマン層	4,335 (11.9)	4,977 (12.5)	6,237 (14.2)	8,225 (17.0)
生産的労働者層	7,267 (20.3)	8,956 (22.4)	12,253 (27.8)	14,089 (29.2)
不生産的労働者層	1,552 (4.3)	2,733 (6.8)	3,429 (7.8)	4,483 (9.3)
D 自衛官、警察官、 保安官、警士	337 (0.9)	431 (1.1)	489 (1.1)	575 (1.2)

3.

この表は、労働者階級、勤労人民の中に社会的貧困を蓄積する過程を直接示してはいないが、この表からだけでも、ほんの一にぎりの資本家階級の利潤のため、どれだけ多くの勤労者とその家庭が生活不安を強いられているかを明瞭に知ることができる。

2.

この表は、労働者階級、勤労人民の中に社会的貧困を蓄積する過程を直接示してはいないが、この表からだけでも、ほんの一にぎりの資本家階級の利潤のため、どれだけ多くの勤労者とその家庭が生活不安を強いられているかを明瞭に知ることができる。

(備考)

1. 「日本労働年鑑六九年版」より。△は減少。

四九年ドッジ・ラインを機とする戦後日本資本主義の復興、重化学工業を中心とする世界一の高成長が、中間階級、自営業者を急速で激減させ、無産化させ、そして労働者階級を量的に増加させ、プロレタリア革命の条件をいよいよ形成していることに注目せよ。なお、六七年には、ついに農業就業人口は二十%を割っている。

「ポルテ五号」の山岡一雄氏の寄稿でも示されているように、中小企業労働運動の場合、企業経営の不安、企業家意識の存在、従業員数の地位の不安定と数の少なさなどの条件によって、労働者のささやかな要求や労働二権などの権利闘争ですら、一挙に非和的に爆発し、首切り、ロックアウト、警察、ガードマンによる弾圧といった過激な事態をたどる事象が度々あり、持続性、大衆性、闘争性を持った巨大な戦線を創造していくことは生易しいことではないだろう。

2. 未組織労働者の組織化のために

全労働者階級の三分の二の数を占め、二千万近い数の未組織労働者、労働法の保護もなく、低賃金、悪い労働条件、無権利の状態にあり、バラバラに分散化され、自己の社会的力を現実化することのない労働者を組合に組織する活動は、既成組合の戦線的強化の活動とともに、革命党と先進的労働組合の労働者階級の強力な大衆的階級的戦列の創造のための責務の一つである。

六十年代後半、高度経済成長、資本の高度蓄積は、労働力の吸収と同時にその反発を更に大規模に強め、国

資的構造「改造」政策によって中小企業労働者、「非労働力」としてあった家庭婦人や都市、農村の独立自営業者とその家族、日雇い、臨時労働者などの存在形態で相対的過剰人口を強引に析出しており、新たな差別的低賃金労働の再編、拡大は、中小企業の中だけでなく大企業の中でも、臨時工や社外工制度、季節工、パートタイム制度などの差別的雇用形態で未組織労働者の数を増加させている。

五〇年代から出発した戦後独占資本の強蓄積の過程は、より多数の勤労者を人間的搾取材料として資本主義的搾取関係に包摂し、剰余価値生産のための各種の方法の発展を媒介として、相対的過剰人口を析出し、労働者状態を全体として悪化させる過程に他ならないこと。まさに、無権利のまま、差別的低賃金や長時間労働などで苦しんでいる臨時工、社外工、季節工とは、その相対的過剰人口の特定存在形態であること、などのマルクス主義観点に立って、独占資本家の「高度成長」労働力不足 ↓ 低賃金解消 ↓ 労働者生活の向上 ↓ 福祉国家」論の欺瞞性と非科学性と対決し、又、非マルクス主義的な現象的思考にもとづく「窮民主義」の小ブル性を暴露しつつ、未組織労働者の組織化をつうじて、労働者階級と勤労人民の解放闘争の重要な革命的戦列にうち鍛えていかねばならない。

## Ⅶ 党建設、工場細胞建設こそ、階級的労働運動の鍵

―創意工夫をもって工場、職場に進撃せよ！―

日本帝国主義が日米安保体制の堅持の下侵略と戦争にむけた対中二面政策、南朝鮮への進出などの対外政策を追求し、国内労働者人民の生活破壊と政治反動の攻撃を強め、階級矛盾が激化しつつも、共産主義的指導の危機が顕在化し始めている情勢の下で、労働者階級と勤労人民がその解放のためまじつかりと把えるべき主要な環は、ひき続き腐敗した現代修正主義と革命的共産主義の分裂を押し進め、深化し、革命派の小ブル的弱点を克服し、革命家の党的結束、全戦線の指導部の結束をかちとること。

われわれは、その為に努力を集中し、たえ間なくそのために自己をうち鍛えていくものであるが、その活動は、労働者階級、人民の解放闘争の深部にまで社会主義的精神を貫き、よって大衆的戦列を強化していく活動と固く結合される時、最も大きな成果を産み出すことができる。「六十年代」、それは、いくつかの点で不可避でもあったが、スターリン主義、現代修正主義に対して、革命的共産主義が、小ブル共産主義とプロックを組み、混然として反対した一時代であり、運動の生命力にもかかわ

らず、革命運動が、全領域で未熟で、確固とした系統性と計画性が欠如していた一時代であり、共産主義運動が、労働運動と緊密な結合を未だ作りえず、そのことによつて両者の力が弱められてきた一時代である。まさに、このような欠陥を克服し、日本革命運動と労働運動の成長した新時代を切り拓くことを目的とするわれわれは、当然にも、政治的にも、実体的にも、労働者階級の党派性をわがものとするために全努力を傾注しなければならぬ。

今、革命的労働者によつて会組織諸活動の重要な領域が担われつつあるとはいへ、現実の労働戦線においては、われわれの勢力は、問題にならない程小さなものである。一つの工場や職場を労働者階級解放闘争の不拔の大衆的拠点と要塞に築きあげることが、決して一朝一夕の事業ではない。

五年、十年単位の規模の長い年月、その工場、皆と仕事と生活の苦楽を共にし、しかも、一日も休まず革命的活動を積み重ねることによつて、革命的労働者とその党は、労働者大衆から全幅の信頼をうると考えるべきである。

われわれは、マルクス主義とプロレタリア革命党建設の旗をいよいよ鮮明にし、計画性と系統性をもって工場、職場、労働者街に接近し、労働者大衆の中に大きな基礎を置かなければならない。

そのための前提として、組織生活全般から、市民的作

風を完全に一掃するとともに、又、全同志が、流血の時代、大規模な戦闘行動の時代に、敵との攻防の最前線に立ち、身をはって戦闘を組織しうる英雄主義とともに、労働者大衆の中での地道な日常的労苦をいとわず、一步一步着実に革命派の地歩を築いていくことができるだけの忍耐強さという英雄主義をも体得することが重要である。

われわれの労働戦線における組織方針は、工場細胞を核として、その自己増殖、共産主義的前衛的質的、量的強化とそれによる大衆的影響力と組織化の前進を基本形態とするが、労働者大衆への接近の方法と大衆的組織化の方針は、固定的なものでなく、時々の階級情勢によつて正しく決定されなければならない。

わが国の労働組合運動の序幕となった労働組合期成会は、どのようにして発足したのだろうか。

一八九七年（明治三十年）六月、東京で片山潜、高野房太郎らは、労働演説会を開催し、興味を持って集った千二百余名の聴衆に対して、演説会の最後に、「労働組合期成会を組織して労働運動をやるから有志を募る」と訴え、鉄工や活版工など四七名を組織している。

七月五日には、更に二十余名を加えて、労働組合期成会を結成し、又、演説会を開き、新入会員三十余人を得ている。

こうして演説会を続々各地で開いて、その年の終りには、なんと千八百八十名もの日本で最初の産別労組となる

鉄工組合を組織しているのである。

性格を異にするが、最近では、六七年秋からの激動の数年間に急激に誕生した反戦派労働者の組織化のための諸活動の中で、地区反戦討論会、政治集会の活動は、極めて重要な位置を占めていたし、又、一定の成果を獲得している。

これらの事実は、階級情勢、労働者大衆の動向を正しく分析し、創意性を發揮して、労働者大衆への主要な接近の方法を決定し、実現していくことの重要性を教えている。

七十年代にはいつて若干の階級情勢は異なりつつあるが、労働者のための映画会や政治討論会の主催、合法的な労働者学園の創設、社民系の労働学校など労働者の結集している各種の団体への加入戦術、反戦派労働者の大衆的闘争機関の強化を援助すること、そこで政治訓練を経た活動家を、戦略的工場へ配置し直すこと、街頭で数多く帖られている労働争議のステッカーをたどつて争議中の労働者に連絡をつけること、革命的學生運動、高校生運動の中で産み出される社会主義的青年を直接職場に送りこむことなど、工場への接近の方法にもっと創意工夫をつくし、あらゆる手段を利用して会組織の大衆的基礎を工場の中に置くよう努力しなければならぬ。

野蛮なツァーリ政府の下でも工場仕事をやり遂げたロシア・ボルシェヴィキ達の強い意志、或いは、天皇制国家権力の暗黒の警察支配の網をくぐりつつ、心血を注い

### Ⅲ 研究・メモ

## 釜ヶ崎解放にむけて その序

野口 徹



で工場接近を試みた一九二〇年代後半から三十年の日本共産主義者や先進的労働者の革命的精神の一部でも学びとるならば、われわれの直面しているこの部門の困難は必ず克服されるものである。

労働戦線においても、われわれは、多くの未経験の領域を持つており、その領域に着手する度に、試行錯誤は避けられないだろう。

だが、歴史的真相、マルクス主義に対する忠実と、生きた現実と実践に対する思想の謙虚を持ち合わせる人間のみが、たとえ幾多の迂余曲折を経ても、日本革命の勝利への大道に立つことができるに違いない。

★現代修正主義に対決し、共産主義運動再建をかちとれ！ マルクス主義の旗の下に、プロレタリア革命党を建設せよ！

★アメリカ帝国主義を全アジアから叩き出せ！アジア反動の砦、日本帝国主義打倒！

★田中政府打倒！労働者人民の政府をつくれ！プロレタリア独裁の樹立！

佐野茂樹著・発行

佐藤政府を倒せ！

武装闘争と大衆路線を結合、発展させよ！

1971.9. 発行 定価 150

帝国主義を攻囲せよ！

—獄中論文選—

1972.3. 発行 定価 440

<武装蜂起の党> 宣言

近日発行予定 価未定

「社会運動が、もしも彼ら二十世紀の新しい奴隷階級たる日雇労働者を、よそに見ているのだつたら、それは実に馬鹿馬鹿しいお祭り騒ぎにすぎない。

社会政策や社会事業が、彼らの飢えたる口よりついで出る呪咀に対して、一時のがれの施策を行うにすぎないものであつたら、強盗が被害者の口に、さるぐつわを穿かせるのと何等選ぶところはなない。

彼らが、その悲惨なる境遇にぶつ倒れて行くのを見て、宿命だから仕方ないものであることとしたならば、夫れは、いいようなない冷血動物だ。

更に二十世紀の文明は、その重大なる使命として、日雇労働者の解放をなさねばならぬ責任がある。

彼らをして、かくも悲惨な境遇に至らしめたるものは実に二十世紀文明自身ではないか。」

（『日稼哀話』 昭和五年）

「しかしながら、一般国民の生活実態と比較すると、この基準では、総理府統計局の家計調査の示す一般勤労世帯の平均生活水準の約四十％程度を保障するにとどまっております、頻繁な保護基準の改定によって、被保護者の生活水準は相当に向上してきたにもかかわらず、一般に比べると、なおはなはだ低い水準にあることを物語っている。ところが、前に述べたように、この現行基準額においてさえ、保護をうけてはいないが、わずかに保護基

準を維持しているにすぎない低所得層が、九百万ないし一千万人におよんでおり、国民の所得水準が平均的に見れば上昇しつつあるにもかかわらず、停滞を続けているのである。」一九五七年、初の『厚生白書』において、

日本の支配者自からが明らかにした日本人民の窮乏した状態であるが、これらの水準がいかなるものであるかは、朝日訴訟第一次審判決定の中で（一九六〇年）、「証人未高信の証言によれば、この層に属している人々は相当数に及び、その多くは最低所得で労働に従事し、何年に一枚の肌着で安んじ、はだして走りまわり、歯みがき・歯ブラシも使わず、用を便ずるにも紙をもってし得ないというような状態を続けながら、なお一応の健康を維持して生活しているというのであるが、云々……」と述べられ、この裁判長をして次の結論にいたらしめたわけである。「現実の国内における最低所得層、たとえば低賃金の日雇労働者・零細農業者等、いわゆるボーダーライン層に位する人々が現実維持している生活水準をもって、ただちに生活保護法の保障する『健康で文化的な生活水準』にあたるかと解してはならない。」と。

このボーダーライン層が、日本の労働者人民の貧困の氷山の一角、顕在化した一部でしかないことは明らかである。この基準が、最低生活費ではなく、最低生存費で（医者）の判定によると、I母さんの知能が割合高くても子供の知能が、ガタ落ちになる//）しかないことが、この裁判の過程で何度も強調され実証されているからであ

ある。

池田一佐藤の高度成長政策「日本国家繁栄」なるものが、このボーダーライン層の貧困を解消したのであるか。

最近の厚生省の資料においても、なおかつ一三〇万世帯一五百万人前後が、この要被保護者として上げられている。

朝日茂が、いみじくも言った「野良犬みたいな生活」を数百万の人間が資本主義によつて強制され続けていることに怒りを新たにしているが、われわれは、この数字が、現実をきわめて過少に評価していると疑がう当然の権利を持つている。

安保闘争と連帯して克ちとられた、この朝日訴訟第一次審判勝利に、「たとえ生きていけようと、ゆけまいと、六百円でも、もらえないよりももらえたほうがいいのだから、感謝すべきだ」という言葉をもって反撃し、以後高裁・最高裁に国家権力の圧力をもって、第一審判決をくつがえし、労働者の闘いと、この人間の生きるというささやかな権利さえも弾圧したのは、この池田・佐藤内閣とその下の厚生省であるからだ。

そして公判で明らかにされた厚生省の「感謝すべき政策」をきくと、

〇二年に一着の肌着、一年に一枚のパンツは最低限度の需要を満している。ちり紙が足りなければ新聞を当てればよい。

〇一ヶ月に一度の散髪代で足りなければ、散髪の周期を延ばすか丸坊主にすればよい。

〇日用品の中に、ペン・インク・ノート・カミソリ・クリーム・メンソレターム等が組み込まれていないのは必要不可欠ではないからだ。

〇精神的修養に関する読書・ラジオ・テキストによる聴講等の修養娯楽費は長期の療養者には高度の要望であつて必要はない。

云々と挙げていけばきりがなが、これらの「慈悲ある」政策が、いかに厳格に実施されなおかつ生活保護の新規抑制・収入認定・扶養義務の強化・「適正化」の名による病院からの患者の追い出し・つきそい婦の削減が行なわれてゆき、八尾事件にみられる保護費打ちきりによる自殺が続出（最近もこのケースが起きている）するというの中にみられるように、われわれは、厚生省による「統計上」の貧困べらしが、「現実の」貧困をどれだけ増大させてきたかを知っているからである。

ブルジョア経済学者や政治家が、いくら「福祉国家」を語るうが、われわれが知ることができるのは次のマルクスの言葉である。

「これに反して、近代の労働者は工業の進歩とともに、向上する代りに、かれら自身の階級の生存条件よりも下にますます深く沈んでいく。労働者は貧民となる。そして貧困は、人口や富よりも、もっと急速に発展する。これによつてわかることは、ブルジョアジーが、もうこれ

以上社会の支配階級としてとどまりえず、自分の階級の生存条件を規制的法則として社会に押しつけえないということである。かれらには支配する能力がない。なぜなら、彼らはその奴隷に対して、その奴隷制の内部においてさえ生存を保証してやるだけの能力がないからであり、自分が奴隷に養なわれるどころか、自分の方で奴隷を養なつてやらねばならぬ状態にまで奴隷をおし下げざるをえないからである。」（『党宣言』）

われわれは、この現実を日本の都市・農村を問わず、いたるところで見ることができ、これから報告しなければならぬ「釜ヶ崎の状態」は、その中でも最も露骨にその様相を表わしているとともに、労働者層の貧困の現状が、ブルジョア国家政府の支配の無能さ、その裏がえしのむき出しの警察暴力、そして、その庇護のもとで吸血鬼のように労働者の血をすする支配師・暴力団そして資本家のおよぼす害悪によつてもたらされたものであり、労働者にこれらのものを自からの手で打ちたおす以外には解放されえないことを日常的に教え、労働運動と解放運動、総じて労働者の革命的団結をうみ出さずにはおかない。

全港湾建設支部西成分会の3年間の闘い、暴力支配師追放釜ヶ崎共闘会議の今年の闘いは、釜ヶ崎労働者解放の不可欠なものとして闘かわれたものである。

われわれは、釜ヶ崎解放を最後まで推進してゆくために、釜ヶ崎の現状のより深い把握をしなければならぬ

バクトーレン隊社会・売春地区等の調査が行なわれているが、その内容も、羅列的である。

失業の問題にしても、(a)経済的失敗 (b)疾病による (c)精神障害による (d)離婚による扶養喪失等々の問題、アルコール中毒、麻薬中毒者、賭博者、犯罪、非行、売春、差別、私生児、幼児死亡、極道、教育、労働、老人問題、住宅問題、衛生、ドヤ、飲食店の問題等。いわゆる労働者地区に特有の問題を、「きめこまかに」調べ上げている。（この内容は、われわれ自身でも整理し今後発表していくつもりである。）

そして、このように調べられた膨大な資料は、大学の研究所か、警察署・行政庁の倉庫へほうりこまれ、何年に一度の研究発表か、緊急の治安対策のため以外には日の目を見ることがない。たいがい公開禁止の名目がついている。「愛隣地区・同和地区の資料を公開すると地域住民が迷惑をうける。」行政自身の怠慢を棚上げにし、釜ヶ崎から来た労働者にこういうことを言う。

この学問は、資本主義の矛盾の一現象形態である貧困に対する様々な現象形態の指摘、それを示す調査資料を残した成果を別にすれば、驚くべき無思想性を表わしているのが特徴的である。（小ブルジョアは貧困の中に貧困しかみない。）

たとえば、「下層社会論」「社会病理学」の「大権威」たる大橋薫の文章をひくと、

「地域構造については、社会的病理現象の発生は、地

し、するつもりである。「労働者階級の状態は、現代のあらゆる社会運動の実際の土台であり、出発点である。なぜなら、それは、われわれのあいだに現存する社会的困窮の最高の・もつとも露骨な頂点だからである。」（エンゲルス『イギリスの労働者階級の状態』）そして、ここで獲得される内容が、必ずや全国の労働者解放と、日本の革命運動に大きな教訓を与え、我々を教育するだろう。

批判の武器を、武器の批判におきかえる前に、まずわれわれは武器を磨かねばならない。

今まで日本の貧困労働者の現状の系統的な研究・調査分析は、左翼・マルクス主義者・労働者によつて行なわれてきたというよりも、むしろ、ブルジョア学者によつて一方的におこなわれてきた。山谷・釜ヶ崎のドヤ街、日雇労働者の問題もその例外ではない。

それは「社会学」という名のもとに「スラム論」「都市論」「社会不適応理論」「解体社会学」のような様々な「理論」を生み出した。その中でも現在なお、ポピュラーで根強い体系をもっているのが「社会病理学」と、その表裏をなす「下層社会論」であり、このもとに、スラム地区・仮小屋・ブラック地区・パチャ部落・ドヤ街・未解放部落・在日朝鮮人居住地区・失対労働者地区・家内工業地区・露店商・テキヤ社会・日雇労働者地区・

域分化の過程と関連が深い。いうまでもなく、都市地域は生態学的過程によつて、種々なる下部地域に分化するが、その結果は、下層階級のもの、分擬して下層地区に発生しやすい。また犯罪の行為地は盛り場などに多い。頭の悪い小生は、最後の一文しか理解できないが、上の理論が、現実社会に適応されると、「未解放部落の問題は、高知市の社会病理を考える場合に、もつとも重要な条件であり、高知市における社会的病理の発生は未解放部落の存在によるところが多い。」という、学問と客観主義をよそおった差別まる出しとなる。

そして、この学派の代表的人物であり大橋薫の先生である磯村英一に到ると、その無思想性はむしろ無邪鬼である。「山谷事件が起つてから、ちょうど一年の昭和三年八月一日の夜、同じような事件が、大阪市西成区を中心とする通称「釜ヶ崎」のスラム・ドヤ地区一帯に起つた。文字通りの暴力の町と化した。」「山谷のときは、地区内に新しい「マンモス」と俗称される交番ができた。警察は住民の保護を万全にするためと考えて交番を整備した。住民はそれを地区への弾圧と考えた。」（『日本のスラム』磯村英一編「山谷・釜ヶ崎体験」）

この無思想性はブルジョア思想そのものでしかないが、それ故、これらの資料は大いに反労働者的な警察・行政の利用するところとなり、様々な労働者統合政策が次々と行なわれたのである。たとえば東京においては、山谷、高田馬場、芝浦への寄せ場の分散、関西においては釜ヶ

崎への寄せ場の統合集中。そして労働者管理の合理化が労働センターの設立・精神病院（現在年間二百人もの釜ヶ崎労働者がプチ込まれる）「浮浪者収容施設」の完備など、保健所・衛生局・職安・大阪府労働部・警察・宗教団体によって緻密化されていった。彼らは暴動から教訓を得ているのだ。たとえば、西成警察署の「涙ぐましい」活躍をみると「昨年八月西成集団暴力事件の発生後の昭和三十六年九月一日付で、防犯相談コーナーが新設されたが、当時は労務者はもとより、ドヤ街及びビラム街の居住者も、コーナー活動に対して全く「理解」を有せず、白眼視し、疑惑の眼をもって眺めていたので、係員は文字通り行きなやみ苦難の道を歩んだ。（アタリマエダ//）しかし係員の昼夜を分かたぬ「献身的」（反革命的と読め//）活動が「理解」ある篤志家からの寄贈金品を有効適切に活用し、合わせて関係機関・各種団体の時宜を得た協力により、住民感情も、日を追って好転するようになった」（昭和三十七年九月 大阪府西成警察署「一年間の歩み」）これら国家による支配の意欲は、暴動を「称讃」し、これを記憶にとどめることが、一杯であった労働者に比べるときわめて対照的である。労働者を組織化し、資本金・国家権力との闘いへ指導する組織の不在が、その組織を支えぬく思想と理論の不在がこの差を決定的にした。そして現在においても、この問題は十分に克服されてはいない。

われわれは、必ずや、この釜ヶ崎で、われわれ自身

の解放の武器はマルクス主義的思想・理論、そして、それをにない技巧労働者を獲得するだろう。われわれは決してあせらない。

(注)

最近一部革命的左翼の活動家・学生によって下層プロ論・流動的下層労働者論が展開されているが、それらはだいたい、ブルジョア社会学で展開された「下層社会論」を左翼的言辞で書き変えたものか、革命戦争・武装闘争を接木したものか、階級闘争を加味したものでしかないことを指摘しておく。ただわれわれは、これらの活動家が単純に反動的であるというつもりは全然ない。むしろ一定の進歩性と必然性があると理解する。なぜなら、その原因が革命的労働者政党の未形成と代々木「共産党」の無能さにあるからである。労働者階級の組織化を放棄し、労働者階級を都市自営業者と一緒くたにし、都市労働者として解消（「階級」を「階層」へ解消するとは大した手品だ。これによって階級闘争と革命が永遠に彼岸化されて、残るのは選挙だけだから）してしまったこの「党」は、御用マルクス主義学者を動員して、民主商工会運動の理論づけにマルクス主義を墮落させ、労働者階級が、日々この資本主義の下でうけなければならぬ苦痛（貧困・労働苦・奴隷状態・無知・粗暴・道徳的墮落）「資本論」の分析をブルジョア学者にゆだねてきたからである。

それ故、日本資本主義の下で、顕在化する階級闘争と

矛盾に身を呈する青年・学生が代々木「共産党」のふりかざす「マルクス主義」と結合するのではなく、ブルジョア社会学の「下層社会論」に依拠せんとすることはある意味で当然だったといえる。

しかしながら現実の階級闘争は、ここでとどまることをゆるさない。この理論では貧困と資本主義の矛盾を指摘しえてもそれらを羅列するだけでそれ以上ではないからであり、真の解決への道を指し示しはしない。

「労働用具すなわち、生活源泉への働く人の経済的隷属が、あらゆる形の隷属・あらゆる社会的悲惨・精神的退化・政治的従属の根底にあること」（マルクス『国際労働者協会一般規約』）

われわれは、労働者階級が「釜ヶ崎解放」の旗の下に闘う意義と、個々の労働者・活動家・共産主義者が、この旗を堅持しぬくことの意味を、明らかにしてゆくだろう。

(つづく)

#### （編集部注）

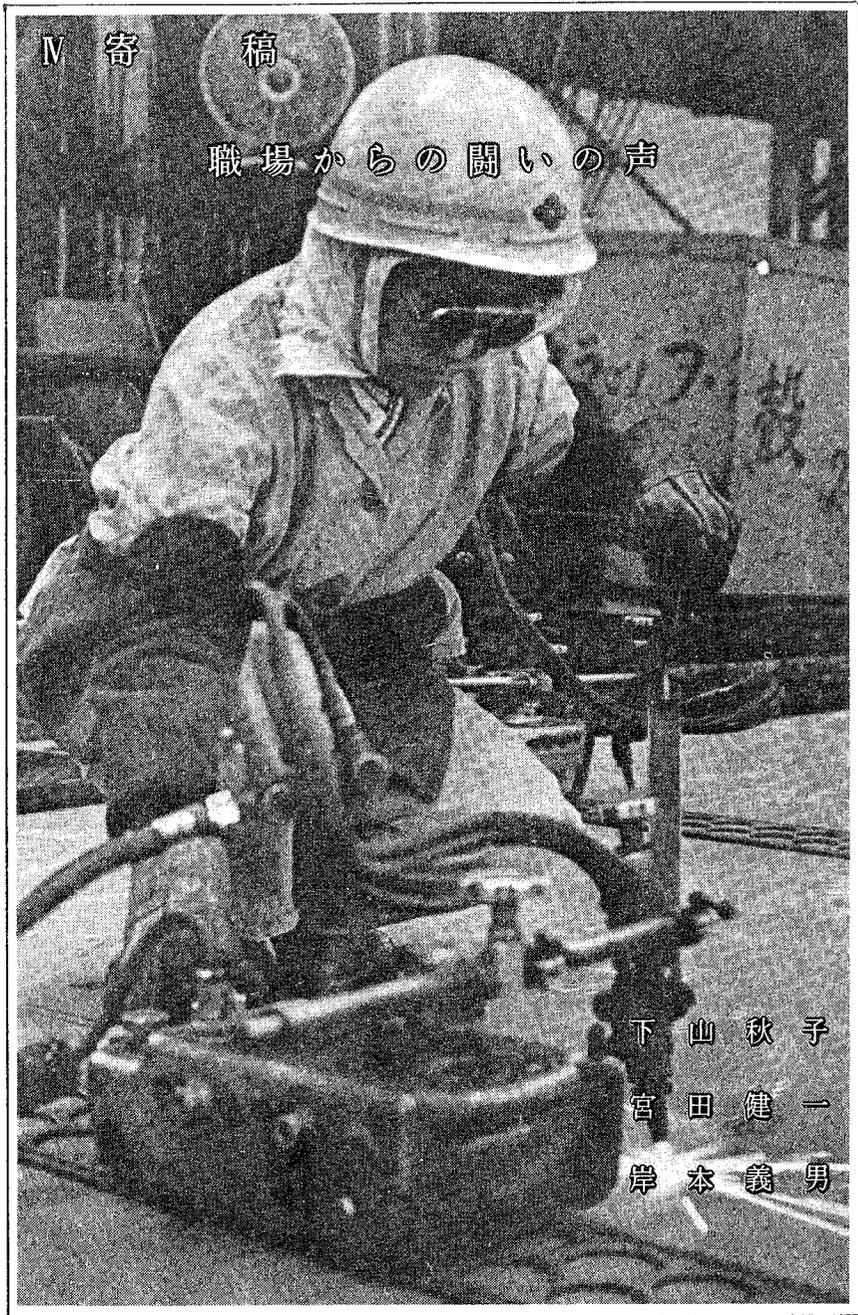
野口同志は、阪神地区で無権利状態で劣悪な労働条件、生活環境を強らている未組織労働者の組織化などを中心に労働戦線で奮闘していましたが、本年無理がたつた。無念にも病に倒れ、今日まで闘病生活を送ってこられました。そしてようやく退院のめどがつくまでに健康を回復し始めています。

われわれは、野口同志と再び共同の階級戦線に立てる日を楽しみにして、その日までに、更に大きな勝利を獲得しなければなりません。

共産主義者の精神と肉体は、単なる個人の所有物ではなく、全ての労働者、勤労人民のかけがえない貴重な共有財産です。

従って多忙な組織生活、政治生活の中でも、自分の肉体的・健康的健康に注意すること、これはわれわれの階級の義務の一つです。

われわれは、このことを、病に倒れ、一時的に階級戦線から離れざるを得なかった野口同志の口惜しい経験から重要な教訓として総括する必要があります。



寄稿

職場からの闘いの声

下山秋子  
宮本義男

電通労働者

下山秋子

全電通の闘う労働者から限りなく熱い友情をこめて、全国の職場、地域、学園で闘っている仲間達へ！ 職場における若干の状況報告と、革命派の階級的労働運動構築にむけた断固たる闘いの決意を、ここに送ります。

昭和二七年に現在の郵政省と分離し、公共企業体として発足した電々公社は、以来四度にわたる五ヶ年計画により、今や国際的な独占資本へと成長し、日本帝国主義の中枢神経としての役割を十分に果しうるまでに至った。

公社機構を整備しつつ推進された、この四度にわたる五ヶ年計画と、第四次五ヶ年計画を拡大・修正した改訂七ヶ年計画こそは、資本の側から圧倒的に要請される情報産業社会への飛躍を目指し、情報革新に應える為、電通労働者の血と汗を搾り取り、また人民からの大衆収奪を基礎にすることによって成し遂げられたものであった。合理化に次ぐ合理化攻撃により、電通労働者は、高度の専門的知識を所有する少数の専門職と圧倒的多数の単純労働へと分離され、コンピューターに追い立てられて労働の疎外はますます深まり、今や生命まで危機にさらされている。

去る、八月二九日に提示された第五次五ヶ年計画は、過去二年間の合理化の集大成として、またこれまでの電信電話公社から、資本の要請に應える情報通信公社へと自らの性格を変えていくことを目指したものである。例えばこの計画の中で、これまで試行的に行なってきたデータ通信サービスなるものを、「公衆電気通信法」の改悪により、本格的にこれと取組むことが示されている。これは、企業の電子計算機と公社の電気通信回線とを接続することにより、膨大な情報を容易に集約・処理することを可能にするもので、従って高度管理システムの要として、大企業の一層の独占化と合理化に貢献するものなのである。

更に、第五次五ヶ年計画の実施に必要な投資額は七兆円といわれているが、その為に広域時分制の導入や、電話電報料金体系の根本的改悪による、人民からのより一層の大衆的収奪を画策しているのである。

また、データ通信等をはじめとする多種多様なサービスの出現は、電子からレーザーといった新技術に裏付けされ、公社業務の各分野にわたって労働内容の変化をもたらすことは必至である。これと合せて加入電話増設は、一方における人べらし政策・能率向上と結びつき、殺人的な労働強化となつてわれわれに襲いかかってくるであろう。この第五次五ヶ年計画の全容を、現在の全産業界の動向と照し合わせてみると、これが中小企業の倒産と大量の解雇者を伴いつつ、一握の独占資本に膨大な利潤を集

中させる産業界再編成に積極的に加担するものに他ならず、とりわけ運輸・通信部門の大胆な合理化と飛躍的強化を通じて、日本帝国主義田中政府の、日本列島を一大工業地帯化し、アジア侵略・反革命の前進基地化せんとする新全総計画・日本列島改造論の中軸をなすものであることは、誰の目にも明らかである。

また悪名高い国民総背番号制実施にあたって、その担い手たる公社の犯罪的な役割も指摘しておかねばならない。国民総背番号制とは、企業の枠内での労働者管理を超えて、直接人民の生活に国家が介入し統合せんとするものであり、公社はこの支配者の陰謀に応えて、電気通信回線を提供しその手先たらんとしているのである。

電々公社のコンピュータを駆使した情報センタリ化を企図する第五次五ヶ年計画こそは、「国民の福祉と便宜」の謳い文句を隠れミノとした、帝国主義一独占資本によるアジア侵略・反革命にむけた官僚的警察的専制支配強化の単なる一環であるにとどまらず、その中枢でさえあるのである。

交換案内部門の職場では、圧倒的多数を婦人労働者が占め、その勤務形態は多様である。最も多いのが、日勤・夜勤・宿直を交代で行なう循環勤務。夜間の忙しい時間帯に勤務する夜専。医師から循環勤務は無理だと診断された人が多く勤務する日専。そして夜間呼対策として、夜専よりもっと勤務時間は短かく、かつもっと集中的に

忙しい時間帯に勤務するパートとある。このパートは以前は短時間制臨時雇用とあって、二年毎に契約を更新し、正式な社員としての資格も、従って組合員としての資格も与えられていなかった。この短臨雇の問題は「公社の恥部」とまでいわれてきたものであったが、昨年一月に廃止され、それに代わるものとして現在の短時間制特別社員制度が設けられた。しかしこの短特社員も、他の職員と比較すると、労働条件をはじめ諸権利にわたり歴然と差別されている。

毎年四月に採用されるのは、見習社員としてであり、その他随時採用されるのは特別社員である。共に初めの四ヶ月は試用期間であり、採用後一年経つと正式に職員として認められる。また賃金・休暇の面でも両者は平等の条件下にあるが、見習社員に比べ特別社員は、四ヶ月の試用期間後、残りの八ヶ月は二ヶ月毎に辞令があり、またいつ配置転換されてもそれに従うことが雇用条件になつている等々、身分的に不安定である。公社は、見習社員の採用数を削減し、特別社員をそれだけ多く採用する意図を露骨に表わしている。

同じ交換案内業務に従事しながら、複雑な身分差があり、公社はそれを、多様な勤務形態によって巧妙に覆い隠し、労働者の分断を行なっている。先にあげた短臨雇の問題をはじめ、交換案内の職場では、様々な矛盾・問題が渦巻いている。夜専の場合は、その労働密度にもかかわらず、それに対する手当は一切ない。また日専にお

いては、殆どの労働者が、健康上の理由や育児等の問題でやむなく日専勤務しているわけだが、それらに対する十分な保障は行なわれていない。循環勤務においても、夜勤・宿直に当たると、他の仲間に遠慮して生休が取れない、或いは結婚しても、子供を育てる当てがないから子供を産めない等々。要員を確保せよという労働者の切実な要求に対し、公社は常に逃げ腰で対応し反古にしてきた。

交換案内業務では職種上、労働者はそれぞれ小さなグループに分断されていて、そのグループ毎に公社の組織体制の枠に組み込まれている。従って、同じ職場で働きながら、勤務時間の相異、休憩時間のずれにより、労働者相互の交流は非常に持ちにくくなっている。そして、そのグループ内には、三々五人に一人の割合で職制がいて、一般労働者の個人生活にまで介入するといった、職制を頂点としたきわめて露骨な労務管理が一方で行なわれている。

現在、交換案内部門の電話交換手と、料金局・電報局のキーパンチャーの間に、頸肩腕症候群の患者が非常に増大している。この頸肩腕症候群は明らかに、指、手、腕を局部的に酷使する単純労働を強いられるところから起こる職業病である。とりわけ電話交換手の場合、技術革新による自動ダイヤル化の進展に伴って、頸肩腕症候群患者が急増したという事実は、何よりもこれが合理化に伴う職業病であることを証明している。それにもかか

わらず公社当局は、一切職業病であることを認定しようとせず、局内医師・通信病院一体となつて、罹病者に対する治療・保障を行う義務を放棄し続けている。更に公社当局は、完全に治癒していない労働者に対して、配置転換という追い打ちをかけてくる。勿論それでも労働者の蝕まれた肉体に対する十分な保障はない。配置転換が、職業病発生の根本的解決ではないことは明らかである。いや、労働者の怒りの反撃を、配転によって切り抜けようとする公社の悪辣な意図がそこにある。しかし組合はその公社の論理に対抗し得えず、事実上罹病労働者の問題を切り捨てている。公社の殺人的労働強化による労働者使い捨て政策に対し、怒りに燃える労働者の目には「近代的労使関係」の下で当局と癒着している全電通執行部の醜悪な姿が、はつきりと見えているのである。

第五次五ヶ年計画に対する全電通執行部の基本的視点は、「七十年代資本の要請をうけ」「八十年代を展望した情報通信公社をめざした長期合理化計画であつて、単に個々の技術革新でなく、公衆電気通信体系の構造的変革をめざすもの」であり、また田中政府の日本列島改造論との関連については、「データ通信等を日本列島改造に役立てるように位置づけ、通信網の建設・整備と通話料金を大企業本位へあらためることをめざし」たものであるとし、「以上のような計画自体の性格は当然電気通信労働者のみならず、他産業労働者へも従来の合理化計

画以上に大きな影響を与える」というものである。

以上のことから明らかなように、全電通執行部の濁った目には、この第五次五ヶ年計画が何よりも、日帝のアジア侵略・反革命にむけた国内産業再編成の中軸として出されたものであるというその反人民的性格と、公社の果している役割の犯罪性とは全く見えていないのである。従って、全電通執行部の「第五次五ヶ年計画と対決」する闘争方針には、「他産業労働者へも従来の合理化以上に大きな影響を与える」ものであるといいつつも、全電通の労働者共通の利益を守る為に、この合理化に真向うから対決する全電通労働者の任務の重要性に対する自覚が「一かけらも見られず、あるのはただ『電通労働者』の「労働疎外の排除、要員、時短をはじめとする労働条件の飛躍的向上を闘い」とするための諸要求の羅列である。とりわけ、この第五次五ヶ年計画が、日帝のアジア侵略・反革命にむけたドス黒い野望実現化の水先案内としての役割を負っていることに對する視点の欠落は、明らかにアジア人民に敵対するものであり、全電通執行部が口では「反戦・平和」を唱えつつも、事実上帝国主義者の城内平和の道を歩む社会排外主義者に転落しつつあることを白日の下にさらしている。

そして、この合理化計画に對しては、「職場の果敢な闘いを基盤に」したストライキをもって闘うと言っているが、過去の反合同争・春闘において、圧倒的多数の全電通労働者のストライキへの決起を「中央方針」の一言

新入組合員がまちがえないように「前半は……」「後半は……」と指示するのである。勿論真面目な職場活動家もいる。しかし、組合役員になることを昇進に利用する輩が一部に存在し、又組合もそれを黙認していることは事実である。

婦人労働者が圧倒的に多い職場では、生休取得に関する組合の努力は認められるが、その他労働者が直面する問題については、管理者とそその代弁者としての職制一体となつた攻撃の前に、労働者を放置したままである。また主任が忙しいという理由によつて、主任の仕事が一般労働者に強要されているが、これは明らかに合理化による労働強化に他ならないし、労働協約違反である。しかも、分会委員は、それを見て見ぬふりをしてるのである。それを拒否する労働者には、当然有形無形のいやがらせが待っている。例えば、われわれの当然の権利としての年休請求も、なかなかそれを認めなかつたり、或いは請求した日の変更強要、また休んだ翌日には管理者にあいさつに行けと、喝する等々、意識的な労働者や自らの権利について余り知らされていない新入社員に対する心理的圧迫、われわれの権利意識を何とか眠り込ませんとする策動は、日常茶飯事のことである。

多くの分会委員が、組合と職場との単なる伝達機関であり、決して管理者・職制一体となつた攻撃の前に立つ防波堤ではないことを、われわれ労働者は知っている。なによりも分会委員に職制の多いことが、このことを露骨にお

で踏みにじつてきたごとく、「ストライキ」を単に中央でのモノトリー交渉を有利に展開する為の道具と化してしまふことは目に見えている。更に、今秋期年末闘争の二大目標に、第五次五ヶ年計画反合同争と総選挙闘争とを掲げているが、総選挙が焦点になる段階で必ずや全電通執行部は、闘いの課題を、総選挙勝利と社会党議員大量当選によつて何もかも解決されるかのような幻想をふりまきつつ歪曲し、我々労働者の怒りに燃えた決起と闘うエネルギーを総選挙闘争に解消せんとするのである。

「近代的労使関係」の下に、新しい労使協調路線を歩んできた全電通執行部は、個々の職場において、はつきりとその正体を露わしている。先日、支部の役員選挙が行なわれた。選挙とは名ばかりの極めて非民主的なものであつた。分会委員などは、われわれの職場の具体的問題に日常的に関わり、職場の声を直接組合全体に反映させる役割をもつたもので、文字通り我々の代表者でなければならぬはずである。しかし殆どの立候補者は、一般労働者に強く信頼され、推薦されて立つたものではなく、管理者・職制に推されたものである。われわれの代表者は、われわれのあすかり知らぬ所で決定され、一枚の掲示された立候補者名簿により「承認」される。「頑張ります」と一言のあいさつもなく。そして、立候補者名簿もそうであるが、投票用紙には、「主流派」と「反主流派（主として代々木）」の立候補者名が整然と分離して書かれてるのである。念には念を。更には投票直前になると、

しえている。勿論、こうした分会委員の問題は、決して単に個々の分会委員自身の問題ではなく、明らかに全電通執行部自身の体質と指導性の問題としてあるのだ。また動員がかかつて、何の為の動員なのか、何故年休をとつてまで行かねばならないのかわからない組合員も、中には多く存在しているという現実を、一体全電通執行部は知っているのか。一般組合員の組合に對する不信任感、離反の問題は、単に紙面上でそれを一般的に云々し、組合員の意識向上を呼びかけるのではなく、何より全電通執行部自身が痛苦に総括せねばならないものである。

電通労働者は、電気通信事業に従事する労働者としての、過去一世紀にも及ぶ自らの歴史を、先進的、戦闘的に闘い抜いてきた輝かしい伝統をもっている。とりわけ戦後、日本帝国主義が復興、成長する過程で吹き荒れた合理化の嵐の中で、常に合理化の直撃を真先に受け、全ての労働者の最先頭に立ち反合同争を押し進めてきた先進性と戦闘性は、今もはつきりと電通労働者の中に引き継がれ、脈打っている。一方では、そうした電通労働者の闘いのエネルギーを、常に公社当局との取り引きの単なる武器におとしめつつ、選挙運動に収束させていつた全電通執行部の指導の限界に規定されながら、しかし今、電通労働者は、公社の人を人とも思わない悪どさきに對する憎悪と怒りをもつて、第五次五ヶ年計画と真向うから対決し、スト権を再び自らの手に奪還する闘いの決意を固めつつあることを、はつきりと確認することができる。

インドシナ革命戦争を頂点とする、国際階級闘争の新たな前進は、帝国主義心臓部階級闘争を新たな地平へと押し上げ、その飛躍的發展を要請している。最早われわれには、言葉の上だけの「インドシナ人民支援」は一切許されず、明確に、真のプロレタリア国際主義の立場を堅持し、全人民の武装蜂起による自国帝国主義打倒に向けて、帝国主義を正規に攻囲することが問われている。

今、われわれの敵日本帝国主義は、日米安保同盟の再編強化の下で、アジア侵略・反革命にむけた国内の体制固めを行なっている。とりわけ、先に指摘したように、中小企業の大規模倒産、労働者の大量解雇を伴いつつ、運輸・通信部門を頂点にした国内産業再編成の波は、労働者人民に新たな飢えと悲惨を押しつけんとするものであり、一方では、その補完物とすべく帝国主義労働運動の強化育成を画策し続けている。そして、事実上帝国主義者との城内平和への道を歩みつつある社・共の階級的裏切りと、既成労働運動の限界といった否定的現実がありながら、一方、中小未組織下層労働者を中心とした新たな労働運動が着実に成長していることを確認することができる。それ故一層現在われわれに問われているのは、官庁・公共企業体・民間独占資本の労働者、この日本プロレタリアートの中核をなす組織労働者をわれわれの側に組織し、中小未組織下層労働者の闘いとの大胆な合流

をかちとることにより、日本労働運動を革命的に再生せしめることである。

電々公社における革命派の階級的労働運動の構築は、かかる全体的展望をもつて展開されねばならない。日本最大の資本を有し、かつ日本帝国主義の中枢神経として数々の悪業を重ねてきた電々公社の足下から湧き起る電通労働者の総反撃により、公社の反人民的路線を挫折せしめ、日本帝国主義の野望の強力な一角をつき崩さねばならない。とりわけ、日本帝国主義―電々公社の、第五次五ヶ年計画に於ける野望を全人民の前に暴露し、われわれの総力をあげてこの計画実施に立ち向うことは、電通労働者の重要な任務である。そして同時に、全ての公務員・公共企業体労働者共通の課題である、ストライキ権奪還闘争の強固な一翼を担い抜かねばならない。

全電通の大組織の中にあつて、真の革命的潮流は、未だ小さな火花にすぎないけれども、必ずや電通二六万労働者とその深部から組織し、全電通執行部の限界性、その日和見主義をのりこえ、戦闘的階級的労働運動を構築しぬく固い決意を表明する。

全電通の仲間達へ！ 闘う電通労働者は組合執行部ののりこえ結集し、社会主義と労働運動の結合をかちとり、堅忍不拔の労働者革命家へとわれわれ自身を鍛え上げようではないか！ いかにも反動の嵐が荒れ狂おうとも、われわれの赤々と燃える労働者魂をもって、労働者の政治権力樹立！ 社会主義社会建設の、この偉大な正義の闘いに

ともにつき進もうではないか！

### 先の闘争についての若干の提起

われわれは先の闘争を総括し、更なる前進を勝ちとる為に、再度、中小企業のおかれている現在の状況を、われわれの職場の問題点とからめて整理する必要がある。

現在、中小企業総体のおかれている基本的な状況は、積年、日本資本主義の大企業優先政策の下（中小企業の切り捨て、そして統合）抑圧されてきた結果としてあるということ、そして益々その方向性というものは、日本資本主義の海外膨脹―とともに明確化してゆくということとはまず、事実として認めなければならぬ。

そういった状況があるが、それはわれわれにとって、全ての闘争を規定する第一の前提―枠組みとして設定されるものではなく、われわれが、自らの闘いを通して接近し、その意味を把みうる資本主義社会が、不断に生みださないでは生きながらえ得ない矛盾の問題であり、本質は、日本資本主義の中で中小企業の現状ではなく労働者と資本家なのである。われわれのあらゆる方針はそこから出発しなければならぬ。もし、中小企業総体の位置を過大に評価すると、かならずや対資本家という視点が見失な

図書関係労働者

宮田健一

われ、対独占資本という関係の中で共に抑圧されているからと、労働運動を、形はあるが、実質は解体した、すなわち労働協調主義の風潮、職場にあるさまざまな問題（低賃金、男女差賃金（むしろ差別的な男女差賃金という意味。男の方を少しであつても高くしておかないと集まりにくいという社会）、男の「優越感」を利用した）職場環境の悪さ（職業病の多発）、われわれの職場では視力の低下、風邪の多発）、定着率の悪さ（二年で四十名、われわれの会社の総人数は四十名）、日給月給制（病氣であろうと何であろうと日割で非常にひかれる）、勤務時間の長さ、等を、一切看過し、会社の発展が、労働者の生活の向上という、欺瞞的な論理にのつたかたちで運動をすすめ、みずからの桎梏をみずからの手で強化しつつ、いまだ封建的残滓さえ、何ら粉碎しきれない状況にみずからを追いこんでしまふという、決定的な誤りにおちいり、誰を真の友とし、誰が真の敵であるかという、われわれの基本的・階級的視点を欠落してしまふのである。

更に大企業労働者との決定的な格差（資本主義の構造的な差別の存在。大企業労働者の生活が、ある意味でわれわれの存在によつてささえられている事実。おそらく、われわれの主観的な、そして感覚的な面もあるにはあるが、むしろ、われわれのおかれています生活感覚からいえば正常であろう。その意識の存在をどう止揚してゆくか、の問題がある。

員の自発的意志を啓発、尊重した、全員執行部制をとることとした。様々の欠陥は討論の中であきらかにされたが、組織上（指導部の問題等）は、書記局、財政・教宣・文化部の一局、三部の構成とし、組合の全局に関しては、全組合員（全執行委員の討議をへて、遂行し、個々の闘争に関しては、闘争委員会の設定をもつてあたることとした。この方法が、全的に正しいとは結論できぬが、ただ個々の組合員の意識を高め、より高度な段階の基礎にはなることはできると確信する。

第三点目は、われわれの組合の特殊性（すなわち職場の短期間移動、点在、各組合員との日常的な接触ができぬということである。職種からいって、その会社の状況は否定しえないが、その中で、日常的に組合員間の分裂を策動（例えば、主任の会社側への再組織化動向等）（注）わが会社は係長以上は直接的に会社経営に参加している）、組合員とはなりえない。職場は又そういった職制一人と組合員二・三名によつて形成されている。）にどう対処し、組合員の団結を維持してゆくのか、家族主義の名のもと、共に会社の為、しいては、自分の為に頑張ろうと、労働者の犠牲のもとで会社が発展するのが当然という、更に熾烈な能力査定、差別、働かないものはやめる、満足に働かないものにも給料をはらつてやっているんだぞ、等の発言。われわれに自殺をしるというのか！われわれは闘争の過程で、この点に関しては、絶えず討議しあい、時には、一週間に三・四度に

われわれは先の闘争を闘う中で、組織上、方針上、さまざまな欠点が露呈し、それは時には敵に利用され、時にはみずからの力で克服していったが、その「歴史」を明確に総括しなければならぬ。まず第一に、それは「旧組合」の綱領・規約に明確に示るされていたような、組合の経営参加及び会社の発展即労働者の「幸福」という、組合が会社の一部機関であるかのような認識、すなわち、みずからが何であるかという基本的立場の喪失があつた。それに加え、中小企業にありがちな出世のステツプとしての組合（創成時のあのいきいきとした結成宣言の意志はすでに失なわれていた）

第二は組織上の問題である。執行委員と組合員という構造が二十名弱の少数組合に必要なかどうか。団交において会社側が指摘した、執行委員は、組合員に「会社の意志を伝えていない」ということ。会社側のこの指摘は組合の内政干渉であり犯罪的ではあるが、そういった状況が組合の中にあつたことは事実である。いわゆる活動家集団のみの「運動」であつて、一般組合員とのズレが少くならずあつたということの原因は、一般組合員の、「彼らがやってくれ」という意識とそれにのつた執行委員会が代行主義の傾向におちいつたことにある。

われわれは、それを克服する為に、熱烈な討論を行い、前規約は廃棄、そして執行委員会を解体し、個々の組合

および総会をもつて対応した。

以上の三点に、たえずゆさぶりをかけられながらも、この闘争を貫徹し、一定程度の勝利をおさめた。しかし、問題点は、先の三点を克服するだけでは、明確になりえない。この問題を根底においてささえているものは何かということである。わが会社においては、すなわち「Y体制」まさしく、封建的独裁、批判を一切許さぬフアッシュムに似た独裁を、個々の闘争と結合して（どう打破してゆくかの問題である。そして、まさしくそれこそが、われわれが一步前進するための唯一基本的な課題である。一般的に言えば、中小企業における闘争の困難性は、政治と結合する以前、個々の組合員の問題意識とむすびついた、前段階的な、民主化闘争、経済闘争をどうするかなのである。そしてその闘争の深化は必ずや、政治的（非妥協的、実力的）にならざるを得ない。中小企業の特長性を、つまり「会社がつぶれたら」という「危機感」をどう克服してゆくのか。われわれは明確な解答をいまだに出し得ていないのであるが。

××金属資本、京浜地区△△工場の  
一労働者からの報告

全国の労働者、青年の皆さん！ 闘う仲間たち！ プ  
ロレタリア世界革命への燃ゆるような確信のもと、日本  
における革命運動と労働運動の発展のために、日夜、工  
場、農村、学園、地域で奮闘している同志諸君！ ××  
金属資本、△△工場の一「闘う労働者」から、工場・職  
場の状況の報告と闘う決意を表明します。

××金属資本は、資本金数十億円の民間大資本で、主  
に自動車の一特殊部品の製造部門を専門に扱っている。  
トヨタ、日産、ホンダ等の大手の自動車資本の多くが、  
この部品については××資本から発注しており、更に国  
鉄からの発注もあるなど、××資本は、この部品の製造  
資本では日本で屈指の位置を占め、日本の自動車産業の  
一角をにぎっている。更に、この××資本は、東南アジ  
アに数個の工場を設置しており、現地での低賃金労働力  
と低廉な原料、土地の確保、強搾取と収奪、商品  
(主にトラック・鉄道関係) 投下による「現地開発」を

もって、他の自動車産業諸資本とともに、日本資本主義  
の植民地主義的海外進出の水路を、文字通り先頭に立つ  
て切り拓いている。

日本資本主義の交通・運輸部門の一角を間接的に支え、  
その侵略の先兵の役割を果たす××資本、一口で言え  
ば、これが××資本の日本資本主義の中に占める位置で  
あり、「産業不況期にも極めて強い、躍進の××株式会  
社」の内容である。

××資本は全国に数カ所の工場をもっているが、私の  
働いている△△工場は、そのうちでも最も大きい工場で  
あり、約一千名がここで製造作業、及び事務に就労して  
いる。そして、この半数以上を、現場の製造作業に直接  
従事するわれわれ肉体労働者が占める。

工場内の分業、機械の配置と労働者の配置、製造工程  
と労働は以下のようなものである。

まず、工場内には、五種類ほどの製品が同時に製造出  
来るよう機械が備えつけられている。鋼材の切断に始ま  
って、組立、塗装にいたる一連の工程が五種類あるとい  
うわけである。そして、それぞれの一連の工程のうちの  
各工程つまり、切断工程、組立工程等一が単位となり、  
それぞれ職制二・三名を含む十五人ないし二十人の労働  
者が配属され、これが職場となっている。(すなわち、  
資本の側からすれば、これが資本家の指揮、命令系統の  
最下部「組織」として位置付けられている。) 各職場に  
配属されている労働者は、その職場の職制の指揮で、一

工程にほぼ十個ほど据えつけられている機械にそれぞれ

配置される。角とりの機械、穴あけ、熱処理の機械……  
等々。労働者に資本家から与えられた任務は、ベルトコ  
ンベアーを次々と送られて来る材料を手で機械に押し入  
し、スイッチを押して加工し、再び手でとり出してコンベア  
の上に置く、それだけである！ ベルトを流れる材料の  
間隔を変えぬように……(だが資本は人間的緊張の最高  
にまでコンベアのスピードを速めることを要請する。職  
制はベルトのスピードスイッチに手をかける!)、とい  
うわけである。ここでの労働が生み出す労働者の直接的  
感情は、たえがたいまでの単調と緊張、「無目的そのもの  
の労働！」 資本の専制への押しとどめることのでき  
ぬ憤激の蓄積であり、工場内にぎっしり配置された機械  
とその間を縫って走るフォークリフトが発する、耳をつ  
んざくほどの金属音・騒音、工場内にたちこめる金属粉、  
油塵、化学溶剤の有毒臭等による肉体的破壊の危機がこ  
れに拍車をかける。

「日勤」の日は、労働日は午前八時から始まるとされ  
ている。だが作業開始五分前には、作業服・帽子を着用  
してタイム・レコーダーをすでに押ししていなければなら  
ない。工場への入構時限は事実上七時四十分。一労働日  
は午後四時十五分までとされている。しかし、一週六日  
のうち何と五日間は二時間(あるいは二時間半)の残業  
が加わる。だが「仕事」が済めばすぐ帰るというわけに  
はいかない。顔、手足は油塵で真黒だからだ。入浴・更

衣に要する時間三十分！ (工場内に浴場はある。)

以上一週六日間(但し、一週間おきに週五日制となる。  
この場合五日間とも残業あり。)の労働時間を、会社側  
は、定時間労働四十五時間、残業十時間、計五十五時間  
(!) としているが、事実上「拘束時間」(休憩時間を  
含まぬ)は、計六十時間弱であり、工場内に拘束されて  
いる時間は、何と六十五時間を越える!!

以上が「日勤」の場合の労働時間だが、一週間交替で  
(!) 「夜勤」がある。しかも、この「夜勤」の場合、  
午後六時半から始まって翌朝六時前までという超長時間  
労働であり、この夜間の工場内拘束十二時間(十二時間  
だ、諸君!! しかも仮眠なし!)が、五日間、ぶっ通し  
で続くのだ!!

賃金 — 採用直後の支払いの場合、準社員の場合、年  
令給であるが、二十才男子(現場には婦人はいない)な  
らば基本給三万八千円程度(残業、夜勤手当は当然含ま  
ない)、社員の場合も、これをそれほど上回るわけでは  
ない。残業・夜勤等諸手当でようやく食っていきける。家  
族の生活も何とか維持できる……各種保険料・食券代  
・税金等、最低一万円以上ガツポリ控除されるが……と  
いうわけだ(だが、他の民間大独占の自動車資本の下に  
おかれている仲間達は、更に驚くべく低い基本給で不安  
な生活を強いられているのだ!)。短期工・季節工の  
場合、日給制であり、一日の賃金は、採用直後の社員と  
比べれば相当上回るが、それとても、労働時間の長さ、

労働強度、労働災害・職業病の不断の肉体的破壊状況からすれば、決して十分なものではない。そして一カ月、又はそれ以上の期間にわたる雇主への「信用貸」は、彼らにも強要されているのだ。しかも、組合からは排除され（これは準社員も同じ。「準社員」?!）、雇主との関係において、一切の無権利状態におかれているのだ。労働災害一つとっても、会社側の発表する事故だけでも一月四・五件は下らず、工場内には、腕を肩から切つて落してしまった者、顔の半分を高熱重油で焼いた者をはじめ、指の切断・骨折など年中数えきれぬほどあるというのに、災害手当、失業手当さえ保障されていないのだ！

※ △△工場には、社外工（準社員、短期工、季節工）が圧倒的に多い。雇用契約は、季節工の場合、毎年十・十一月をピークに六か月位、準社員・短期工の場合は、三か月が平均である。が、一か月程度でやめるものが半数以上である。準社員の場合など契約期限をもって解雇される場合が少なくない！社内工（全体の三分の二程度か）は、三十代を中心に、二十五才以上、四十代前半の年齢層が、ほぼその全体を占めるがその殆んどが勤続年数七年以上で、勤続年数がそれ以下の社内工は、極めて少ない。この意味するものはここ数年間の「合理化」攻勢→生産性向上運動と労働強化の爪

病への無対応（労働災害については、資本の側が「取捨」のために、その力を注ぎ込んでいる。生産性向上、QCサークルの職制なども、緑の帽子をかぶって、「安全衛生委員」に「早変わり」/するのだ。）「定年退職年限の五カ年延長「獲得」」この報告は、「そんなに歳がいくまで、こんな仕事ができるか！」と激しい怒りを職場全体に巻き起こした。政治闘争へのとり組みの否定――「現在はまだそのような段階にない」（委員長弁）等々。総じて、組合官僚どもは、一切の政治闘争の否定から、更に経済闘争を、雇主との賃金「闘争」のみにすり替え、資本の人べらし「合理化」、労働強化、労働者の間への差別・分断攻撃に加担し、「会社の繁栄あつての労働者の繁栄」なる資本のイデオロギーを組合を通じて、われわれ労働者の中に持ち込まんとしているのだ！

労働運動の右翼的再編成、民間型労働運動の空洞化、生産性向上運動前線「愛国愛社」型労働運動の育成は、今、音を立てて進行しているのだ！ 侵略戦争のそれと足音をそろえつつ。

だが、いかに、××資本が、組合官僚を通じて、組合の御用団体化を謀ろうとも、わが労働者の怒りの決起によって、必ずや組合官僚は打倒され、資本と組合の紐は断ち切り得るといわねばならない。たとえ組合が御用団体化するにせよ、労働組合の名を冠する限り、労働者の企業主への最初の最も自然発生的反抗が結びつける団結としての意義を引き継ぐからであり、この組合の御用団

の跡、「使い捨て労働時代」への資本の公然たる突撃、それ以外の何ものでもない！

では、このように、われわれ△△工場の労働者が、××資本と総資本、その政府のありとあらゆる攻撃をくらつている中で、わが××労働組合は、労働者の利益をいかに擁護しているか？

××労組は、自動車産業のうちのその製造部門の他の諸労組とともに、産別的結合組織をもっているが、これは三菱のそれを始め、御用組合と労働官僚の集約的なものでしかない。××労組は、一方で地区労へも加入しており、ある程度職場の要求を反映してそれとの結合の方が比較的強い。現在、民間大資本の下にあるにしては、××資本の労働者の基本給が比較的高いことに示されているように、「民間大手」のうちでは、××労組は比較的強い組合と云えるかも知れない。だが、その実体はどうか。

現場の労働者の最も痛切な要求である残業・夜勤の撤廃・短縮を実現するために資本と闘うどころか、残業手当の若干の増額と引き替えに、週二時間の残業延長を現場の労働者に報告するという、労働時間延長の資本の攻撃への全面屈服。社外工の無権利状態の放置、資本による社内工・社外工―差別・分断への無対応、その固定化。「合理化」が生み出す一つとして工場内の機械の密集・労働密度の強化、それに伴って頻発する労働災害・職業

体化を通じての資本の労働強化、搾取・収奪の強化は、この反抗を強めこそすれ、決して弱めることはないからであり、組合官僚どもはますます職場の労働者大衆から浮いた存在とならざるを得ないからである。わが組合官僚の資本家との賃上げのやりとり（やりとり！である）さえ、職場では「闘いの成果」として報告がなされていることは、それを逆に示しているのではないだろうか。「残業、夜勤など人間のやることか！組合は何をしているか！会社をやっつけろ！」この△△工場の便所の一労働者の落書きは、闘いの主体としての自らを未だ見出して、現在の組合への若干の幻想を未だとどめておくと云え、だがしかし、資本に対する根源からの怒りと現在の組合に対する不信を叩きつけたものとして、又、組合とは本来労働者にとつていかなるものであり、それ以外ではあり得ないものかを示すものとして、私は受け取っています。

V 現代修正主義と革命的共産主義の  
国際的分裂と世界革命の新たな前  
進

— 8月17日付『ニャンザン』社説をめぐって—

安 原 史 郎

1. 『ニャンザン』社説「革命的潮流の勝利」におけるベトナム労働党の主張
2. 『ニャンザン』社説をめぐる日本革命的左翼の動向
3. 国際共産主義運動の危機—その革命的翼の限界
4. ベトナム労働党と中国共産党の意見の相違について
5. 新たなコミンテルン建設に向けた日本革命的左翼の歴史的地平と重大な任務

＝ 発売中 ＝

レーニン研究会政治機関誌  
ボルシェヴィキ通信

5 号

- 主 張 米中会談をめぐる新しい世界革命の前進と日帝  
心臓部におけるわれわれの重大な任務
- 論 文 プロレタリアートの階級闘争の戦術に関する覚  
書  
1971.9.18 発行 定価 200

6 号

- 主 張 昨年下半期の内外情勢の特徴と沖縄・三里塚諸  
闘争の幾つかの教訓
- 1972.2.10 発行 定価 200

増刊号

- 自衛隊沖縄派兵実力阻止・天皇訪沖阻止 全国討議資料
- 1972.3.15 発行 定価 150

7 号

- 論 文 観念的反スタ主義の新たな破産—ベトナム革命  
戦争に敵対する革マル派の理論的根拠—
- 1972.8.20 発行 定価 250

## 1. 『ニヤンザン』社説「革命的潮流の勝利」におけるベトナム労働党の主張

八月十七日、ベトナム労働党はその機関紙『ニヤンザン』において「革命的潮流の勝利」と題する論文を発表した。それはまずガイアナのジョージタウンで開かれた非同盟諸国外相会議が南ベトナム共和国臨時革命政府代表団とカンボジア王国民族連合政府代表団を正式代表として受け入れたことをとりあげ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族解放運動が「帝国主義と植民地主義を根底からゆるがす力強い革命の奔流を形づくって」おり、その中心としてインドシナ人民の愛国闘争は「ニクソン・ドクトリン」を打ち破り「民族解放運動、平和と民主主義の運動を促進し、社会主義諸国の安全確保をたすけ、アメリカ帝国主義を弱めるうえで重要な役割をはたしている」と誇らかに宣言している。それをふまえて、論文は、「国際共産主義運動、世界革命運動における「現代の偉大な無敵な革命思想から逸脱し、みじめにも暗黒の泥まみれの妥協の道にはまりこんでいるものたち」へ主に以下の二点にわたって痛烈な批判を行っている。

まず、第一に「基本的な世界情勢」に関してである。社説の見解は「社会主義制度が人類社会の発展傾向を決定する要因となり、歴史によって断罪された帝国主義と植民地主義が危機と解体の過程にあり、奴隷化された諸戦勢力のたくらみに反対することを目ざさなければならぬ」と主張する。そして「もしも自国のせまい利益から出発して、もつとも反動的な勢力が危険な打撃を受けるのをまぬがれるのに手をかすならば、それはおぼれる強盗に浮き袋を投げあたえるようなものであり、敵に有利で革命に不利な悪質な妥協である」と厳しい警告を発している。

さらに論文は「一国の革命の勝利は終点ではなく、世界的規模での共産主義の勝利の長い旅程のはじまりにすぎない」とプロレタリア国際主義と世界革命の諸原則を述べ、「わが党の指導のもとに、わがベトナム人民は、過去数十年間つぎつぎに、三つの野蛮な帝国主義と反動勢力、その手先にたいして、ねばり強くたたかってきた。幾十万のわれわれの同志、幾百万のわれわれの同胞が、祖国の独立と自由のため、世界の労働者階級と被抑圧人民の解放のためにつぎつぎにいのちをささげた。われわれはマルクス・レーニン主義の立場に確固として立っている。これはまた、愛国主義とプロレタリア国際主義の立場でもある。われわれは頑強不屈に、妥協なくたたかっている」とベトナム労働党の自信に満ちあふれた「革命を堅持する決意」をもって締めくくられている。

民族が独立と自由のもとに生きる権利をもとめて立ち上がった」ている時代であり、帝国主義は「全般的危機」の新しい時期を迎えており「帝国主義の本壘であり最後の支柱であるアメリカに全般的な、先鋭な危機がおこっている」というものである。ところが「革命勢力が帝国主義勢力を後退させているか。それとも帝国主義が思うままにことをはこんでいるのか。世界革命は攻勢途上にあるのか。それとも後退途上にあるのか。どちらの勢力が歴史の進路を決定しつつあるのか。世界革命の主要な敵はだれか。どこに革命があり、どこに反革命があるのか。かつては難なく答えられたこれらの問題が、今日、不健全な諸傾向のために、当惑をよぶ問題となっている」というのである。

第二には、「社会主義国」の政策、とくに帝国主義国との「緩和の政策」についてである。論文は「社会主義国にとつては、平和を守り、平和共存を実現することは、独立、民主主義、社会主義をめざす世界の運動ときりはないことができない。もしも一国のせまい目先だけの利益だけをもとめてそれををはかるならば、それは、各国の革命運動に損害をあたえるだけでなく、ひいては当のそれらの国々にはかり知れない損失をもたらし、その崇高な国際主義的義務を放棄させることになるであろう」とし、特に「帝国主義大国との原則的な緩和の政策は、革命勢力をうちかため強化すること、階級敵を孤立させ分化させること、革命の鋒先を向けて帝国主義の頭目の好

## 2. 『ニヤンザン』社説をめぐる日本革命的左翼の動向

この八月十七日付『ニヤンザン』社説をめぐる日本革命的左翼の諸党派のつたさまさまざまな評価と対応、あるいは諸論争は、多くの場合、わが国における帝国主義のクビキからの労働者階級、勤労人民の解放の闘いと不可分に結合した、日本共産主義運動及び国際共産主義運動上の「革命的潮流の勝利」のための、真の共産主義者の諸任務とは何か、という前提的立場が欠落していたり、曖昧であったり、歪められたりして、従って、その社説の革命的意義をくみとることができず、政治技術的評価や客観主義的評価にとどまり、古い観念的反スタ主義的混乱と誤謬を新しい装でむしかえしているにすぎないといえる。

『ニヤンザン』社説はインドシナ革命戦争を最前線とする世界革命の新たな前進の中でベトナム労働党の果してきた国際主義的任務を踏まえ、ソ連共産党の反動的平和共存路線への批判と警告であるとともに、中国共産党の最近の外交政策についても一定の危惧と批判を持っていることは疑う余地はない。

しかし、社説のこの批判の見地は、単にベトナム革命の勝利のための、支援を要求するという点からでは決してなく、唯一帝国主義から全世界の労働者階級と勤労人

民・被抑圧民族を解放する世界革命の偉大な事業の発展のための、国際共産主義運動の「革命的潮流の勝利」に向けた、各国の共産党の果すべき任務を、特に、「社会主義国」と帝国主義大国との外交政策の原則的観点を中心に、要請していることに注目しなければならない。

それゆえ日本革命的左翼―アジアの反動と抑圧の牙城―日本帝国主義心臓部において、帝国主義を打倒すべき主体的任務をもった日本労働者階級とその革命的前進にとっては、『ニャンザン』社説でも指摘されたベトナム革命戦争を最先端とする世界革命の前進に込め、深まる国際共産主義運動の危機を打開するための、日本革命の勝利と、ポリシェヴィキ的党建設と不可分に結合したどのような実践的・歴史的任務があるのか、またどのような具体的第一歩を踏みださなければならないのか―これが核心であり、これが全てである。

だが、恐らく、この『ニャンザン』社説を「スターリニストの内輪もめ」と評するであろう革マル派はともかくとして、革命的左翼内部にも次のような誤った評価が広範に存在している。それは『ニャンザン』社説が、単に中国共産党やソ連共産党に対する批判としてしか受けとれず、傍観的・評論家風に論評する態度、日本労働者階級とその革命的前進たる主体的立場を欠落させた客観主義的把握と主観主義的任務方針の設定である。

ベトナム労働党やベトナム労働者人民の闘いにケチをつけつつ、『ニャンザン』社説を厚くましく利用して「命に対して持つ意味、すなわち、日本帝国主義ブルジョアアジアの労働者人民に対する階級支配の性格、日本帝国主義のアジアへの侵略と反革命を軸にした反動と抑圧の特殊な性格、及びそれらに規定された日本労働者階級の階級の任務を、つまり、日本革命の「革命の現実性」を、ベトナム革命戦争に代表される世界革命の波と帝国主義の侵略反革命と対峙・激突に規定された日帝心臓部の階級攻防戦の発展と爆発の具体的諸条件を明らかにするものとしてとらえかえし、それを「現実の革命」に転化する実践的環を「綱領・戦術・組織」として獲得することすなわち真のボルシェヴィキ的革命党建設の道をさし示し、またその遂行のために多くの努力を払ってきた。

「英雄的に闘われているベトナム―インドシナ革命戦争の真の偉大さは、世界最強の帝国主義的軍隊を撃破し、ベトナム―インドシナ民族の解放をかちとろうとしているだけでなく、ずるずると米帝をインドシナの『泥沼』にひきづりこみ、米帝の世界反革命体制を極限まで消耗させ、遂に、その矛盾を露呈させ、更に又、その解放の雄叫びは、国際プロレタリアートの心臓を揺がし、新しい世界革命の巨波を形成し、熟しきり『寄生性と腐朽性』を強める米資本主義・米帝国主義の世界史的没落の道を掃き清めている点にこそある。」（『ボル通』5号、「主張」より）

「ベトナム反戦闘争とは、アメリカ帝国主義の侵略反革命戦争に反対し、ベトナム人民の民族解放―社会主義

中ソの裏切り」を合唱する反動的な観念的反スタ主義者は問題外である。しかし、ベトナム革命戦争の偉大な意義を評価するものの、『ニャンザン』社説を現実の、新しい世界革命の前進と国際共産主義運動の危機との関連の中で把握することを放棄し、また没主体的にベトナム労働党の立場に乗りうつることによって中国共産党の「一国主義」「改良主義」を批判し、あるいは観念的反スタ主義をのりこえたと称し、しかし、実は日本革命的左翼の誕生とその十数年の苦闘の歴史的地平を清算し、その限界のねばり強い克服の闘いから逃れ、する態度は決して少なくはない。『ニャンザン』社説を評価しようという善意は理解できたとしても、実際にはその意義を決定的に低めるものでしかないのである。

新しい世界革命の前進。それはいうまでもなく、帝国主義心臓部の革命の敗北と歪曲にもかかわらず、戦後世界支配体制を突破してきた、中国・朝鮮・ベトナム革命戦争というアジア人民の巨大な民族解放闘争にある。われわれは、ベトナム労働党がベトナム労働者人民の指導的前衛として、世界最強のアメリカ帝国主義を敵として民族解放―社会主義革命戦争を闘い抜き、「世界の労働者階級と被抑圧人民の解放のため」に「重要な役割をはたしている」という『ニャンザン』社説の主張に、全く同意するものである。われわれはすでに何度もベトナム―インドシナ革命戦争の偉大な意義を強調してきた。そしてそれにとどまることなく、ベトナム革命戦争が日本革

命戦争を、とくに『七項目提案』を断固支持するものでなければならぬ。そのような立場に立つてはじめて、日本帝国主義のアメリカ帝国主義の侵略反革命戦争への加担・協力こそ、再度のアジアへの侵略反革命戦争へ進みつつある日本帝国主義の本質を暴くものであり、そのようなアジアへの侵略・反革命体制をめぐって熾烈化する階級攻防戦を勝利的に完遂すること、すなわち、侵略反革命を挫折せしめ、城内平和を突破し、世界革命戦争の主戦場を日帝心臓部に切り拓き、日帝を打倒し、アメリカ帝国主義を追撃し、アジアからたたきだす、という日本プロレタリアート人民の国際主義的任務を鮮明にすることができるのである。」（『ボル通』七号、「安原論文」より）

ここでは、これ以上詳しく展開する必要はないであろう。しかし、問題は、このベトナム人民の闘いの「世界革命の最前線」という客観的歴史的意義を確認したならば国際共産主義運動の深まる危機、及びその一環としての日帝心臓部における代々木「共産党」の腐敗、しかし、いまだそれに代わるべき新たな革命的前衛の未確立という否定的現実と、それを打開する日本革命的左翼の重大な任務を明らかにしなければならない。逆に言うならば日本革命的左翼の真のボルシェヴィキ党への命がけの飛躍ぬきに、ベトナム革命戦争を最前線とする世界革命の新たな波と結合する日本革命の勝利はないし、また、国際共産主義運動の危機的現状の突破、新たなコミンテルン建設の勝利はありえない、ということなのである。

われわれは、先に述べた様々な態度が観念的反スタ主義に正当にも反発しながら、結局はベトナム革命戦争の革命的意義、及びそれへのベトナム労働党の重要な貢献を単に指摘するだけで、「ベトナム労働党はスターリニスト」「ベトナム人民の闘い」帝とスタの代理戦争」とする観念的反スタ主義者の反動的見解と対置させているにすぎないことを指摘せざるをえない。これは、中国共産党及び中国革命に対しての態度についても同様に言えるだろう。それはちょうど誕生したばかりの革命的左翼が、腐敗した代々木「共産党」の「二段階革命・議会主義・平和革命・一国革命」に対して「プロレタリア独裁・暴力革命・世界革命」を対置したのと、同じような革命的意義もまた観念的欠陥もはらんでいる。それらの傾向は、中国革命を勝利させた中国共産党、ベトナム革命戦争を英雄的に指導しているベトナム労働党に対して、日本革命の勝利をいまだかちとつていない日本労働者階級の闘いの現状を反映した、一種の「憧憬」であるといえる。しかし、それがさらに、スターリン主義の発生とコミンテルンの変質、帝国主義心臓部での革命の敗北、帝国主義の延命、という世界革命の苦闘の歴史を何ら主体的に総括することなく、「第三世界」がもともと歴史的に規定された「世界革命の主体」であるかのように言い、それを「科学的に」論証せんとする非マルクス主義的試みさえもが現われるにいたっては、その実践上の危険な傾向を問題にしないわけにはいかない。

への二極分解として示されているのである。われわれの立場は、あくまで戦闘的唯物論の立場である。それはベトナム労働党の「スターリニスト的限界」を並べたてることではもちろんないし単にベトナム労働党のベトナム革命戦争での指導的役割を指摘するにとどまり、第二戦線のな支援の位置にとどまることは決してできない。

『ニヤンザン』社説「革命的潮流の勝利」におけるベトナム労働党の主張の革命的意義は、世界革命の新たな前進、及び日本革命的左翼の混乱・混迷もまたその一契機を構成している国際共産主義運動の深まる危機の客観的把握の中でこそつかみとられ、また日本革命的左翼の十数年の闘いの歴史的地平と、なすべき重大な任務を確定する作業の中にこそ教訓化されるのである。

ボルシェヴィズムの真紅の旗の下、革命党建設の闘いの前進のために！

これが、一切の評価の基準である。日本共産主義運動の到達した地平からみると、現在の国際共産主義運動の危機が、社会帝国主義潮流と革命的潮流の分裂、現代過渡期世界を根底から止揚する実践的指針としての理論的革命的マルクス・レーニン主義の再生と、それを担う新たなコミンテルンの建設に向けた「生みの苦しみ」であることが理解されるだろう。

この傾向は結局、コミンテルンのスターリン主義的変質・世界革命の挫折の中にあつて、唯一、植民地国・半植民地国民族解放闘争に世界革命の潮流をうけついできた、中国共産党やベトナム労働党の、その実践から生みだされた現代マルクス主義上の貴重な成果、しかし、いまだスターリン主義と未分化の「世界観・革命観」をもつて、日本労働者階級の革命的前衛がそれを教訓化し日本革命の実践を通してくみとるべき現代過渡期世界におけるマルクス主義の普遍的内容に代えることを意味し、日本革命的左翼の誕生の意義と、その十数年の苦闘を清算する没主体的傾向、日本革命的左翼の「飛躍」に向けた闘いの分岐点及び党派闘争の基軸の喪失へと結果していくのである。

観念的反スタ主義に代表される「観念的党史観」に対する、このような立場は、階級闘争の自然成長的な発展が、真にマルクス主義的革命党を生み出すものであるとあり、あるいは、ベトナム革命戦争の直接の発展上に日本革命を展望するものであり、いわば「階級闘争自然成長論的史観」ともいうべきものである。またこれらの傾向が、実践面に投影されて、「蜂起を組織する党」「計画的・系統的戦術」を否定する大衆運動主義・大衆追従主義と結合する場合が多いことも指摘しておかねばならないであろう。このような立場の実践的破産は、すでに「毛沢東思想万才」をさげんだ日本における「毛沢東主義」潮流の、改良主義と軍事無政府主義・人民戦争路線

### 3. 国際共産主義運動の危機―その革命的翼の限界

ベトナム革命戦争を最前線とする新たな世界革命の波は不可逆に帝国主義心臓部の内乱と蜂起へと凝縮せんとしている。そうであるがゆえに、国際共産主義運動の危機的事態はますます深刻なものとなっている。

それは第一に、ソ連共産党や、帝国主義心臓部の旧コミンテルン系各国共産党を中心とした日和見主義の潮流が、公然たる社会帝国主義への道、帝国主義との平和共存体制・城内平和と排外主義への道を歩みつつあること。スターリン主義をさらに右翼的に修正して、現代過渡期世界の日和見主義に成長したフルツチョフ主義は、代々木「共産党」をはじめ帝国主義心臓部の腐敗した諸共産党とともに、明確な社会帝国主義潮流へと転落し、それはすでに世界の労働者階級の非和解的敵として、しかし労働者階級の中に根強く存在しているこの潮流から、労働者階級を解放しなかり、もはや革命の勝利はありえない。

第二は、旧植民地・半植民地国の旧コミンテルン系共産党・労働党を中心とした、社会帝国主義潮流からの分離。そして革命的翼としての公然たる登場。これらの共産党・労働党は民族解放―社会主義革命戦争の革命的試

練を通して、スターリン主義によるコミンテルンのジグザグ路線の実践的克服を開始し、挫折した世界革命の奔流を民族解放闘争に継承し、新たな巨波を形成することにより、社会帝国主義潮流との鮮明な分岐をなしている。これらの諸党は、同時にその実践を通して、現代過渡期世界における民族解放闘争についての、また「過渡期社会建設と世界革命」などに関するマルクス・レーニン主義的諸原則の復活と深化の上で多大な貢献を行い、いまだ民族解放をかちとっていない旧植民地・半植民地国の革命家はいうまでもなく、帝国主義心臓部の革命家が学ばべき多くのものを有している。

この点に関して、特に中国共産党の果たしてきた重要な役割に注目しなければならない。一九二〇年代、すでにスターリン主義の発生当時から、それとの闘いを反革命の血の洗礼をうけつつ開始し、一九三五年遵義会議を契機に中国共産党内の熾烈な党内闘争としてではあれ、実践的克服をかちとってきたものではあるが、「中ソ論争」に始まる公然たるソ連共産党批判―スターリン主義のさらなる右翼的修正をもって過渡期世界における日和見主義へと完成したフルツチヨフ主義批判こそ、現代日和見主義潮流に対する最初の革命的批判であったことを想起しなければならぬ。特に論争の主要な内容をなした、ソ連共産党の平和共存戦略と一国社会主義論への批判―「過渡期社会建設と世界革命」をめぐる革命的路線は、その後、文化大革命における、フルツチヨフ主義への屈

服―劉少奇路線との闘争を経て、ソ連社会帝国主義という規定をはじめ、ますます強固に且つ豊富化されている。すなわち「ベトナム人民の信頼できる後立て」としての「革命の根拠地」建設の闘い。また朝鮮からインドシナを貫く反帝統一戦線の中心的役割を担い、同時に国際共産主義運動の社会帝国主義潮流から、朝鮮労働党をはじめ旧植民地・半植民地国の革命党の離脱を促進してきたのである。

だが同時に指摘せざるを得ないのは、これらの諸共産党・労働党は国際共産主義運動の革命的翼たる位置を占めていたとはいえず、いまだ社会帝国主義潮流と非和解的に対決する確固とした革命的潮流を形成しえていない。それはスターリン主義、及びその完成された姿である現代日和見主義に対する批判が、多分に実践的観点からの批判の域を越えず、したがって自力更生論的に各国共産党の主張が、それぞれの革命運動の発展段階に多かれ少なかれ規定されざるをえないからである。しかしそれはまた、スターリン主義、及び現代日和見主義―社会帝国主義が、現代過渡期世界の固定化・帝国主義ブルジョアジーとの平和共存・城内平和の維持に利益をもつ「労働者国家」、帝国主義国の労働貴族・官僚層に基盤をもつ特殊な小ブル・イデオロギーであるがゆえに、旧植民地・半植民地国では一時的に影響を与えることがあっても決して確固たる一潮流として存在してこなかったという歴史的條件にその一つの根拠を有するという点を見逃せ

ない。

まさに、そうであるがゆえに、この国際共産主義運動の革命的翼の限界とは、帝国主義心臓部の腐敗した旧コミンテルン系共産党に代る真のボルシェヴィキ党の未確立と不可分に一体であることは明白である。さらに、旧植民地・半植民地民族解放―革命戦争を最前線とする世界革命の波が、否応なく世界的権力中枢部―帝国主義心臓部へとその主戦場を切り拓かんとする現在にあって、いや、「蜂起の萌芽」と「内乱の胎動」がすでに多くは自然発生的に開始されている今日、帝国主義を打倒し、現代過渡期世界を根底から止揚する世界革命戦争が、その司令部―新たなコミンテルン建設を焦眉の課題としている今、帝国主義心臓部でのボルシェヴィキ党の未確立という国際共産主義運動の決定的危機は、いうまでもなく深刻である。

国際共産主義運動の危機的現状の第三番目の、しかし最も重要な要素とは、ほかならぬ帝国主義心臓部において、腐敗した旧コミンテルン系共産党に代わる革命的左翼の潮流が誕生しつつも、それがボルシェヴィキ党として、いわばスターリン主義・社会帝国主義への根底的批判者、レーニン主義の現代過渡期世界における再生として、勝ちとられていないことなのである。日本革命的左翼の混乱と混乱もこの重要な一契機であることはいうまでもない。

以上のような国際共産主義運動の危機的現実をみるな

らば『ニヤンザン』社説「革命的潮流の勝利」はきわめて重要な意義を有しているといわねばならない。なぜなら、ここで明らかにされたベトナム労働党の国際主義的観点、特に「過渡期社会建設と世界革命」の問題に対するマルクス主義的諸原則を踏まえた次の理解は、真向うから、現代修正主義―ソ連共産党の「一国社会主義・平和共存路線」と対立するものだからである。

「世界社会主義体制の存在と発展は、歴史の発展方向を決定する要因である。しかしこの方向は、幾億の人民のねばり強い革命闘争をつうじてはじめて現実となることができる。

各国の革命は世界革命の不可欠の構成部分であり、すべての国の革命は互いに促進し援助しあう効果をもつ。

一国の革命の勝利は終点ではなく、世界的規模での共産主義の勝利の長い旅程のはじまりにすぎない。」(「革命的潮流の勝利」)

そして核心的な問題は、これらの全く正しい国際主義的視点が、単なる口先きではなく、三つの兇悪な帝国主義侵略者を向うにまわして、ベトナム―インドシナ革命戦争を世界革命戦争の最前線へと押し上げてきた数十年の不屈の闘いに裏打ちされており、帝国主義の人類史上まれな反動と抑圧、またそれに屈服したスターリン主義・社会帝国主義による歪曲という烈火の試練をくぐりぬけて、かちとられた成果であるということにほかならない。われわれは、このようにベトナム労働党が公然と、

国際共産主義運動に巢食う現代修正主義に対する断固たる闘争を開始し、革命的翼の代表として宣言したことを熱烈に歓迎するものである。新植民地主義に対決する民族解放・社会主義の諸理論、人民戦争など軍事的諸問題「革命の根拠地」建設の闘いの貴重な経験と、過渡期社会建設の諸理論などとならんで、このプロレタリア国際主義の観点はすべての共産主義者が学ぶべきものである。旧・半植民地国の民族解放闘争、「労働者国家」での「革命の根拠地」建設の闘い、帝国主義心臓部でのプロレタリア革命の三つの奔流を一つの大河に形成する世界革命戦争——この世界革命の新たな発展段階は、プロレタリア国際主義の新たな内容を提起しているし、これこそ、新たなコミンテルン建設の闘いに向けて創造されるべき現代過渡期世界に於けるマルクス主義の重要な内容の一つとなるだろうからである。

#### 4. ベトナム労働党と中国共産党の意見の相違について

次に問題にすべきなのは、この『ニヤンザン』社説が国際共産主義運動の革命的翼（日本革命左翼も含めて）の成長、限界の突破ということに関してどのような意味を持っているのかということである。明らかに『ニヤンザン』社説は、バングラデシウの独立を評価している点からみて

も中国共産党の「ニクソン訪中の承認」「日中国交回復」等の「帝国主義国との緩和策」をも批判していると判断せざるを得ないのであり、これを見逃すことは決してできない。ただし留意すべきなのは、先程あげたベトナム労働党の国際主義に対する観点は、「中ソ論争」文化大革命・九全大会を経て獲得された中国共産党の「一つの社会主義国の最終的勝利は、自国のプロレタリア階級と広範な人民大衆の努力が必要であるばかりでなく世界革命の勝利にかかっており、人が人を搾取する制度が全地球から消滅されて、全人類が解放されることにかかっている。」という見解と基本的に一致していることである。にもかかわらず、「帝国主義国との緩和策」に対する意見の不一致は何によるものだろうか。われわれはここにこそ、国際共産主義運動の革命的翼の限界が集約的に表現されていると考えざるを得ないのである。

われわれは、この間の、中国政府の革命的な外交政策を一貫して支持してきた。それはすでに述べた中国共産党の「過渡期社会建設と世界革命」についての国際主義的態度を基礎に踏まえた上で、第一に、アメリカ帝国主義、日本帝国主義の「対中接近」「国交回復」はベトナム・インドシナ革命戦争を先頭とするアジア人民の反帝民族解放闘争が、アメリカ帝国主義を軸とする戦後世界支配体制を根底から突き崩しつつあり、それは帝国主義に新たな反革命体制の構築に向けての再編を不可避とさせたものではあるが、その中で闘うアジア人民の「大後方たる」

革命中国がすでに帝国主義にとって圧殺できない存在になったことを示すものに他ならない。中国を平和共存体制に抱きこみ、ベトナム革命戦争を孤立させようとする恐るべき意図をはらんでいるとはいえず、帝国主義がたとえ口先だけでも中国革命を承認せざるを得なくなることは、侵略と戦争、抑圧と反動を決して放棄することのない帝国主義の本質的性格と矛盾せざるをえないし、その相克は、帝国主義の新たな危機の形成へと発展しかねないものである。（それを証明する事実、田中政府の「日中共同声明」の過程でいくつも指摘することができ。詳しくは『ボル通』五号「主張」や本号の「日中国交回復」についての「声明」を参照してもらいたい。）

第二の根拠としては、中国共産党—中国政府の、帝国主義の「対中接近」に対する一貫した原則的な態度、あくまで「中国革命の承認」（国交回復三原則）を要求し、かつ、問題を二国間に限定し、ベトナム問題を「取引の材料」にしないこと—「第二のジュネーブ会談」を行わないことを明らかにした態度である。中ソ論争でのソ連共産党の「平和共存政策」への革命的批判や、ベトナム革命戦争への力強い支援の決意の表明と、精神的・物質的支援はそれをさらに根拠づけている。

第三の根拠は、以上のような内容をもつ「対中接近」「国交回復」は、帝国主義心臓部の労働者階級の闘いにとって、従来の反共イデオロギーの基軸たる中国敵視策動や、排外主義的宣伝に一定の制約を与えるだけでなく、

中国プロレタリアート人民との国際的連帯と団結をより強める客観的条件としてあるということである。現在、日中国交回復を目玉商品として、田中政府の反動的本質を隠蔽し、平和的幻想をふりまく宣伝がブルジョアマスコミによってなされているが、このことをもって、中国共産党の「裏切り」等々と主張するのは、まったく無節操・無責任な態度といわねばならない。なぜなら、中国・台湾問題をふくめて決定的な対外・対内危機に陥いた佐藤政府を、労働者人民の決起をもって打倒することができず、労働者人民の政府をもって日中国交回復をできなかつた。また、少くとも、田中政府のヘゲモニーによる国交回復を許したという闘いの不充分的な結果であることを、一切忘れ去っているばかりでなく、「日中国交回復」にはらまれて田中政府の恐るべき危険な野望を見逃かし、それを暴露できず、屈服してしまっているからである。それは結局、田中政府美化論につながるものである。

さて、帝国主義国との緩和、平和共存の政策について『ニヤンザン』社説は次のように述べている。重複するが再度引用する。

「帝国主義大国との原則的な緩和の政策は、革命勢力をうちかため強化すること、階級敵を孤立させ分化させること、革命の鋒先を向けて帝国主義の頭目の好戦勢力のたくらみに反対することを目ざさなければならぬ。」われわれはこの見解について全く賛成である。また中

国共産党―中国政府の「米中会談」「日中国交回復」に対する態度も、この原則にそつたものと判断できるし、中国共産党自身、帝国主義国との「平和共存」について同様の見解をもっているかと判断できる。

したがってベトナム労働党との、ありうる意見の相違の根拠は、第一章で引用した「基本的な世界情勢」についての認識にあると思われる。

「しかしながら、現在の緩和は変化した世界情勢の産物である。すなわち、革命勢力が、なお前途に克服すべき多くの困難をかかえているとはいへ、引き続き発展しており、一方、帝国主義がその全般的危機の新しい時期をむかえている情勢の産物である。」

たしかに、世界革命は引き続き前進している。帝国主義心臓部での革命の幾多の敗北と変質があるとはいへ、その巨大な潮流は、植民地国・半植民地国民族解放闘争にうけつがれ、その波は再度、世界的権力帝国主義心臓部へと、世界的な革命と反革命の最後の結着をつける帝国主義心臓部を主戦場とする世界革命戦争へと不可逆に押し寄せ、その端緒を切り拓いている。六十年代後半、全世界の帝国主義心臓部を揺した暴力闘争は、その本格的内乱の胎動である。だが、そうであるがゆえに、帝国主義心臓部での城内平和を、帝国主義との平和共存体制を追い求める社会帝国主義に毒された国際共産主義運動の危機はますます深まりつつあり、帝国主義心臓部の労働者階級の革命的防衛はようやく日和見主義との分岐を

を「人民戦争」の拡大をもって展望した林彪が失脚し、そこにおいて「トロツキスト」なる批判があったことはきわめて示唆的である。）

週刊誌なみに中国共産党やベトナム労働党のそれぞれの思惑を、あるいは意見の対立を憶測したりすることは何の役にも立たないだろう。（多くの諸党派の評価とはこのようなものだが。）

ただ最も根本的な点として確認しなければならないことは、少くとも旧・半植民地国の共産党・労働党が、烈火の試練を経て、それぞれ特殊な歴史的制約をもっているとはいえスターリン主義・現代日和見主義を実践的に克服してきたし、国際共産主義運動上においても革命的潮流の形成へと歩を進めつつあるという点である。

スターリン主義・現代修正主義・社会帝国主義に対する批判の不徹底さ、あいまいさは、国際共産主義運動の革命的翼の限界を規定しているといえるが、その責は、帝国主義心臓部におけるボルシェヴィキ党の建設の闘いの不充分性にこそあるといっても過言ではない。中国共産党・朝鮮労働党・ベトナム労働党などのスターリン主義的残滓や「限界」を指摘することは可能であるが、それをもって社会帝国主義潮流と同一視することは、国際共産主義運動の革命的潮流の胎動をその勝利とともに闘いとることを放棄し、またそれらの革命党が指導している民族解放闘争が、新たな世界革命の波を形成していることを否定することさえ意味するのはいまでもない。

かちとり、ボルシェヴィズムを身につけはじめたばかりであることは否定すべくもない。

ベトナム労働党は、ソ連共産党や帝国主義心臓部の腐敗した旧コミンテルン系共産党など社会帝国主義潮流に對する、公然たる批判を行っておらず、いまだに「友好関係」を保っている。それゆえ、ソ連共産党を社会帝国主義と規定し、代々木「共産党」を「四つの敵」の一つに数え入れ、日本革命的左翼の闘争に對する指示を一貫して表明している中国共産党との間に、かなりの意見の相違があり、それが世界革命の現段階に對する認識の相違として表現されていることは容易に推測できる。

民族解放闘争を中心とした世界革命の巨波が、帝国主義心臓部に革命的危機と内乱の胎動を形成しつつあるとはいへ、帝国主義心臓部におけるボルシェヴィキ党の未確立ゆえに、今すぐの突撃ではなく、帝国主義権力の正規の攻囲を組織する段階として、世界革命の現段階はあること。中国共産党の最近の国連・米中会談・日中国交回復等に見られる外交政策は、この認識を基礎にふまえ、ベトナム・インドシナ革命戦争をはじめ民族解放闘争への支援を最大の軸にしつつ、帝国主義の侵略と戦争を制動しつつ包囲し、かつ一方では、帝国主義国の労働者人民との交流と団結をかちとり、革命的左翼の成長に期待し、援助するという、戦略的方向にのっとり行われていると判断できる。（周恩来の最近のさまざまな発言、及び「世界の農村から世界の都市へ」という革命の発展

それらの革命党の実践という関連を通してとらえるならば、スターリン主義・現代日和見主義批判が深化され、「限界」が止揚される方向で闘いとられていくことが確認できるし、それ故社会帝国主義潮流との区別をなし切らねばならない。かつ、その克服の過程とは、国際共産主義運動の危機の突破―新たなコミンテルン建設の闘いとしてあり、日本革命的左翼もその重要な一翼を担うべく主体的任務が要請されていることに無自覚であってはならないだろう。

## 5. 新たなコミンテルン建設に向けた日本革命的左翼の歴史的地平と重大な任務

すでにたびたび明らかにしたように、ベトナム・インドシナ革命戦争を最前線とし、中国・朝鮮を貫く巨大なアジアの反帝統一戦線の成熟は、アメリカ帝国主義を支柱とする戦後世界支配体制を根底から揺し、破綻させたが、それは同時にアジアへの侵略反革命を唯一の延命の道としてきた日本帝国主義の、アメリカ帝国主義との反革命同盟の強化と同時に、総力を賭けた侵略反革命戦争体制構築のための労働者人民へのさまざまな攻撃を引きだしている。戦後、アメリカ帝国主義のドルと核のカサの下でのアジアへの侵略反革命によって延命・復興・膨張をとげてきた日本帝国主義は、この危機をより強力なアジア侵略反革命と労働者人民への擄取と圧制によって

しか突破しえないし、それはベトナム革命戦争を最先頭とするアジア人民の闘いと真正面から激突せざるをえない。のみならず、「日本帝国主義の墓掘り人」日本労働者人民の反抗と決起に直面するにちがいない。日本帝国主義のアジアへの「雄飛」ではなく、生死をかけた飛躍である。なぜなら、世界最強の帝国主義たるアメリカ帝国主義にとつてはたとえ「局地戦争」だとしても、日本帝国主義にとつては「総力戦」的性格を意味するからである。

侵略反革命戦争を支える「国内治安体制」「国民総動員体制」へ向けた帝国主義ブルジョアジーの労働者人民の攻撃は当然、社会のあらゆる領域、すべての戦線において、侵略反革命を阻止し帝国主義打倒に向け、世界革命の新たな波に内乱と蜂起をもつて応えるのか、それとも帝国主義ブルジョアジーとの城内平和を守り、侵略反革命戦争に加担するのか、という二大分岐をもちこみ、究極的には反革命暴力と革命的暴力の激突としてさえ表現するのである。

内乱か、城内平和か。この分岐は、共産主義運動及び労働運動においても無縁ではない。無縁ではないどころか、この領域においてこそ、最も熾烈な様相を呈するに違いない。帝国主義の腐朽せる資本主義という性格は、帝国主義労働運動を育成し侵略の尖兵としてしてあげるといふ点に最も主要にあらわれる。これを打破る戦闘的階級的労働運動の圧倒的前進なしに、日本帝国主義打

倒も日本革命もありえない。

この現実には、共産主義運動においても露骨に反映する。すなわち、日和見主義・社会帝国主義への転落か、プロレタリア国際主義・ボルシェヴィズムの道か、と。

それゆえ、日本労働者階級の革命的前進たらんとする日本革命的左翼の、代々木「共産党」など、スターリン主義・社会帝国主義に対する妥協なき、全面的かつ根底的批判なしに、それからの労働者階級の解放なしに、レーニン主義の再生とボルシェヴィキ党建設なしに、日本革命の勝利はありえないことは明らかである。スターリン主義・現代日和見主義・社会帝国主義に対する一步の妥協も、それは革命の死につながる。逆に言えば、そのような日本革命的左翼の敵しい試練こそ、スターリン主義・現代日和見主義・社会帝国主義に対してプロレタリア国際主義を貫徹し、革命的批判をなしかせることのできる、現実的根拠であり、国際共産主義運動上においても画期的な歴史的地平を誇るべき革命的意義をもっていることが理解されなければならない。

侵略反革命に向けた日本帝国主義のあらゆる反動と抑圧、搾取と収奪、差別と分断に抗して闘う労働者人民の無数の突撃を、「帝国主義打倒」を鮮明に掲げた革命的暴力へと結晶させること、「武装蜂起」のその日に向けて組織し、大胆に世界革命の主戦場を日帝心臓部に切り拓き、アジア反動の砦を労働者人民が奪取することができるのか、密集した反革命に敗北し、城内平和に屈服し、

日本帝国主義の侵略と反動の嵐を許すのか、それは日本革命的左翼のボルシェヴィキ党への飛躍の闘いが勝利するか否かにかかっている。そして、それは、スターリン主義批判、現代日和見主義批判、社会帝国主義批判とそれからの労働者階級の解放の闘いと不可分一体のものである。そしてこの闘いに勝利するならば、国際共産主義運動の危機の克服、革命的翼のボルシェヴィキ潮流のもとへの統一、新たなコミンテルン建設の闘いもまた勝利することができる。

以上のような日本革命的左翼の重大な任務をはっきりと自覚するならば、その誕生以来の十数年の闘いの歴史的地平と革命的意義、及び緊要の諸任務はすでに明らかだろう。

まず第一に、日本革命的左翼が公然と「スターリン主義批判」を掲げて登場したことの革命的意義は強調しすぎてもしすぎることはないだろう。多分に観念的・左翼反対派的傾向をはらんでいたとはいえ、ソ連共産党、そして代々木「共産党」など、公認の国際及び日本共産主義運動指導部の日和見主義への転落の根拠を、スターリン主義の発生とコミンテルンの変質、世界革命の挫折に求めたことは、世界革命の前進が突きつけた歴史的必然性の産物であると同時に、日本革命的左翼の特筆すべき、世界に誇るべき成果であろう。

そして次に、日本革命的左翼の誕生以来十数年の連続する苦闘の歴史、何にもまして日本革命的左翼が全力量

と全能力を注ぎこんだ六七年十・八羽田闘争以来の、ベトナム革命戦争を最先頭とし日本帝国主義を包囲せんとするアジア人民の民族解放闘争―この新たな世界革命の波に迎え、日帝打倒の旗幟も鮮明に、武装した革命と武装した反革命の激突をもつて切り拓いていった「蜂起の萌芽」ともいふべき死闘の中で、スターリン主義・現代日和見主義批判の実践的内容をつかみとっていったことである。つまり、観念的反スタ主義の破産の中で、スターリン主義・現代日和見主義批判を、現代過渡期世界を根底的に止揚する世界革命戦争の指導の原則として現代マルクス主義の創造を、「蜂起」に向けた計画的・系統的活動の主体としてボルシェヴィキ党建設の闘いとして物質化すべく、容赦なき日本革命の実践に耐えぬける革命家と革命的グループを創出していったことである。一言で言うならばボルシェヴィキ党建設の客観的条件はすでに整っているということである。

だが第三に、確認しなければならないのは革命的左翼はいまだ観念的反スタ主義を、左翼反対派的傾向をいまだにひきずっており、それが、革命的前衛をめざす多くのグループが存在しつつも新たな混乱と混乱の根拠となつていくことである。たしかに、観念的反スタ主義を最も体系化した革マル派の「反スタ」なるものが実は「スタ」を超歴史的・超階級的「怪物」に祭りあげることによって帝国主義の反動の本質を免罪し、その危機を隠蔽するものであり、世界革命の新たな波の日帝心臓部への

波及を阻止し、帝国主義心臓部の城内平和・現代過渡期世界の反動的固定化を願望するという反階級的な性格を弁護するスコラ的な論理体系でしかないことは、誰の眼にも明らかになった。にもかかわらず同様の思想的立脚点を持ち、それも現実の階級闘争が要求する日本革命の綱領的内容との背理をブラグマチックに乗り切ろうとする態度が蔓延している一方、観念的反スタ主義が、日本革命的左翼の実践面における大衆運動主義的傾向、及びサークル主義的傾向と不可分にあること、また、これらの小ブル的活動態度が、理論の面における観念的反スタ主義的傾向を新たな装いで再生産していることに無自覚なまま、論理主義的批判を完成させることによって止揚したと称し、観念の中の党建設という陥穽に転落していく傾向である。

日本革命的左翼誕生の歴史的必然性と革命的意義、日本革命的左翼の到達した歴史的地平―ボルシェヴィキ建設の客観的諸条件の存在、新たな装いをもった日本革命的左翼の現下の混迷の根拠を確認してきたわけであるが、次は言うまでもなく、日本革命的左翼のこの現状から出発して、ボルシェヴィキ党建設の端緒をつかむための具体的な任務を明らかにすることでなくてはならない。われわれはレーニン研究会結成以来、わずかな期間ではあれ、このような任務を提起し、また、われわれ自身遂行するために全力量を注いできた。

第一に、日本革命的左翼の創成以来の、とりわけ六七

以上の三点は、混迷する日本革命的左翼の中にあつて、これを克服し、日本革命に勝利する「武装蜂起の党」へ向けた再編と飛躍の闘いの主軸が誰であるかを明らかにしている。

「われわれは、文字通りの第一歩から、しかも革命的左翼内部にすら小ブル主観主義・日和見主義の諸傾向が大手を振ってまかりとらうり、極めて嚴重な政治警察の支配と攻撃が強化されつつある下で、真の革命党を建設するという異常な困難に直面している。

それ故、マルクス主義の革命的原则を確立し、この困難な現状に一步一步打ち勝っていくためには、なによりも各会員の自己の活動への階級的自覚、『破私立公』の精神、不撓不屈の忍耐と英雄的实践とにたよらねばならぬ。

われわれは、革命の昂揚と沈滞の波の上にただよう浮草の小市民で構成された泡沫の組織ではない。

われわれは革命の進行が如何に緩慢であれ、プロレタリアの持続性を首尾一貫性でもって何年かかろうとも真の革命党建設の任務を心得ているボルシェヴィキであり、歴史の審判への徹底した楽観主義者でもある。

団結を強め、ボルシェヴィズムの勝利をかけて烈火の七二年の日本階級闘争を牽引しよう。」（『ボル通』六号「主張」より）

一九七二年の初頭にわれわれが示したこの決意と熱情は健在である。それはますます燃えさかっている。

年十・八以来の激闘の総括の深化の中から、ボルシェヴィズムの核心であるマルクス主義戦術論を武器とするこ

とによって、共産主義者（党）の系統的・計画的活動、すなわち「社会主義と労働運動を結合する」「綱領・戦術・組織」の獲得のための基準を明らかにし、またそのことによって日本革命的左翼の混迷を鮮明にし、「蜂起を組織するボルシェヴィキ党建設の大道か」「蜂起にしりごみし敵対する」反レーニン主義への転落かを、その分岐を明らかにしたことである。

第二に、「観念的党史観」や「階級闘争自然成長論的史観」に抗して、共産主義者の「変革の立場」に貫かれた戦闘的唯物論を武器として、ロシア革命によって切り拓かれた過渡期世界、とくに世界革命の前進と挫折に規定された現代世界の総体的把握、とりわけ、延命しますます腐朽化する現代帝国主義批判、また労働運動における新たな日和見主義の発生の根拠を基本的に解明したと。これはもちろんさらに豊富化されなければならないが、少くとも日本革命の綱領・戦術・戦略を確定する礎石を獲得したと言える。

第三は、いうまでもなく、以上のようなボルシェヴィキ党の中核としてのわがレーニン研究会の組織建設の闘いであり、またわれわれは全国の主要な地区、戦線におけるボルシェヴィキ潮流の創出をめざす戦闘的労働者・学生に多大の支持と援助を与え、着実な成功をかちとっている。

「革命の道はかおり高い草花にみちている。日和見主義は悪臭にみちた泥沼である。われわれ共産主義者は革命を堅持しなければならず、妥協してはならない。」（「革命的潮流の勝利」より）

われわれは、このベトナム人民の革命的攻撃精神に学び、必らずや米帝追撃・日本帝国主義打倒！日本革命の勝利をもって、国際主義的任務を果たすだろう。

★田中政府打倒！ 労働者人民の政府樹立！  
プロレタリア独裁勝利！

★アメリカ帝国主義を全アジアから追放せよ！  
アジア反動の砦―日本帝国主義打倒！

★現代修正主義と革命的共産主義の分裂を更に押し進め、深化し、真の革命党建設の道へ！

★マルクス主義の旗の下に！

# Ⅵ 政治警察のスパイになり下がった 代々木「共産党」を追撃・解体し 真のプロレタリア革命党建設を克ち取れ

—学生戦線における現代修正主義—代々木  
「共産党」との闘いの新たな段階—

京都レーニン研究会 京都大学細胞

## はじめに

全共闘運動以後の全国における学生戦線の分散と混乱の中で、七十年九月、教養部戦線の登場以来一貫して、沖繩—三里塚—学費闘争を軸に全国学生戦線の最先頭を担い続けて来た、京都大学の革命的學生運動に対して新たな大弾圧がかけられている。

すなわち、代々木「共産党」の二度にわたる戦闘的学友、同志の京都府警に対する告訴・告発である。九月二十五日、五月に告訴・告発されていた学友が釜ヶ崎で逮捕され、翌朝、京大全校に対する不当捜査が行われた。これに対し、この弾圧を導き入れた代々木「共産党」への追及・糾弾が連日組織された。ところが彼らは大衆的に破産し、孤立するや、十月二十六日、六名の民青同盟員の名で再度十二名にも及ぶ大量告訴を行ったのである。

われわれは、この反革命的弾圧・攻撃に対する反撃を組織すると共に、代々木「共産党」の腐敗・墮落の一層の深化に対して、われわれの思想・運動・組織をより強固に打ち固め、代々木「共産党」との党派闘争を貫徹し、勝利し抜く決意でいる。

帝国主義の侵略・反動・抑圧に抗して決起せんとする学生生活動家・組織が全国の学園で必らずや遭遇するであろう、代々木「共産党」の敵対・攻撃に対する闘いの教訓・模範として提起したい。

## 一 代々木「共産党」の合法、国民党へ の「大躍進」

① 新日和見主義の登場は、代々木「共産党」の帝国主義への更なる屈服を示している。

代々木「共産党」は七十年代初頭において深刻な危機に直面している。いわゆる新日和見主義の登場であり、具体的には、民青同盟十二回大会の大巾な遅れ、民青同盟中央委員の三分の一の処分として現われている。

この新日和見主義は、革命的左翼に領導された日本階級闘争の非和解的前進と、それに対する代々木「共産党」指導部の更なる右傾化により登場した傾向に他ならない。六十年代後半、米帝国主義のベトナム侵略戦争の本格的開始とその敗北が、帝国主義の戦後世界支配体制を根底的に動揺させ、復興をとげた日本帝国主義が米帝国主義との結託を強め、アジアにおける新たな支配者として登場してくる。これに対し、日本帝国主義心臓部の階級闘争は、ベトナム反戦、安保、沖繩、大学闘争を軸に巨大な昂揚と深まりで応えた。その中で、革命的左翼は、日本階級闘争をその最前線に担い、全共闘運動、反戦青年委運動を構築・牽引し、安保—沖繩の全人民的政治闘

争と、職場・学園での大衆的な闘いを結合していった。政治闘争の軍事の領域への煮つまりと大衆的昂揚の前に、代々木「共産党」はその小ブルジョワ階級を基盤とした徹底した右翼日和見主義を露わにし、先進的部分への敵対を深めて行った。

しかしながら、とりわけ、全共闘運動の大衆的インパクト・政治的影響力は、代々木「共産党」の下部・末端の活動家を戦闘化し、それが主に沖繩闘争の中で、「無条件・全面返還」を掲げ、沖繩返還にかけたブルジョワジーの野望の後押しをする中央指導部の路線・方針に対する反発として、新日和見主義として登場しているのである。すなわち、七十年代初頭における中央指導部の「変質」に対する、自然発生的反発に他ならない。

② 新日和見主義の登場は、代々木「共産党」の現代修正主義としての完成を示している。

新日和見主義として現われた代々木「共産党」の危機は、第一に七十年代の日帝のアジア侵略・反革命への命がけの飛躍と、それに向けた国内の帝国主義的再編—搾取と収奪・反動と抑圧・差別と分断の一層の強化—への屈服・帝国主義との城内平和の道をひたすら歩み、第二に、六十年代の二回にわたる党内分派闘争と、それと一体となった中央指導部の「変質」をさらに押し進め、明

確に組織された分派闘争としてさえ貫徹されない程、修正主義者の官僚的自己保身が進行し、革命党としての性格を喪失していることの必然の結果である。

代々木「共産党」の七十年代革命路線を定めたのが十一回大会であり、十一回大会路線は、革命論においては、マルクス主義国家論—プロレタリア独裁の歪曲、骨抜きであり、「社会主義日本においても、名実ともに国会を国の最高機関とする」という完全な議会主義への屈服、全面賛美である。「科学的社会主義」を唱え、階級闘争におけるプロレタリアートの独自性を貫き発展させることを放棄し、マルクス主義をブルジョアジーに売り渡している。

国際路線においては、中朝インドシナを貫く反帝統一戦線として、世界革命の最前線を荷い、国際共産主義運動の分解、混迷を止揚する新たな潮流の中にあつて、共産主義運動・組織の自主独立、内政不干渉を掲げ、プロレタリア国際主義を否定し、国際共産主義運動の再建と統一に敵対している。さらには、朝鮮、ベトナムを主軸とする、アジアの自主独立、反帝民主潮流の形成という路線が、ベトナム革命の前進と、中国共産党の積極的外交の前に破産するや、ソ連共産党と接近し、とりわけ、フランスなどの西欧先進国共産党の徹底した合法主義—議会主義路線と共闘し、その反動の本質を露呈している。党組織においては、「細胞」を「支部」に改め、離党を自由にし、党会議に出ないでも自由黨員でいられる等

めている。のみならず、三里塚農民、部落民の闘いへの敵対は、労働者人民の解放への力強い闘いへの恐怖を示している。新たな闘いに決起してくる労働者、勤労者の運動が、既成左翼ではなく、革命的左翼の指導と結合する。あるいは、それを求めていることは、その事を何よりもよく物語っている。

第二に、闘う人民からの離反、それへの敵対により、代々木「共産党」は、戦前、日本帝国主義—天皇制国家権力の弾圧の下での労働者—農民の共闘と、戦後革命の激動期を「指導」した歴史を一切清算し、日本共産主義運動五十年の伝統を何ら継承することのない、徹底した合法マルクス主義、現代修正主義への純化を明らかにしている。

第三に、代々木「共産党」のブルジョアジーへの更なる一步の屈服は、六十年代後半の激動の数年間がもたらした、現代修正主義と共産主義への分裂としてとらえなければならぬ。代々木「共産党」が労働者・勤労者の正当な経済的・政治的要求をも組織することを放棄し、ブルジョアジーに陣地を明け渡している現在、日本共産主義運動の伝統を継承し、世界革命の最前線に真向うから敵対している日本帝国主義その心臓部における革命をかちとる偉大な任務の実現は、われわれの双肩に課せられている。

この任務の実現は、現代修正主義との対決・労働者人民のその影響からの解放抜きにはあり得ない。戦後世界

組織活動—基準を緩和し、「国民党」への転変をなしとげ、小ブルジョア政党に純化していつている。搾取の現場、工場、職場における強固な細胞建設を事実上放棄し、選挙活動を中心とした地区運動へと召還—逃亡している。

この十一回大会路線は、マルクス主義革命論の骨抜きであり、プロレタリアートの階級闘争の立場を放棄し、西欧先進国共産党と同様の国民党へ、徹底した現代修正主義へと完成したことを示している。この路線では、労働者人民の生活上の要求、民主主義的要求を組織し抜き、搾取—賃労働の廃止に向けて労働者人民の闘いを高めることはできず、組織的には、ブルジョワ自由主義—個人主義に屈服—解体させられる。

新日和見主義の登場として現われている、代々木「共産党」の新たな危機は、十一回大会路線の当然の帰結である。

### ③代々木「共産党」の十一回大会路線は何を明らかにし、何をわれわれの任務として提起しているか？

第一に、マルクス主義の革命論—国家論の根本を骨抜きすることにより、実践的には、日本帝国主義の反動的—反人民的諸政策に抗して起ちあがらんとする労働者人民をブルジョア、小ブルジョア思想の下に放置、押し込めることにより、マルクス主義の混乱、変質、国際共産主義運動の分裂の中にあつては、マルクス主義の復権・共産主義運動の再生を闘いとる党派闘争の貫徹により現代修正主義の社会排外主義への転落と対決し、真のプロレタリア革命党建設をかちとらなければならない。

## 二 革命的左翼の権力への売り渡しに狂奔し延命する代々木「共産党」

### ①現代修正主義者の行きつく先

戦後の階級闘争において一貫して戦闘的・革命的立場を堅持してきた学生運動は、革命的左翼により牽引・指導されて来た。この過程は、全学連党フラクションの代々木「共産党」からの訣別、共産主義者同盟の形成から不断に代々木「共産党」との党派闘争として展開された。代々木「共産党」が放棄したマルクス主義の原則の復権をかちとらんとしたその闘いは、戦後革命の敗北・挫折によもたらされた革命と反革命の均衡から小ブルジョアに依拠し、解体して行つた代々木「共産党」の腐敗・墮落に抗し、日本共産主義運動の再建をかちとる闘いを先行的に表わしていた。

六八・九年の全共闘運動が、全員加盟制自治会運動のりこえ、占拠・バリケード封鎖等の戦術により、圧倒

的な学生大衆の決起を生みだしたのに対し、代々木「共産党」も、来るべき蜂起の時代、いやそれ以前においても、帝国主義の専制と反動に対決する労働者人民の闘いが、不可避免的に権力との非和解的暴力的対立に至る時、代々木「共産党」が小ブルジョアジーの変革に対する恐怖を基盤として帝国主義の陣営に走ることを示してくれた。

全共闘運動の敗北以後の全国の学園における反動の開始と、運動の後退・分散の中で、日本新左翼運動の全般の総括を踏まえ、レーニンの学生運動論に学び、全共闘運動の思想的・実践的混乱・偏向と闘い、今や八・二五共闘の創出を通して、革命的左翼のとりわけその学生戦線が進むべき唯一の道を指し示しているわれわれの着実な団結・勝利への前進に対して、代々木「共産党」はその腐敗・墮落を一層進め、新たな攻撃をかけて来ている。

今年春以降、学生運動に対する全国的方針として打ち出してきた「告訴・告発」路線である。

この告訴・告発こそ、革命的左翼十有余年の闘いと、それが切り拓いた日本階級闘争の激動・熾烈な展開の前に、代々木「共産党」が自らの階級の本質を露わにして、ブルジョア法体系の守護者から政治警察のスパイへと転落しきった証拠である。

第三に、大学「民主主義砦」論を新日和見主義傾向として否定することにより、学生運動が日本の階級闘争において占めてきた先進的な役割を清算し、大学を市民社会と何ら変わることのない、ブルジョア法と市民的権利が支配する所と置き換え、告訴・告発が「有効な闘争形態」であることを導き出している。

自治会に埋没した党組織に残された唯一の独自活動は「党機関は学生党組織を指導・援助し、学内だけでなく学外（政治警察である！）に対してもトロツキストらの暴力的支配の実態を徹底的に暴露する」学内スパイ活動だけなのだ！

学生の闘いの戦闘性・革命性に恐怖し独自の組織活動を放棄して自治会・サークルに逃亡をきめこみ、革命的左翼の情報収集と権力への売り渡しを行うことだけが、七十年代において、代々木「共産党」が学園での延命する唯一の残された形態なのだ！

### ③ 「自由主義」を唱え、警察に協力する 「市民」代々木「共産党」の京大に おける言行

「これまで有効な批判の手段を持ち得なかった学内の自由主義者・民主主義者はこの告訴行為によって励まされ、大学の自由回復のために立ち上りつつある。自由回復運動は、社会に対する要請に応え、社会進歩と国民の

### ② 代々木「共産党」の学内スパイへの 転身を許すな！

「当面の学生運動と党の任務について」（「赤旗」十月九日）によれば、代々木学生党組織の活動の「弱点」は、「党や民青同盟の独自活動が弱く、全体として自治会活動にそれを解消している。」ことであり、学生運動全体においては、「学生の先進的部分だけの運動におちいる傾向」があると、新日和見主義の登場による組織の解体状態を告白している。

更にこの論文は、代々木「共産党」の学生運動に対する新たな方針の反動性をあます所なく示している。

第一に、「先進部分」の闘いを「学生特有の生活経験の浅さ、小ブルジョアの動揺性―一面性、独断、あせり、持続性のとぼしさ」として切捨て、学生が「社会全体の階級利害とグループ分けとの発展を先行的に尖鋭に反映し表現すること」から出発し、政治的潮流分岐を押し進め、明確にさせることを学生共産主義者の第一の任務とするレーニンの学生運動論を否定し、小ブルジョア意識に拝跪した学園運動へとますます後退している。

第二に、組織活動の改善として、「自治会の基礎単位と学生の自治団体の中での活動を重視すること」と党活動を大衆運動機関の指導に解消し、党の独自の組織活動

ための大学建設に寄与するものである。」（「真の自由を京大に」同学会・京院協・五者共同討議資料）

大学「民主主義砦」論を否定し、「自由なき自治は連合赤軍への道」とうそづくことにより代々木「共産党」は、全共闘運動時代、京大方式と称して大学当局と一体となり武装し、逆バリケードを築いて守った「大学の自治」を自ら投げ捨て、「大学の自由」へと乗り移っている。

国家権力と対峙関係を失わない、市民社会と何ら変わらざブルジョア法と市民的権利が支配する大学においては、それが犯されるや、告訴・告発が「憲法に保障された市民的権利」「当然の市民的権利の行使」となる。ブルジョア法、「市民的権利」の全面讚美は、暴力の階級性・政治性を隠蔽するものであり、マルクス主義国家論の歪曲、プロレタリア独裁の否定、権力移行における日和見主義の当然の帰結である。そして、それは暴力による資本主義社会の根底的変革に恐怖する自由主義者、小ブルジョア反動層への依拠に他ならない。

京大学生党支部は、「インドシナ人民支援」も相模原も忘れ去り、「学内暴力一掃告訴支持」とりつけに狂奔し、彼らが行った唯一の運動は、「京大内暴力を一掃する会」への勧誘である。この会の規約四条（会員の任務）三項は、「公判闘争に参加し、裁判闘争の勝利に向け努力すること」という恐るべきものであり、政治警察の革命的左翼弾圧のみでなく、司法の反動化への後押しであ

る。ブルジョア法、裁判の全面讚美から行きつづくの、政治警察への泣きつきである。代々木「共産党」は、告訴され逮捕されている学友に対して「彼が出てくるとわれわれが報復される」からと、警察に拘留延長を頼み込むまでに墮落しているのだ。活動家が民青を追及している所に近づいて来た私服刑事に対して、「逮捕しろ！逮捕しろ！」と叫ぶ始末である。

このような代々木「共産党」の立振舞いは、戦前の労働派の共産党へのそれと同じである。天皇制国家権力・特高警察の共産党に対する大弾圧―検挙に対して、われわれを「極左分裂主義者」と間違わないでくれ、と身の潔白を証明するのに熱中し、弾圧に沈黙して共産党の後に隠れ、自ら一切闘うことなしに解体されたのが労働派である。

現在のわが「共産党」は思想的・実践的にも戦前の労働派と同じ道を歩ゆみ、合法マルクス主義、社民へと変身をとげている。このような彼らに、次のように語る資格がないのは全く明らかであろう。「われわれは、戦前天皇制権力の野蛮な白色テロルの中、非転向と獄死あるいは病死した有能な幹部、十八年間非転向・完全黙秘を貫いた戦闘的指導者を数多く持つ五十年の日本共産党の不屈の伝統に学び断固としてトロツキストのテロ・リンチに屈しないことをここに宣言する。」（「黎明」代々木「共産党」京大学生支部発行）

常態化・徹底した私服のはり込み・二千人を動員したアパートローラー作戦等と、京都府警は弾圧を飛躍的に強化して来ている。

プロレタリアートの根本利益に立脚しそれを守り抜かんとするわれわれと帝国主義国家権力・政治警察との非和解的な闘いを前に、官僚的自己保身に狂奔する、帝国主義に対する小ブルジョア反対派へと転落しきつた代々木「共産党」が自らの身の潔白の証しとして行つたのが告訴・告発でありこれは客観的に、帝国主義の攻撃と一体となった反革命的、スパイ行為である。

代々木「共産党」の全国的方針に基づくこの攻撃の重大性―日本共産主義運動における現代修正主義と革命的共産主義運動の決定的分裂を自覚し、われわれの思想・運動・組織を更に強化し、代々木「共産党」とのあらゆる領域との党派闘争を貫徹し、プロレタリア革命党建設へ突き進まなければならない。

今こそわれわれは、代々木「共産党」が公然と放棄したプロレタリア階級闘争の視点・プロレタリア階級の根本的利益に立脚する革命党の政治性・党派性を断乎として堅持しなければならぬ。「自主的平和的経済の発展」なる資本主義の謬美、賃労働の温存に対しては、資本主義的奴隷制・賃労働の廃止を、国家権力の平和移行に対しては、労働者権力・プロレタリア独裁の樹立を、自主独立、内政不干渉なる反動的ブルジョアの国際路線に対しては、社会帝国主義及び現代修正主義との対決から国

### 三 政治警察のスパイに成下つた、代々木「共産党」を追撃・解体し、真のプロレタリア革命党建設を克ち取れ！

① マルクス主義の原則を堅持し、現代修正主義と対決せよ！

日本革命的左翼の思想的・実践的混乱、分解、成長の病の深化の中にあつて、われわれは、これを止揚・克服し、共産主義運動の再建へ力強く前進してきた。克ちとられるべきプロレタリア革命党の中核組織として自らを鍛え上げ、全国の先進的献身的活動家を結集・統合すべく理論武装と組織的団結の強化をかちとってきた。このわれわれの闘いが、運動面ではプロレタリア国際主義と戦闘的大衆運動の復権を軸とする八・二五共闘の創出として一步の前進をとげ、更にまた、戦闘的階級的労働運動の展開へと発展し、確実に雄々しく前進しているのに対して、帝国主義者どもはその階級の本能により、われわれが日本の革命を荷い得る唯一の部隊として登場してきていることをかぎつけ、われわれに対する大弾圧を開始した。本土における自衛隊沖繩派兵阻止闘争の前陣を切り拓いた五・六―七北熊本現地実力闘争を荷つた同志に対する不当事後逮捕、不当捜査・学内機動隊乱入の

際共産主義運動の再建・統一を鮮明に掲げ、代々木「共産党」の小ブルジョア的・排外主義の本質を暴露しなければならぬ。

組織内部での思想闘争を貫徹し、ブルジョア自由主義・個人主義を点検・克服することにより、プロレタリア的活動態度、作風を確立して、組織の団結・結束を強化し、小ブルジョアに屈服した代々木「共産党」との組織的闘いにかち抜き、これを解体しなければならない。

大衆運動においては、学生の自治破壊者―民青に対する大衆的な怒りを組織し、代々木「共産党」―民青を孤立させ、下部活動家を解体・吸収しなければならない。

② 現代修正主義との徹底した党派闘争の貫徹―勝利から、プロレタリア革命党建設をかちとれ！

八月二五日、釜ヶ崎における告訴されていた学友の逮捕、翌朝の京大全学への不当一斉捜査により開始された、京大における代々木「共産党」との闘いの若干の総括と教訓をまとめたい。

第一に、告訴―告発という、学生運動史上、いや、共産主義運動史上前代未聞の反革命的利敵行為に対して、大衆的な反撃を組織し、代々木「共産党」―民青京大支部を、糾弾・追放することにより、告訴攻撃に対する全国的な反撃の前哨戦を切り拓いた。十月十八日の教養部

代議員大会の勝利、十一月十日の代議員大会の単独開催、六百名に迫る代議員を結集し、圧倒的に告訴を糾弾し、代々木「共産党」の僭称する自治会奪取―臨時執行部の確立をかちとった。さらに、七十年六月の安保闘争以来の全学学生大会開催へと進撃し、十一月二九日全京大の学生を結集して全学学生大会を克ち取り、代々木「共産党」の僭称する同学会（全学自治会）中央執行委員会を圧倒的に罷免した。

現在、十二月四日から、革命的学生運動の深化・発展として自治会運動を展開すべく、同学会、教養部自治会選挙を闘っている。革命的左翼の同学会、教養部自治会執行部を必らずや確立し、代々木「共産党」を追撃しきると同時に、田中―稲葉による大学への超反動的な攻撃を粉碎し、戦闘的な自治会を再建せんとしている。

第二に、代々木「共産党」―民青に対する大衆的な糾弾集会、「告訴支持、学内暴力一掃」の情宣を行なわんとする彼らへのねばり強い追及・糾弾により教養部の民青の組織的解体をかちとり、さらに、学生自治会の破壊者、学内スパイとしての姿を明らかにした代々木「共産党」―民青が自ら放棄した小ブルジョア反対派としての彼らの基盤、自治会を革命的學生運動が包摂する飛躍の第一歩をかちとっている。

第三に、今回の告訴は、日本階級闘争の非和解的前進と代々木「共産党」のそこからの逃亡、帝国主義者への投降、すなわち現代修正主義と革命的共産主義の分裂を象徴

的に示しているものであり、われわれの任務は、したがって、全階級戦線での、長期にわたる、この最悪の日和見主義者との対決・放逐、熾烈な党派闘争の貫徹、勝利から、プロレタリア革命党建設をかちとることである。この重大な任務の実現に向けて、われわれは、思想―運動―組織すべての領域における闘いを現代修正主義との党派闘争として組織しなければならぬ。大衆運動の組織化に党派闘争の形態を限定する単純な見地ではなく、「レーニンの革命的現実主義は、『普遍的原则』を持って、

「結節環」の思想をも持っている。或る情勢では、日和見主義組織の反革命的武装襲撃―敵対に対して、われわれの全精力を投入した鉄槌を下すことが階級的責務となる場合もある。」（『ボル通』六号、「主張論文」）「自主的平和的経済の確立」を掲げ、賃労働を温存し、労働者階級の闘いへの恐怖に固まり、すでに、ノスケやジャイデマンらの道を着実に歩んでいる代々木「共産党」を、あらゆる戦線において解体することなしに、労働者階級の解放はありえない。

以上の総括を踏まえ、われわれは、京大における代々木「共産党」との闘いの全国の学生戦線、階級闘争における意義をしっかりと自覚し、この闘いを押し進め、現代修正主義と対決し抜き、日本革命に勝利する、思想―綱領―戦術―組織の獲得へと前進することを宣言する！

※ 十二月二十日、「帝国主義の侵略・反動・抑圧と闘う戦闘的自治会」をスローガンに同学会中央執行委員会が、わが革命的左翼と戦闘的大衆によって再建された。（詳しくは、レーニン研究会学生組織委員会発行「報告・方針・資料」一九七三・一・一五参照）

★ 労働者階級の利益を売り渡す代々木「共産党」を追撃―解体せよ！  
★ 現代修正主義と対決し、共産主義運動を再建せよ！

★ プロレタリア革命党建設！  
★ 米帝国主義をアジアから叩き出せ！  
★ アジア反動の砦―日本帝国主義打倒！

★ 田中政府打倒！  
★ 労働者人民の政府をつくれ！  
★ プロレタリア独裁の樹立！

八 木 健 彦 著・発行

## プロレタリア革命党建設と我々の緊要の任務

—総括、綱領、戦術、組織の問題によせて—

上 卷 発売中 定 価 750

新思想社にても取扱います。

## Ⅶ 寄 稿

革命的政治潮流の勝利をめざして  
8・25 共闘会議の旗の下、闘う諸  
団体・諸個人は総結集しよう！！

京浜地区反戦労働者青年共闘会議

1  
全国の闘う労働者、学生、高校生のみならず！

日本左翼戦線の混沌と分解の中にあつて苦闘を強いられる日本労働者階級人民が、しかしながら、次の新たな一歩を力強く踏み出すべく着々とその階級の底力をひそかに蓄えている今日、首都圏において「生命あるもの、誠意あるもの」の総てを結集して、一刻も早く左翼戦線の革命的再建を克ち取らんと闘いを開始した8・25共闘会議の闘いとその発展の方向について、われわれ反戦共闘から述べたいと思います。

8・25共闘会議は「八・二五ベトナム革命戦争支援集会」の実行委員会として出発しました。

ピン七項目提案と七二年三月からの大攻勢により、ベトナム人民の民族解放―社会主義革命が文字通り「最後の勝利」に向けて偉大な前進を克ちとり、チュウ 備政権とアメリカ帝国主義を決定的に追いつめていく情勢の中で、このベトナム人民の民族解放―社会主義革命戦争を支持し支援し、連帯してアメリカ帝国主義を追撃する闘いは、全世界人民共通の国際主義的課題になっています。とりわけ、日本労働者階級人民の責務は決定的ともいえる重要な位置を占めているにもかかわらず、国際主義を捨て去った代々木「共産党」は言うに及ばず、プロレタリア国際主義を掲げて闘ってきたはずの日本革命的左翼諸戦線においてさえ、ベトナム人民に真に連帯する

闘いに取り組めず、今や革命的左翼から脱落した革マル派の排外主義的「ベトナム反戦闘争」なるものを許している現実には日本左翼戦線の今日的危機を物語っているのです。こうした中で、戦闘の大衆的な闘いを最前頭で牽引しつつ、日本革命と国際主義の道を誠実に追求してきた諸戦線が共にベトナム革命戦争支援を主張し、かつ実践せんと結合して闘う事の意義は非常に大きいと考えたのです。われわれは更に、国際主義を掲げる真の内実は、単にベトナム人民の闘いを口先で「支援」する事にあるのではなく、それに応えて決起しアメリカ帝国主義を徹底的に追撃し日本帝国主義を打倒して日本革命を日本労働者人民の手によって実現させる実践の中にこそ踏えらるべきものと考え、八・二五集会を単なる集会として終らせるのではなく、国際主義の精神に貫かれた革命的な政治潮流として打ち鍛えてゆく第一歩として位置付けて開催すべきであると考えました。

以上のような意図の下に八・二五集会が準備され、八百五十名の結集をもって圧倒的に克ち取られたのです。この集会では次の点を基調として確認しました。

現在のベトナム―インドシナ人民の抗米救国闘争は民族解放という課題の達成を社会主義革命への永続的発展の中に克ち取らんとしており、戦後のアメリカ帝国主義を中軸とした帝国主義支配体制を突き破った主要な力であるとともに国際階級闘争の最前線を占めている。われわれ日本労働者人民はその国際主義的責務として、ベト

ナム人民の闘い、そしてその具体的な要求であるピン七項目提案の正当な立場を断固支持しなければならぬ。そして、真にベトナム人民に連帯すべき戦略的任務としての米帝追撃、日帝打倒にむけて、あらゆる排外主義を粉碎して、更に奮闘しなければならぬ。この任務に應えるべく八・二五集会に結集した諸戦線は小ブル的なセクト主義を排し、団結―批判―大団結の下、原則的な大衆運動を真に大衆的なものとして保証しつつ、徹底的な自己批判―相互批判を通じて基本的な政治的意志統一を克ち取り、この集会に結集した部分を中軸に革命的な政治潮流を形成すべく闘い抜く。

以上の基本的確認点に基づき八・二五実行委は相模原の米軍戦車搬出阻止闘争を日本労働者人民の国際主義的な任務として闘い抜くことを決定しました。既に八・二五以前からテントを設け現闘団を置いて闘ってきたわれわれはそれ以来九・十九、十一・八の米軍車輛搬出実力阻止闘争を×名の逮捕者を出しながらも闘い抜くなど、一貫して米軍戦車、車輛をベトナムに送らせない闘いを最前頭で闘い抜いてきました。

昨年の三里塚第二次強制収用実力阻止闘争の一周年に際し、八・二五実行委はその闘い、とりわけ東峰十字路での機動隊殲滅戦の意義を確認する集会を持ち、その成果を持って同盟青年主催の「九・十六三里塚を闘う人民大集会」に結集することを決定しました。このような趣旨の下「九・十五東峰機動隊殲滅戦一周年集会」は三十

を越える団体の結集でかちとられました。集会は、日本帝国主義の土地取り上げと農業切り捨てと闘う勤労人民としての三里塚農民の闘いの正しい評価と、九・十六機動隊殲滅戦がそうした三里塚農民の闘いに支えられた正しい武装闘争のあり方を示していることを確認しました。そして岩山大鉄塔防衛開港阻止の固い意志一致をかちとり、強固な部隊としてあの歴史的な九・十六人民大集会に結集してきました。

九・十五・十六を闘ったのち八・二五集会実行委員会  
は8・25共闘会議へと改編されました。これは単なる集  
会実行委から、恒常的な共同闘争機関へと発展するため  
に行なわれたものです。

8・25共闘会議は、それまでの闘いの成果を集約し、  
新たな発展を克ち取る為に、折りからアメリカ帝国主  
義に最後のな「和平案」をつきつけて一歩も退かぬベト  
ナム人民の闘いに応えて、十・二一を防衛庁とアメリカ  
大使館への大抗議闘争として提起し、実行委員会の結成  
をよびかけました。このよびかけの下、更に多くの大衆  
戦線によって構成された十・二一集会実行委は意志統一  
の内容を思想的にも深化すべく原則的な討論をかさねて  
集会の基調報告を作成し、その基調の下、二千名もの結  
集をもって圧倒的に集会が開催されたのです。この集会  
には首都圏から日大・明大・中大・法大・早大等、更に  
関西からも京大・同大・和歌山大・滋賀大・桃山学院大  
学等とほぼ全国から主要な学生戦線を結集し、全共闘運

の革命的発展を克ち取るべく常に最先頭で闘ってきまし  
たが、この闘いを更に押し進めるべくこうした疑惑や批  
判に対するわれわれの見解を述べ、8・25共闘会議をい  
かなるものとして発展させるべきなのかについて明らか  
にしていきたいと思えます。

8・25共闘会議にかけられている第一の疑惑は、8・  
25共闘会議が単なる党派間統一戦線であるか、又は党派  
の野合体に過ぎないのではないかというものです。われ  
われは8・25共闘会議をこれまでの三つの集会の基調報  
告を承認する諸団体が結集し、基本的な情勢把握や戦術  
上の意志統一を基礎に共同行動を追求する共同闘争機関  
であると考えています。それが故に8・25共闘会議内部  
にあっても、いまだ克服されなければならない重大な意  
見の相違の存在を無視したり押し潰したりすれば、野合  
に堕してゆく事はあきらかでありませぬ。しかし、8・25  
共闘会議は観念的反スターリン主義の克服と国際主義の  
内実の問題や大衆的実力闘争の復権の問題等多くの重大  
な点での意見の一致を基礎にしており、また分断された  
左翼戦線の中で苦闘する日本労働者階級人民の団結への  
志向を結合の根拠にしている事も何人も否定し難いので  
す。われわれはこのような基本的合意と団結への努力を  
基礎とすれば意見の相異を相互批判を通して解決するこ  
とは可能であり、野合体に堕する事は決してないと考え  
ているし、そのように努力を重ねています。そしてわれ  
われは現実には更に強固な団結を克ち取ろうとしているの

動を正しく総括発展させ、混乱を打ち破る思想的準備と  
現実的闘いの胎動がすでにこの8・25共闘会議を中心と  
した部分の中に存在している事を明らかにしました。ま  
た、この集会が貫徹される中で、沖共闘の分解、蜂起戦  
争派の解体が進行し、新たな党派再編の端緒を築いたこ  
とは、混乱する左翼戦線の中で真に革命的な政治潮流を  
形成してゆく上で大きな前進の現われであると評価して  
います。

更に、8・25共闘会議はこれまでに闘いとしてきた国  
際主義の質を強固に日本労働者人民の闘いの質、実践の  
質として実現すべく、その結節環の闘いである自衛隊沖  
繩派兵阻止を北熊本現地で闘い抜く事を全国に呼びかけ  
ました。十一・十三全国実行委の下闘われたこの闘い  
においては、文字通り北は北海道から南は九州まで戦闘的  
学生運動を展開している学生部隊を結集し、十・二一闘  
争の成果を、密集した部隊の強固な団結として打ち固め  
たばかりか、この闘いの貫徹こそ、雪崩を打って「沖繩  
闘争終焉論」に屈服する左翼戦線の否定的現実を唯一突  
破するものとして大きな成果をおさめたものです。

8・25共闘会議は極めて短期間に成長発展し、それだ  
けに、各地で闘っている多くの諸団体、諸個人から大い  
なる期待をもって迎えられると同時に、様々な疑惑や批  
判を受けました。われわれ反戦共闘は、8・25共闘会議

です。

また、もう一方の疑惑・批判は8・25共闘会議は革命  
党建設の場であるべきなのに現在の8・25共闘会議はそ  
の努力を行なっていないというものです。われわれはそ  
のような批判の中にこそ党建設に対する考え方の基本的  
な誤りがあるのではないかと考えています。8・25共闘  
会議は繰り返し述べるように大衆的な共同闘争機関であ  
り、この中に無媒介に党建設と党的基準を持ち込むこと  
は重大な誤りといわねばなりません。もちろん8・25共  
闘会議の構成団体・諸個人の中には日本における革命党  
建設のために闘っている部分が多く存在し、8・25共闘  
会議自身としても革命勢力の重要な一翼に自らを鍛え上  
げるべく闘っているわけです。しかし8・25共闘会議そ  
のものを党建設の為の協定機関とすると、原則的かつ大  
衆的な闘いを破壊して大衆運動にきわめて有害な影響を  
与えるのみならず、そのようにして建設された「党」な  
るものは思想的基準において連合的性格を帯びざるを得  
ない為に、規律そのものが官僚的しめつけに墮し、合法  
主義大衆運動主義的偏向を必ずはらむに違いないのです。  
われわれは8・25共闘会議を強力な革命勢力の一翼たる  
革命的な政治潮流として鍛え上げるべく闘ってゆきたいと  
考えています。

以上のような8・25共闘会議の組織的性格に対する疑  
惑・批判の他に、その政治主張に対する批判も多く存在  
しています。

第一に、8・25共闘会議が観念的反スターリン主義との闘いを主張している点に対し、スターリン主義への屈服の表現であるとの批判があります。

われわれ反戦共闘は、スターリン主義をイデオロギー的源泉としてそれを成長転化させ、帝国主義への屈服・協調を通じて世界革命に対する明確な制動要因に墮し切ったソ連社会帝国主義、そして、それと源泉を一にしつつ帝国主義国内において社会排外主義へと純化した現代修正主義（日本においては代々木「共産党」）との闘いとこれの打倒抜きに共産主義運動＝世界革命の勝利はあり得ないという立場をとっています。しかし、このような社会帝国主義・現代修正主義との闘いは、観念的に反スターリン主義を唱える立場からは決して勝利しえず、左翼反対派的政治の「永遠」の再生産に陥ち入ってゆく事からまぬがれ得ないでしょう。観念的反スターリン主義潮流はスターリン主義の社会的歴史的基盤を正しく把握せず、スターリン主義を超階級的な「怪物」にまで神格化するがゆえに、その社会帝国主義への成長・転化を理解せず世界的規模での諸階級の激突の深化と労働者階級を先頭とした共産主義運動再建の奔流を真に理解しない日本における小ブル「マルクス主義」の典型であります。われわれはこのような観念的反スターリン主義との闘いを通してこそ日本共産主義運動の本史を切り拓く事ができると考えており、8・25共闘会議の主張は若干の不充分性をはらみつつも、その基本的姿勢の革命的意

義を高く評価しています。

次に、スターリン主義の問題と関連して、ヴェトナムの民族解放闘争と中国共産党の外交路線の評価に関する諸問題があります。この点については様々な批判がありますが、いくつかの基本点について見解を述べたいと思います。

先づ第一に、8・25共闘会議がヴェトナム労働党＝人民革命党とヴェトナム人民の闘いを民族解放＝社会主義革命と評価する根拠は何かという問題があります。帝国主義がますますその寄生性と腐朽性を強めている現代においては、旧植民地、半植民地の諸国はますますその独自の資本主義的發展と民族国家の形成の道を狭められ、また歴史的世界的な社会主義革命の経験を踏えた強力な共産主義者の党の存在を根拠にして、帝国主義の支配に対抗した民族解放の闘いは直接に社会主義革命へ発展する強い傾向性をもっています。しかしながら、民族解放闘争が不可避に社会主義革命に発展するという主張は各国の共産主義者と党の指導という媒介を抜きにした点で誤っていますし、同じように、ヴェトナム労働党＝人民革命党とヴェトナム人民と実体的に区別し、抽象的に「ヴェトナム人民」が存在するかのよう描き出してヴェトナム労働党をスターリニスト呼ばわりする観念的反スターリン主義者の主張も誤っています。われわれの民族解放＝社会主義革命という評価はヴェトナム労働党＝人民革命党に指導されているヴェトナム人民の実践への評

価と支持なのです。

また、8・25共闘会議が、この間の中国政府＝中国共産党の積極外交を支持する事に対する疑問と批判があります。われわれ反戦共闘は、この間一貫して中国政府＝中国共産党の積極外交を支持してきましたが、この事は朝鮮における南北共同声明の発表や、ヴェトナムにおける中国の原則的態度によって非常に鮮明に正しさが明らかになっていきます。ところがこのヴェトナムと中国の団結に水をさすような批判が左翼の中から聞かれるのです。そのような批判は大抵の場合、各国の革命の発展段階を考慮せず、戦術の多様性を認めず、事態の客観的進行を見ず、帝国主義者の目論見を過大評価して、その目論見通りに事が運ぶかのように描き出しているのです。帝国主義と社会帝国主義との戦いをあらゆる面において前進させているこの間の中国共産党＝中国人民の実践を積極的に評価せずして、中国はただちに帝国主義との戦争を開始すべきであるなどという主張はロマン主義ではないことを深く知るべきです。

また、8・25共闘会議は単純なアジア革命論をとっているのではないかとこの疑問があります。われわれは、日本革命の実現こそ現在のインドシナ＝中国＝朝鮮の反帝統一戦線の前進との関わりなしにありえないと考えているし、ヴェトナムや中国における革命の評価は日本革命実現にむけた主体的立場を決定する重要な試金石だと考えています。しかし、アメリカ帝国主義を追撃し日本

帝国主義を打倒して日本において労働者階級人民の政府を実現する事こそが日本労働者階級人民の主体的任務である事を忘れ、単純な世界革命を対置するのは誤っています。8・25共闘会議こそ一國主義をコスモポリタニズムを止揚して、日本革命と国際主義の立場を正しく統一して追求している潮流なのです。

3

8・25共闘会議は、わずか三ヶ月の間に急激に成長、発展しました。しかしながら、未だに多くの先進的な諸団体・諸個人を結集しえていず、真に革命的な政治潮流に成長したとは言えない不十分点を多くもっています。このような不十分点の多くは8・25共闘会議が自らの性格と任務を真に大衆的に明らかにできていない事に起因しているものです。8・25共闘会議が更に大衆的に発展し、かつ、革命的な政治潮流として現在の左翼戦線の混乱に終止符を打ち、日本共産主義運動の本史を切り開く基礎を形成するためには、一刻も早くこの問題に応え切らねばなりません。そのようなものとして、十二月十五日に政治討論集会を克ち取りたく広く結集を呼びかけます。十二月十五日政治討論集会においては、これまでの8・25共闘会議の闘いを総括し、8・25共闘会議の性格と任務を文書で明らかにし、その発展の方向を明示したいと考えているのです。8・25共闘会議は戦闘的な大衆運動を真に復権させ、苦闘する日本労働者階級人民の最先頭で闘う

べく、自らを打ち鍛える為に更に広範な先進的同志に結集を呼びかけるべきだと考えています。この集会は、その為の偉大な基礎を打ち固める事ができるに違いありません。

歴史的使命を全うすべく胎動を大きく開始している日本労働者階級の階級の底力を自らの活力の根拠とした真の革命的政潮の強固な建設に向けて、十二・十五政治討論集会を圧倒的に克ち取るうではありませんか。

◇ われわれは、全国各地で、われわれと共通の問題意識をもって、闘いを組織している青年労働者・学生が多数存在していることを確信しています。これらの諸君との連絡・交流及び相互批判等を行なうことを通じて、更なる闘いの前進をはかってゆきたいと思ひます。

この通信欄を、そのための一礎石として大いに利用されんことを訴えます。

氏 名；	年 令 歳	切 り と り 線
住 所；	TEL	
職 業；	所属団体名	

— 通信欄 —

※ 次ページもご利用ください。

## Ⅷ 寄稿

インドシナ革命戦争の勝利への前進に応え、  
日本帝国主義の侵略加担を粉々に打ち砕こ  
う！

— 相模原現地闘争報告 —

相模原現闘団

はじめに

九月十八日深夜から十九日早朝にかけて、米軍相模補給廠からのM一三装甲車強行搬出実力阻止の闘いは、夜を徹しての戦闘的デモンストレーション、投石戦、坐り込みとして闘い抜かれた。

八月五日、村雨橋の闘い以後あしかけ二ヶ月、補給廠前に現闘体制をしいて闘ってきた革命的な労働者、学生と戦闘的相模原市民は、権力の、五千の機動隊を動員した暴虐にも一歩たりとも退くことなく、路上に五時間以上にわたって坐り込み、テント村撤去、装甲車強行搬出の策動に痛打をあげたのである。

とりわけ「八・二五インドシナ革命戦争支援集会」を克ち取る中から、真のプロレタリア国際主義を掲げた革命的潮流として首都に登場した8・25共闘会議（当時は八・二五実行委員会）は、八・二五集会の準備過程からはつきりと自己の任務に応え、八月二十日、最も革命的な部隊として相模原現地に登場し、テントを設営し、この日から連日二十四時間の臨戦体制について闘い抜き、常に闘いの先頭にプロレタリア国際主義の旗印を掲げ抜くことをもって相模原闘争の最前線を担った。

闘いの昂揚は常に真の革命勢力と日和見主義者を選別してゆく。十九日早朝、数千の戦闘的労働者・学生・市民の闘いをよそに、日本共産党宮本修正主義一派の戦車

監視小屋のみが権力の庇護の下に、取り壊されもせず残され、しかも彼らは自らの手で小屋を片付け、自主撤去していったのである。

革マル派もベトナム人民への敵対以外の何ものでもない小ブル的「ベトナム反戦」を掲げて、のこのこと登場してみたものの、当然のごとく闘いの方向を一切見ることもできず、相模原市民を先頭とする労働者・学生の闘いと無縁なところで頭数だけかき集めたデモ隊列でウロウロしただけに終わったのである。

昨年来、首都―京浜地区にボルシェヴィキ派の革命的學生運動、戦闘的階級的労働運動を構築しつつ闘い抜いてきた京浜地区反戦労働者青年共闘会議を中軸に、インドシナ革命戦争の勝利への大攻勢に応じて結成された八・二五共闘会議は、真の国際主義と革命的左翼内部の観念的・小ブル的傾向との不断の闘いを通じ、自らを日本革命の主体へと飛躍させる任務を負い、結成されたばかりでありながら階級闘争の最前線にひるむことなく登場していった。

九・一九をもってテントは撤去されたとはいえ、「ただの市民が戦車を止める会」をはじめとする相模原市民の戦闘的な組織化の前進、そして十月十七日の抜きうちの道路法改悪など田中政府の反人民性が暴露されてゆく中で、全国の労働者人民の怒りは決して易々と米軍戦車・装甲車のベトナム行きなどを許してはおかぬものとしてたかまつている。

げられた。これが、あしかけ二ヶ月にわたって、在日米軍当局、日本政府一体となった様々な暴力的弾圧、日本「共産党」宮本修正主義一派、社会党中央をも巻き込んだの闘争圧殺をはねのけて闘かわれた、「侵略と殺人のための戦車をベトナムに搬出させない」闘いの爆発の最初の火花であった。ビケ隊は戦車の前に坐り込み、在日米軍当局の日本国内法無視トレーラーの重量、車幅オーバーによる道路法、車輛制限令違反を楯にとつて、まる四十八時間にわたって戦車を阻止しつづけた。

この闘いは、最初の口火こそ「日米安保体制と国内法の矛盾をついた」なる自画自讃で当初から一貫して小ブル平和主義へと闘いをねじまげようとしてきた社会党によって切られたとはいえ、インドシナ革命戦争の前進によって追い詰められ、それ故、一切なりふりかまわず、より一層の反動と抑圧、狂気じみた戦争行為に拍車をかけている日米両帝国主義への、つもりつもった労働者人民の怒りを背景に、既成左翼の迷惑をのり越え、「インドシナ人民の抗米救国闘争と連帯した国際主義に貫徹された反戦闘争」として爆発していった。

社会党は、六日夜十一時過ぎの戦車の相模補給廠へのUターンをもって闘いの全面的な大勝利を宣言した。しかしブルジョア法を逆手に取られて一旦は譲歩したかのようになせかけながら、日本帝国主義とその忠実な政治委員会田中政府は、あくまでも安保最優先の立場を堅持しつつ、「国内法の弾力的運用」を画策していたのであ

十一月八日、M四八戦車の強行搬出に対しても、数千の労働者、学生が横浜ノースピア前でこれを実力阻止する闘いを貫徹した。

八・二五共闘会議は同日、自衛隊沖繩派兵阻止熊本現地闘争派遣団の結団を行い、そのまま熊本闘争を担うべき部隊をもって横浜ノースピアへ進撃し、×名の不当逮捕者を出しながらも先頭で闘い抜き、自衛隊派兵阻止を環とした今秋期闘争の中で、日本帝国主義の侵略加担と新たな侵略強盗戦争への乗り出しを阻止してゆく闘いの中で、はっきりと相模原闘争の永続的展開の方向を指し示したのである。

八・五〇九・一九戦車搬出実力阻止  
闘争は、アメリカ帝国主義の殺人鬼としての本質と、日本帝国主義の侵略戦争加担をあますところなく暴露した。

八月四日、トレーラー五台に載せられたM四八重戦車四台、M一一三装甲車一台はいつものように相模補給廠の正門ゲートを出ると、日本政府公認のスピード違反、信号無視を繰り返しながら、国道十六号線を横浜港米軍専用ふ頭ノースピアに向かった。

約一時間四十五分後、トレーラーはノースピア入口手前五百メートルの村雨橋で数百名のビケ隊に行く手を妨

る。  
十四日の夜九時過ぎ、又してもM一一三装甲車六台の搬出が強行された。そしてこれを阻止せんとした先進的な労働者、学生を、日本の国家権力は四十二名も不当逮捕していったのである。

「お前らは何を守っているのか！ 日本の警察は誰の飼犬であり、誰に暴力の矛先を向けているのか！」

この日から、大きく相模原闘争の主体として登場してきた相模原市民、地元労働者、勤労大衆の、この当然すぎる怒りの声は、またたく間に日本全国に拡がり、多くの闘う労働者、学生の注目と関心、共感と激励が相模原現地に一点に集中していった。

この十四日の夜、神奈川県警は、「M一一三は重量、車幅ともに車輛制限令の枠をオーバーしておらず、この通行は法的に一切問題はない。この通行を妨害するものは、道路交通法でどしどし規制する」という「独自の見解」を出し、事実、国営暴力団機動隊を使ったメチャクチャなテロ・リンチを行使し、M一一三のベトナム行きを助けたのである。この「M一一三は車輛制限令に違反していない」なる「見解」は、全く一方的に米軍当局の発表をうのみにしたものでしかない。後に実測した結果、M一一三も車輛制限令の規定をオーバーしていることが明らかになっている。しかし、米軍のウソの発表を押し、トレーラーの重量チェックを行なおうとした相模



極まりない一貫した姿勢も、このようなアジア反革命体制の建て直しを画策する日米両帝国主義の意図の中に組み込まれたものとしてみることが出来る。南部朝鮮の朴による戒厳令（南北朝鮮統一共同声明の精神を踏みにじって強行された！）にもみられる新しい日「韓」をめぐる反革命同盟の再編、そして「日本列島改造論」や「片手に友好、片手に侵略」という対中国二面政策、公共料金のあいつぐ値上げ、沖繩民衆への差別・分断・抑圧の強化による生活破壊、労働者階級とその子弟への様々な絞めつけ、中教審路線にもとづく学生層への分断と細分化、「新指導要領」による高校からの専門化の攻撃、更には労働者大衆の非難にもかかわらず今年も強行された自衛隊のペレド、核武装、海外派兵、徴兵制、治安出动を明確に射呈においた四次防、等々ブルジョア・マスコミ総動員で作られた「庶民的」ポーズにもかかわらず、田中政府が侵略と戦争への道をつつ走っているのは明白である。

こうした日本帝国主義の動向をはっきりと把み取った日本労働者人民の怒りは、今や世界革命の最前線、インドシナ革命戦争との結合を熱烈に希求しながら、あらゆるところで爆発している。とりわけ相模原の闘いのように、日本帝国主義のインドシナ侵略加担、革命圧殺と具体的に対決し抜き、それを人民の暴力で阻止する闘いは、インドシナの英雄達を助け励ますばかりか、全国で資本の鉄鎖の下に、労務管理の強化や悪らつな賃金カットと

闘い抜いている労働者、米軍戦車（相模原で阻止されたのと同型の、ベトナム侵略の主力M四八）の実弾射撃演習を身を程して阻止している北富士農民の闘い、沖繩民衆の「日本軍上陸阻止」の闘い、長沼ミサイル基地のナイク搬入実力阻止闘争、立川自衛隊本進駐阻止闘争などの反自衛隊、反基地闘争とともに、アメリカ帝国主義のインドシナ侵略に反対し、日本帝国主義の侵略加担と、自ら侵略強盗戦争へ乗り出そうとする野望と真向うから対決する闘いとして、文字通りプロレタリア国際主義に裏打ちされた闘いであり、日本労働者階級の闘いの方向性を鮮明に指し示す闘いである。

民族解放！社会主義革命によって切り拓かれてきた現代過渡期世界における新たな世界革命の時代の到来の中で、それに応えぬく帝国主義心臓部労働者人民の闘いははつきりと醸成しつつある。そして同時にそれを蜂起！労働者権力樹立の一点へと収斂し抜く日本革命的左翼の主体的な飛躍を克ち取る苦闘がすでに開始されている。そしてその苦闘の中に、相模原市民をはじめとする多くの労働者人民の暴力的持続的な決起との共同した闘いの教訓が生かされなければならない。

六九年秋以降の闘いの中で様々な思想的混乱がまきおこってきた。これを克服する道は、資本主義を廃絶し、社会主義を建設する能力を持った唯一の階級、プロレタリアートにこそ依拠し、その闘いに学びとる中でしか見出せない。われわれはかかる内容においてこそ、

正しく「大衆路線をわれわれの活動の基礎に」おいてきたのであり、であるが故にわれわれこそが、この相模原の闘いにおいても最もよく闘い、最も多く学び、最も大きな成果を克ち取ってきたのである。

ベトナム人民の抗米救国闘争は最後の勝利への地歩を確実に打ち固めつつあり、日本労働者人民の闘いも又、新たな大衆的暴力的決起を開始している。

日本帝国主義の侵略へ向けた対内対外政策の中で、矛盾は一点に労働者階級に集積しており、反動の強化、搾取の増大とともに、逆に労働者の闘いは不屈に燃え広がらんとしている。帝国主義心臓部プロレタリアートの任務を更に鮮明に大胆に明らかにしてゆくならば、相模原は全国いたるところに存在するのだ。

### ③ 現代修正主義の帝国主義との城内 平和の密約を打破し、米帝追撃、日 帝打倒をめざし、国際主義の戦列を 大胆に打ち固めよう。

われわれは、以上の中からすでにわが日本労働者階級人民の闘いの目指すべき方向とその任務を鮮明に指し示した。

インドシナ革命戦争が切り拓いた世界革命への新しい息吹きをはつきりと受けとめ、アメリカ帝国主義を更に追い詰め、日本帝国主義の政府を打倒し、労働者人民の

政府を樹立し、プロレタリア独裁を確立してゆくことである。そしてそのために、あらゆる犠牲を恐れず、労働者階級を信じ、労働者階級に依拠して闘うことである。その主導的核心とは、言うまでもなく労働者階級の前衛党を建設し、革命的左翼の混乱を目的意識的に止揚し、指導の危機を突破して、日本労働者階級と全ての勤労人民の闘いを、まさしく武装蜂起！労働者権力樹立の一点へと収斂せしめてゆくことである。

いまや帝国主義の完全な補完物になり下がった代々木「共産党」との鮮明な分岐を更に拡大し、労働者人民の中に大胆にこの亀裂を持ち込み、多くの戦闘的労働者が、潜在的にはわが革命的左翼との結合を強く求めつつも、いまだ代々木や社会党の下に、一定その闘う意志を吸い取られてしまっている現状を打破していかなければならない。そのためには、なによりもわが革命的左翼が労働者人民の利害を最もよく担い、最も先頭に立って闘い抜くことである。

相模原において、われわれの闘いが、一方で、口先だけで一切関わぬ部分を大衆的に明らかにしていったことは、今後の相模原闘争の上で大きな一つの成果と考えなければならぬ。

当初から「暴力分子とわれわれのテントは区別すべきだ」「トロツキストのテントは警察力を持っても排除して欲しい」と露骨に権力と癒着し、地域住民のオルグに出かけては、戦車阻止などそっちのけで「暴力学生を追



## X 昨秋期の闘いの成果を更に打ち固め、 政治警察との闘いを推し進めよう！

### 反 弾 圧 戦 線

今秋期を団結・勝利の秋とするべく、首都・相模原・北熊本を軸に闘い抜いてきた、革命的な労働者・学生の大進撃は、8・25共闘会議という戦闘的、大衆的な共同闘争機関の創出、あるいは相模原での広汎な市民大衆の参加にみられた波及力という、大きな一歩の前進を日本階級闘争の中に勝ちとってきた。そして、この進撃は、敵権力に心からの恐怖を覚えさせている。しかし、この一歩の、だが確かな前進を踏みだした各地区各戦線の闘う諸組織と、その闘いを力強く支持し、指導してきたわが会に対して、日本帝国主義国家権力―政治警察は、その全力をあげて組織抹殺のため弾圧をかけてきている。この間の彼らの動きの中に、はっきりとそのことを見てとることができる。こうした中で、思想、技術両面にわたる、その武器を一層鋭く磨ぎすますことが、緊急の課題としてわれわれに問われている。この作業を推し進め、組織を防衛しぬぎ、その前進を保障し、更に一層大胆に運動を展開することによって、この組織―運動の弁証法的な発展の中で、弾圧に対する反撃を確実に組織していくために、この間の弾圧の実態を明らかにしておきたい。更に、その前に、この日帝国主義国家権力―政治警察の弾圧をはね返す闘いこそ、革命と反革命の激突―内戦の端緒に他ならないことを確認しておこう。

今春、沖繩返還式典を目前にひかえ、諸党派が雪崩をうって右旋回する中で、唯一、沖繩人民の日本軍上陸阻止闘争と固く連帯し、派兵阻止闘争の突破口を切り開い

た五月六―七日の自衛隊沖繩派兵阻止北熊本現地闘争に於いて、既に明らかにした如く十三名の逮捕に続き、更にこの十月、二名が全く不当にも事後逮捕された。そして今、四名が起訴、二名が獄中にある。

十・二一防衛庁―アメリカ大使館大抗議闘争を前にした十月十九日、政治警察は、八・二五インドシナ革命戦争支援集会以降、プロレタリア国際主義と戦闘的大衆運動の復権を高々と掲げ登場してきた8・25共闘会議と、その中軸を担っている京浜反戦共闘の同志を全く不当にも奪い去った。半年近く経てのこの事後弾圧は、新しい政治潮流の下、大きく燃えあがらんとした十・二一闘争の事前弾圧に他ならなかった。

しかしながら、8・25共闘会議と全国から結集した戦闘的労働者、学生、高校生二千名は、圧倒的な集会を勝ちとり、機動隊のテロ・リンチの暴虐と一名の不当逮捕をはねのけて、戦闘的なデモンストレーションを機動隊の壁を突破して貫徹した。更にこの集会は、ベトナム人民の軍事・政治・外交面にわたる、アメリカ帝国主義を叩きだし、その「偏チュー」を放逐する闘いを熱く支持し、この攻勢に呼応して、帝国主義心臓部内のベトナム反戦闘争を最後まで闘い抜き、日米安保同盟の再編、強化を通して、アジアへの侵略・反革命を本格的に開始せんとする日本帝国主義の野望を打ち砕くべく、自衛隊派兵阻止、十一月再度北熊本の前陣に立つことを意志一致した。

この弾圧をもとめせぬ闘う決意に恐怖した政治警察

は、十月三十日更に一名の同志を奪い去ったのである。

又、相模原米軍車輛搬出阻止の闘いにおいても、車輛の計量にきた相模原市職員までも逮捕するほどに血塗った政治警察は、相模原市民をはじめ全国から結集した先進的な労働者、学生に対してあらん限りの暴虐をふるい、われわれの戦線からも数名の同志を奪ったのだ。

現在の日本独占ブルジョアジーによる警察的官僚的専制支配は、イデオロギー的には、この間の刑法改悪―保安処分新設や出入国管理法案―外国人学校法案、あるいは国民背番号制などの策動の中に露骨にみられる国家のイデオロギーを大きな武器にして、不断に強化・貫徹されんとしている。この国家イデオロギーをテコにした市民社会の徹底した右翼的統合、又、膨大な官僚層の産出とそのヒエラルヒーによる、支配の強化、緻密化の策動が、既に全国到るところで、帝国主義と抑圧に抗して闘いを開始している労働者階級や差別支配に苦しむ被差別人民大衆の闘いに対する、日本帝国主義国家権力―政治警察の徹底した弾圧攻撃―暴力的圧殺を、強力に支える基盤として追求されている。

そして、この闘いを指導せんとする革命的左翼に対してはブルジョア・マスコミを総動員した「過激派」キャンペーンによってその基盤を一層確固なものとし、アバート・ローラー作戦による市民社会からの締め出しから、右翼―暴力団―ガードマン―機動隊という番犬どもを使つたポグロムを開始されている。とくに、三里塚・熊本

といった政治焦点を形成している地では、既にそれは、日常茶飯事になっている。とりわけ、わが会組織とその指導する諸戦線には、この間の8・25共闘会議の創出をはじめ、その組織的前進の故に、集中的弾圧が組織されている。われわれはこの攻撃に対して、組織活動に細心の注意をはらい、大衆に深く根をおろし、その運動を大胆に推し進めることによって勝ちぬかねばならない。

ところでこうした状況の中で、反「過激派」キャンペーンの最先頭を自ら買って出るばかりか、弾圧を権力に要請し、ブルジョアジーの前にはらばってその足をなめているのが醜態極まる代々木「共産党」の姿である。

全国的な、学生活動家に対する「告訴・告発」運動は、東北大、京大に於ける大量告訴を始めとして、代々木「共産党」の政治路線として打ち出されている。例えば、ボルシェヴィキ派の革命的な学生運動が力強く展開されている京科大学に於いては、今春の長期バリケード・ストライキの成果で、今秋期ベトナム反戦・沖繩闘争と固く結合しつ六六十時間にも及ぶハンストを中心とした学費闘争を闘いぬいてきた、最も先進的な学生十二名（春以来十四名）を彼らは告訴した。民青同盟の政治的破産が、教養部代議員大会に於ける教養部ストライキ実行委の勝利、十・二一を中心とした波状政治ストという形で明らかになる中で為されたこの告訴は、まさに政治警察の闘争圧殺攻撃に手を貸すものであり、その力を貸りて、組織的・大衆的破産をつくらねばならぬとすべきであった。

これに力を得た政治警察は、春以来の告訴・告発を口実とした学生の逮捕と同時に、九月以来三度の学内・寮内不当捜索を行ない、その略奪は自治会規約、自治会名簿にまで及んでいる。このことは、政治警察が、ボルシェヴィキ派の革命的な学生運動の圧殺・破壊に如何に懸命になっているかを示すに止まらず、その攻撃範囲が学内における複雑な政治地図、学生一人一人の政治傾向などきわめて広範に及び、緻密になされんとしていることを明らかにしている。

この日本帝国主義国家権力・政治警察とそれを補完する民間反動としての役割を完成した代々木「共産党」の新たな結託に対し、われわれは会組織を先頭に、あらゆる運動組織、更にサークル、大衆機関の重層的な組織化をかちとり、運動・組織両面からの対決を一層推し進めていかねばならない。またそれをなすきるために、われわれの政治の幅の拡大を、会組織の一層の思想的純化と組織力の強化を通して勝ちとらねばならない。

この後、京科大学では、教養部代議員大会、全学学生大会、更に選挙をへて、代々木「共産党」の指導する自治会執行部を罷免し、教養部自治会の臨時執行部と、全学自治会である同学会中央執行委員会が、「帝国主義の侵略・反動・抑圧と闘う戦闘的自治会の再建」をスローガンに確立された。

われわれは、こうした意識的な闘いの重層化を断固支持する。このような、組織化の全面的な展開を抜きにし

ては、日本帝国主義国家権力を打倒し、プロレタリア独裁を樹立して、プロ独期におけるブルジョア・小ブルジョア階級の策動、その影響力を確実に一つ一つ粉砕していくことができなければならぬか、帝国主義と城内平和を結び、そのことによつて、プチ・ブル階級を基礎にして、このブルジョア社会にかなりの地歩を獲得することに「成功」している代々木「共産党」との党派闘争にすら勝ち抜くことはできないだろう。言い換えれば、この代々木「共産党」との党派闘争に勝利することは、日本帝国主義の反動の要塞を落とすに等しい不可欠の条件であると共に、来たるべき日の重要な訓練の場と教訓を提供するものである。帝国主義の要塞は、それがもつ暴力装置の物理量や技術の精巧さとともに、その支配階級が生産するイデオロギーと、それに基づく市民社会の強力な統合、組織力というもう一つの武器をもっている。この要塞を落とすため、帝国主義の攻囲を組織するために、闘いの

そしてその機関の重層化、多様化をなしとげなければならぬ。資本主義に対する徹底した批判の展開を、その最高水準を革命的中核部分に獲得せんとするに止まらず、その獲得を基礎に、労働者階級と勤労階級にもちこみ、それぞれに合った段階で、それぞれに組織化することを、その作業を初めなければならない。

ところで同時に、この京大の例における闘いの前進が、わが会の京大細胞、そしてその指導するC戦線の組織的闘い、前進によって可能なものとなったことは言うまでも

もない。革命党の組織的前進が、こうした全域にわたる闘いの前進の鍵であることを忘れてはならない。

このことを確認し、弾圧、闘争破壊に手を貸し、それによつて運動の破産を弥縫し、組織の延命を図らんとする代々木「共産党」を徹底的に糾弾し、葬り去らねばならない。このことをやり抜き、これをわれわれの大きな教訓として、更に日本帝国主義の要塞奪取に突き進もう！

われわれは、この革命党の組織的前進のために、党員の思想的純化・強化と活動技術の獲得が決定的に重大であると考える。来るべき日本帝国主義内の革命党の建設のために、その一翼を担わんとし、闘い抜いているわれわれは、この強化・獲得に力を注いできた。とりわけ首都圏における政治警察との闘いは、例えば徹底した尾行・張り込み等、非公然活動の技術の習得なしには考えられないものになっている。六九年以来の革命的左翼の混乱の中で、このことに一切無自覚な諸君が横行する中で、われわれは、戦前の共産主義者の文献を京浜地区の反戦共闘機関紙に転載しながら、まず非公然活動の技術を習得せんとしてきた。しかし、今、われわれはこの技術を更に巧みなものにし、全国の各戦線で獲得する必要に迫られている。革命が、その決定的環・峰起において技術問題として扱えられねばならないことを想起するまでもないが、この問題意識は、われわれにとって重要な資格問題であることを確認しよう。日々の実践活動が、労働者階級解放の事業を圧殺せんとする敵権力との緊張関

係に規定されてあることも忘れてはならない。その上で、この技術を共産主義の思想と労働者魂で打ち鍛えよう！  
全国の同志、友人の皆さん！  
帝国主義の侵略・反動・民族抑圧に抗して闘う先進的労働者、学生に対する日本帝国主義国家権力！政治警察の弾圧は、ますます巧妙さ、陰險さ、狂暴さを増している。全ての諸君が、再度、政治警察との闘い、運動・組織の防衛を思想的にも技術的にも点検し、推し進められるよう要請したい。

権力に運動と組織を売り渡すような意識のルーズさ、不注意などをなくすこと、これはあらゆる革命運動の根本原則である。  
革命的警戒心を一層強め、政治警察との組織をかけての闘いに勝利し、今秋期の闘いの成果を打ち固め、帝国主義の要塞の正規の攻囲を大胆に推し進めよう！

## 五・七北熊本現地闘争、 獄中同志よりのアピール

一ヶ月余に及ぶ、獄中完  
黙闘争を、組織行動の一貫  
として貫徹し、一日も早く  
戦線に復帰できることを願  
って、現在理論学習に励ん  
でいます。  
七二年日本階級闘争の秋、  
われわれの、闘争を重ねる  
毎の組織的前進は、分散と  
混乱にあえぐわが革命派の  
隊列に本来の正規性を持ち  
込み、日本共産主義運動再  
生前史から本史への歴史を  
切り開く上において偉大な  
足跡を残しました。戦闘的  
唯物論を思想的武器に、ポ  
ルシェヴィズムの旗を高く  
掲げてのわれわれの、文字  
通りの力をふりしぼったの  
闘いこそ、八・二五、十・  
二一等の成功をもたらした  
原動力であり、革命的左翼  
内最左派の結束を強め、日  
本労働者階級解放の多くの  
戦線に、国際主義と団結の  
精神をしかと刻み込んだの  
です。  
敵権力はそれ故、われわれ  
に関して驚く程の情報を集中  
し、組織壊滅を意図して日常  
的に暗躍を始めています。私  
達の逮捕も、あの派兵阻止闘  
争の先陣を切った五・六一七  
現地実力闘争よりすでに六ヶ  
月余を経てのことであり、そ  
の執念深さを示しています。

しかし、弾圧とさそりのむ  
ちこそ、若きプロレタリア  
兵士の最良の訓練場なので  
す。連合赤軍敗北の教訓は、  
その比類なき英雄的精神と  
豪胆さとともにわれらが胸  
にあり、どんな搾取の現実  
から湧き上がるプロレタ  
リアートの階級の底力に深  
く立脚したわれわれの闘い  
の前進は、何者も推しとど  
めることはできないのです。  
ベトナム人民は最後の勝  
利に向けた決定的な勝利を  
わが手にせんとしています。  
すばらしいことです。しか  
し油断することなく虐殺者  
ニクソンへの更なる鉄槌を！  
来る日の決戦に備えて敵の要  
塞の正規の攻囲を組織せん！  
主義の侵略・反革命に死を！！  
ブルジョアの欺瞞や小ブ  
ルジョアのはかない願望に  
もかかわらず、和平ムード  
のすぐ後ろには、かつてな  
い激動の波音が響いています。  
社会主義と労働運動を結合し、  
帝国主義心臓部にプロレタリ  
ア革命党の真紅の火柱を！！  
さあ、同志よ固く結べ、更  
に固く結べ！

十二月五日

## 編集後記

◇ 全世界の労働者、被抑圧民族の解放を期して、日々、帝国主義の侵略・反動・民族抑圧と闘っている全国の同志達、そして、ボル通愛読者の皆さんに、『ボルシエヴィズム通信』第八号を届けます。

作成にとりかかってから様々の理由で、三カ月もの時を経てしまいました。遅れたことを心からお詫言

す。◇ ボル通第八号は、七号誌上で約束したように労働運動の特集です。他に平和台病院闘争の中間総括と阪神地区の金属労働者からの報告が寄せられるはずでしたが、間に合いませんでしたので、次号には必ず載せたいと思います。

◇ 労働者組織の建設が、様々の困難と試行錯誤を経験しながら、亀の歩みのようであつても、いくらかの地歩を獲得し、いよいよ本格的な取り組みの開始が要請されてくるにあ

たり、「労働戦線における基本任務」を明らかにすることは、われわれにとつて第一の理論的課題でした。この立場と、そして、わずかですが貴重な経験のいくつかを基礎に、既に各地で資本の攻撃に奮闘している革命的な、誠実な諸個人・諸グループと協力し、来たるべきプロレタリア革命党建設の闘いを、力の限り進めていく決意です。

◇ ベトナム人民が、その限らない英雄的精神と持久力を発揮し、決定的な勝利に向けて闘いぬいている、抗米救国の大攻勢の中で、この闘いと真に連帯し、それを、日本帝国主義心臓部における蜂起として現れた帝国主義の正規の攻囲として実現することをめざして創出された8・25共闘会議は、混迷する日本革命的左翼の戦線に、大きな波紋をなげ、この混迷を打ち破らんとする多くの個人・グループを結集してきました。わが会は、この新たな政治潮流の誕生と成長を、心から支持し、支援するものです。そして、国際主義と戦闘の大衆運動の復権を旗印とするこの潮流が、左翼戦線の混迷を打破し、来たるべきプロレタリア革命党建設に向けた闘いを、力強く支える翼に成長することを心から願うも

のです。

◇ 全国の同志たち！  
火花から、やがて焔が燃えあがることを知る兄弟たち！

パリの労働者が初めて獲得し、次いでロシア、中国、中南米、アラブ、そしてインドシナの無数の労働者、農民達が受けついできた英雄主義を、再びわがものとしよう。革命的樂觀主義と英雄的自己犠牲の精神を発揮して、あらゆる困難を打ち破り、ボルシエヴィズムの旗の下、日本共産主義運動の本史へ突き進もう！

◇ 東京の連絡先を変更しましたので、注意して利用して下さい。

◇ 尚、十二・十五政治討論集会にて、特刷版で購置された方につきましては、不足分百五十円を本に添えて返送いただければ、すぐにボル通第八号をお送りします。

ボルシェヴィズム通信 第8号

発行日 1973年2月1日

編集 レーニン研究会「ボルシェヴィズム通信」編集委員会

発行所 新思想社

東京都杉並区阿佐谷南3丁目47-3

すみれ荘内 鈴木方 TEL 03-392-0136

京都市左京区東竹屋町 京大熊野寮B棟307

TEL 075-771-6291

定価 300円